

---

# 2億光年の先で・・・・・

pettyo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2億光年の先で……

### 【Nコード】

N3087Q

### 【作者名】

pettyo

### 【あらすじ】

タスクは2億光年飛ばされた、孤立無援になったかと思われたが生存可能な星をみつけ、しかもそこには人が生存していた。

その人々と徐々に接触しコミュニケーションをとり、そこで生きていこうと考えた。

そして…。

「やっちゃまった！俺の責任だ！逃げるわけにはいかないぞ！この星を守らないと一生後悔する…」

日常と非日常をつまみ折り返いをつけて生きていこう！

恒星すら破壊できる戦力を持つタスクの、地上での生活（日常）& 宇宙での行動（非日常）の話です。

タスクにしてみれば、宇宙の方が日常なんじゃないかな。

## はじまり

人類が故郷の地球を飛び立ってからかなりの年月が経っている。

人類は地球を故郷として生まれ育ち、そして大宇宙に広がっていった。

幾多の星に移住し、1000とも2000とも言える星に住んでいた。

人類が住む上で最初から居住可能な惑星はほとんど無く、宇宙に進出したところは増えすぎた人口を養うことができないのでは無いかと言われていた。

はじめのころは、最初から居住可能な惑星を見つけてそこに移住していたからだ。

しかし、しばらくしてやはり『最初から居住可能惑星は少なすぎる！！』と言うことで、惑星改造技術の開発に本格的に着手することになった。

惑星改造の技術が確立したところから、今度は宇宙海賊の被害が出てきた。

惑星を改造するくらいなのだから、その資材の量は膨大だ。

技術も最新のものが使われている。それを狙ってきたのだった。

海賊対策として、護衛艦隊をつけることにさして時間はかからなかった。

宇宙暦 15756年 臨時惑星改造艦隊

「次の改造はどこかな？」

昨日まで行っていた惑星改造を終え、如月タスク艦隊司令は次の予定を確認しだした。

惑星改造が普通の技術として使われるようになってからすでに1万年以上がたっている。

今では惑星改造そのものが少なくなってきた、

銀河系は広く2000億の星はまだまだ残ったままだ。

如月タスクはそんな少ない仕事に従事する一人だった。

惑星改造は、今では護衛艦隊をつけなければいけない関係もあり軍が行っていた。

海賊行為は年月を経ても結局無くなることはなく、かといって軍事的な脅威と言えるような勢力でも無く、軍自体は縮小している傾向ではあったが。

「えーと、銀河中心方向に125光年先の……」

「ARRORR恒星系にある第6惑星です」

俺の疑問に副官のエリアスが答えてくれた。

「微妙な距離だなー」

「そうですね、でも次が終わるとしばらく休暇がもらえますよ」

「そうか！ では早く出発して、さっさと終わらせて休暇を満喫するとするか」

惑星改造は、今ではほとんどオートマシンで作業ができるようになった。

そして資材も改造している惑星から随時補充しながらで行っている。

簡単に改造改造と言っているが、実際に直に見ると圧巻のひとつである。

高さ数百メートルにもなる建設機械や、同じく幅が数百メートルもあるマシンが数十台稼働しているのだから。

それに伴い艦隊もオート化が進んでいる。

タスクの艦隊も人間と言われるものはタスク一人である。

エリアスは人型アンドロイド、アルティシファリクリエイト人工的に造られた者なのだ。

アルティシファリクリエイトと言っても外見だけではなく、話し方や思考も人間と区別がつかない。技術力の賜物である。

しかも結構美人タイプである、スタイルは好みとしてはもう少し胸が・・・、まあアルティシファリクリエイト人工的に造られた者だし関係ないか。

当然人間が居ないので、唯一いる人間が艦隊司令となる。

「それにしても、なんで急に惑星改造をこんなに続けざまにやらな  
いといけないんだ？」

「以前にも言いましたよ」

「そうだったっけ？」

「エリア113宙域から115宙域にかけての惑星で、人口爆発が  
想定されるからです！」

「はあ…、ポコポコ子供を作りやがって、俺なんてもうすぐ30になるって言うのにまったく話がないよ」

「指令は独り身が好きなのだと思ってました」

「そんなことはないよ、でも特にモテル努力はしたこと無かったな」

「指令は顔も悪いわけではないですし、どうしてなんですか？（良くもないけどとは言えないな）」

「まあね、職業的に今のご時勢軍人は人気ないよな」

「確かに、人気の無い職業ですよ。でもなんで軍人になったのです？」

肯定の返事とともに疑問の言葉が返ってきた。

「なんとなくかな、そしてそんな環境に慣れてしまったってことかな」

大きな軍隊は必要ではないが、それでも無いと困る。

でも募集をかけてもなかなか集まらない、募集担当官は困っていたがどうすることもできずにいた。

全部一アルティシフアクリエイト《人工的に造られた者》でまかなえばいいじゃないかと思われるかもしれないが、民衆心理としてそれは受け入れられなかった。

それには、数百年前におきた事件が関係していた。

その事件以降、機械による暴動などは金輪際ゴメンだ！と意見が浸透してしまっただ。

人間が居れば事件が起きない、となればなおさらである。

タスクは、なんとなく受けた軍には内定通知をもらい（まあ、軍は受ければ危険思想とかの持ち主でなければまず採用なのだが）、

軍に行きたいとも思っていなかったが、他の職を探すのも面倒で結局そのまま就職してしまった。

典型的な面倒くさがりである。

「さて、そんな話はどうでもいいから次に向かうとしますか、準備出来次第発進ということだ。」

「わかりました司令」

全長17900メートルにもなる旗艦ロプス、

それにドッキングする、惑星改造作業艇全長500メートル級が両脇とその後方に合計4隻、

宙域警戒のために広範囲に出していた自立思考型護衛巡洋艦10隻と同じく自立思考型護衛駆逐艦40隻の半数をロプスに収納、残りを護衛の為旗艦の回りに配置していく。

すべての準備にもうしばらくかかりそうだ。

巨大な窓から格納しようとしている戦闘艦を見ながらタスクは「準備できたら起こしてね」と言い残して寝室に向かった。

「司令、起きてください、準備完了しました」

エリアスが艦橋からのインカムで起こしてきた。

「んんー・・・ハイハイ わかったよー」

少し伸びをしながらベットから体を起こし返事をした。

艦橋に戻り「何か変わったことはあったかな？」とエリアスに声をかけた。

「銀河中心方向よりいつもより強いエネルギー流がきていますが、航行には影響は無いようです」

「そうか、では出発するか」

「ハイ」

ひとつ息を吸い込んでから俺は声を発した。

「発進！」

掛け声から10秒ほどして船体が動き始めた、艦が巨大なため動き始めるまで若干時間がかかってしまう。

対G吸収装置があるので体感ではわからないが膨大なエネルギーによる急速な加速である、随行している護衛艦との距離が微妙に動いているのを見て船体が動いているのを感じることができる。

移動しだしてから2時間ほどして、

「司令」

「なんだ？」

俺はエリアスの声に返事を返した。

「前方に空間湾曲があります、先ほどのエネルギー流の影響かと思われます」

「まずい状況なのかな？」

「ハイ 記録としては4279年前に確認されたものと酷似しています」

「へ？なにそれ？」

俺はちょっと間抜けな声を出して返した。

「4279年前の空間湾曲の現象は当時の第3艦隊が遭遇して、飲み込まれたとあります」

「それで？」

「ハイ、それで空間跳躍現象がおきて銀河中心をはさんだ丁度反対側に出たとあります」

「それはまたずいぶんと」

宇宙時代に入りワープ航法は確立されて、ある程度の距離はごく短い時間で移動できるようになっていた。

それでも技術力の限界に行き着き、ワープ航法の一回の最長飛距離は3万光年が限度となっている。

「ハイ その現象で特筆されることは、私たちの行っているワープ航法とは違いました。たくのタイムラグ無しで飛んだと言う事です」

ワープ航法はたしかに一挙に数光秒から数万光年を跳躍できるが、それでもまったく時間がかからないわけではない。

距離が長くなればそれなりに時間がかかるのだ。大体1万光年3ヶ月ほどかかると思ってもらっていい。

ワープ中は船内でその期間、ヒマをつぶしながらす過ごさないといけない。

先ほどの話では、どこから飛んだのかはよく解らなかったが、人類の生存宙域分布から考えると最低でも4万光年は飛んだことになる。そんなことを頭のなかで考えていた。

「なんと！？ それはまたすごい話だ、具体的にはどれくらい飛んだのかな？」

「ハイ　A A A I O A 恒星系からですので約5万2千光年ほどです、第3艦隊は地球圏管理宙域まで戻ってくるのに約1年4ヶ月かかりましたそうです」

俺は少し唾を飲み込んだ、

「そんなののに飲まれたらたまったものじゃないな、逃げなきゃ！」

「ハイ　わかりました指司令」

すぐに旗艦ロプスと護衛艦は方向を変えだした。

変えだした直後エリアスから妙に冷静な声きた。

「司令、湾曲が広がってます」

「なんだって？、逃げ切れるか？」

「エネルギー流が広がりを加速しているようです、あと2分30秒でつかまります」

「緊急ワープ間に合うか？」

「先に方向転換にエネルギーを使ったので間に合いません、前もってエネルギー充填していなかったので無理です」

「なんてこった、つかまったら俺も戻るのが何年もかかるんじゃないか！？」

「その可能性は高いです」

冷静な声でやはり返される

「くそー！」

なんだってこんなときに冷静な声で言ってくるんだ、もう少しつもみみたいに感情が感じられるように言えないのか！？とどうでもよいことを思いながら旗艦ロプスと周辺の艦が飲み込まれていった。

## はじめり（後書き）

慣れていなく読みにくいこともあると思います。

あたたかく見ていただければと思います

ジャンルとかキーワードとかおかしなところがあれば教えてもらえれば幸いです。

なにぶん初めてなのでこの投稿もおっかなびっくりしています。

## 2 話目

一瞬で艦隊は飛ばされたのだろう、宇宙空間では周りの景色が劇的に変わることはほとんど無く、飛ばされたのがまったくといっていいほどわからなかった。

それでもついさっきより、なんか星の見えるのが少なくなったかな？と感じた。

「エリアス!？」

少し大きな声で呼んだ。

「ハイ、少しお待ちください、現在宙域を計測中ですので！」

さっきまでとは違う、少し緊張感が感じられる声が返ってきた。

「わかった」

エリアスに返事を返すと同時に艦隊の状況確認も考え旗艦に話しかけた。

「ろぶす! 艦隊の現状確認と状況報告」

ロプスにもアル人工的にティシフアリクリエイトと同様に言葉による「ミニ  
ニケーションがとれる。」

ある意味艦船の体をもったアルティシフアリクリエイトコンピュー  
タである。

もちろん本業は旗艦及び艦隊の管理だが。

「わかりました、駆逐艦の3隻が不明です、それ以外は変化ありま  
せん、艦隊の配置と艦列を表示します」

少し目線を上げたところに3D表示された。

「なるほど、艦数は減ってるが損傷はないな、巡洋艦10と駆逐艦  
37だな」

「はい」

「不明艦はどうした？」

「一緒にこちらにこれなかったか、移動瞬間に他に飛ばされたと予  
想されます」

「そうか・・・」

「司令」

エリアスが横から声をかけてきた。

「現在宙域がわかりました」

「ああ！それで？」

「ボイドをはさんだ 503 星団の外周にある恒星系のようです」

「ハ？エ？なにそれ？」

「ですから、ボイドの向こう側に出ました」

「えっと、理解したくないところなんだけど」

「簡単に言うと2億光年飛ばされました」

「そんなバカな！！！」

タスクが生きてきた中で一番の衝撃だった。

「司令！ タスク司令！」

「ン？ア？」

「宇宙艦隊司令本部に連絡をいれますね」

「……………ワカタ……………」

心ここにあらずな返事が帰ってきた。

「タキオン通信ですから、すぐに向こうから返事が返ってきますよ、少しはシャキツとしてください」

「……………アア……………」

しかしやはり反応が鈍い、まあ仕方ないか。

ここまで飛んだと言うか、来た人類はいない、単純に考えても地球圏管理宙域まで最短で2500年かかる、それも直線距離でだ。

実際にはポイドを通って行くにはエネルギーと食料の関係でできない、ポイドの周りにある星団星雲を渡り歩くので概算で4000年近くかかると思われる。

それもトラブル無く、すべて順調にいったとしてだ。

タスク司令が生きてるうちに地球圏に戻れるのは確率的に皆無どころか完全な0%だ。

空間湾曲も現在はまったく観測できない、片道通行だったようだ。

仮に湾曲があったとしても元の場所に帰れるとは限らない、事実4279年前の第3艦隊は約1年4ヶ月かけて地道に戻ってこざるを得なかった。

「なんでこんなことに・・・こんなところに・・・」

指令の独り言が聞こえてくる、人工的にアルティシファリクリエイト造られた者の私は時間さえかければ戻れるだろうが、人間には寿命があるから帰るはるか以前に棺おけの中だ。

「司令、本部から返信がきました」

「ハア・・・わかった」

のろのろと通信に応じ始めた。



### 3 話目 本部

#### タスクオン通信

「ずいぶん遠くに飛んだようだな、体に異常はないか?」

指令本部の50才を少し超えたくらいのスキウエル大将が言った。

「はい、先ほどからすべての管理項目と身体チェックを行っています  
が、今のところ問題はないようです」

「そうか、それはよかった」

なんともヒトゴトのような言葉である、事実他人事なのだろうが。  
なんともハラが立つ。

「よくは無いです!どうしたらいいのですか!」

「ま、どこかに腰を据えて気ままに暮らしてくれ」

「・・・はあ?」

「どこかに腰を据えてだな、長期休暇取ったとでも思って生活してくれ」

簡単に言ってきた。

「なにか対策を検討するとかないのですか?」

「ない」

即答だった。しばしの沈黙・・・

「無いって！、まだ何もしてないじゃないですか！」

「何かしようにも、この事案については前例があるので結論がでて  
いる。対応策は無い」

前例がある？どついうことだ、意味がいまひとつ解るようで、でも  
わかりたくないような。

「実はな、今までにいくつも前例があるのだ」

「は？いくつも？そんな話は聞いてませんよ!？」

初耳でしかもかなり大事なことを当然のように聞かされた。

「4000年以上も前の事例は知っているな」

ある意味確認のような問いかけだった。

「はい」

「あれが最初の事例で、その後の事例は当局が極秘扱いにしてすべ  
て非公開にされた」

「非公開って、どうしてそんな」

理由としてはこうだった、

最初の事例は戻ってこれたから良かったが、次からの事例は帰り着くまでに500年とか600年とかかかり、帰り着くことができないということだった。

人権尊重や人命重視、自然回帰、節約経済、大型公共事業、など色々な主義主張、予算とも考慮した場合、

安定した政治運営を行うために、帰ってこれる距離に飛ばされた事例以外は公開しないと決まったのだそうだ。

そして、帰ってこれなくなってしまった人たちは飛ばされた先でそれぞれ独立となったとのこと。

しかし中には、と言うよりほとんどは丁度良い定住惑星を見つけることができず、今でも宇宙船生活をしているようだ。

そして今までの中で俺が一番遠くまで飛ばされた。

「幸いにも今の君の境遇は他の人たちに比べてかなり良いといえる」

「良いつて言えるのですか！、この状況で」

「何を言っている、今までの事例では君ほど充実した装備で飛ばされたのは最初の第3艦隊くらいだぞ。」

他のはかろうじて酸素があるくらいで、食料確保にもものすごい苦勞しているぞ。

最悪なのは、食料もなくなり、空気もなくなって音信不通になったものもあつたのだぞ」

逆切れのように言ってきた。

たしかに、そういうのに比べれば良かったのかも知れない。

俺の場合は色々とやることはあるが、艦隊はあるは、惑星改造をすることもできるは、酸素や食料、身の安全の確保については問題無いと言える。

言うことはたくさんあるが最終的には本部にもどうすることもできず、俺も本部に対してどうすることもできず、飛ばされた先で生きていくしかないと言う事になってしまった。

そして、艦隊運営に関するすべての拘束事項をはずされ、俺にすべての決定権が委譲された。

これは2億光年も飛ばされて、もし地球にお伺いを立てなければいけない事態に陥った場合、その時間が命取りになりかねない場合が

あるかもしれないとの判断からだ。

そしてもうひとつ、これだけ離れていればどんなことをしても、例えば惑星を破壊しようが恒星を破壊しようが地球圏にはまったく影響がないからだ。

俺はこんな飛ばされた宙域で「臨時惑星改造艦隊」と言う名の国家の元首になったようなものだった。ただし元首一人、人民一人他アンドロイド多数だが。

それにしても逆切れはないだろう、こっちは一方的な被災者なのだから。

3 話目 本部（後書き）

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

## 4 話目 探索と不安

あのあと1時間以上にわたって言い合っただがどうにならないことに変わりは無い。

本部とのやり取りの翌日（宇宙空間で翌日なんて判断はあいまいだが）、冷静になってきた。

さて、周辺宙域の索敵でもしますが、

「エリアス、周辺宙域と近隣の恒星系の探索を頼む」

「わかりました」

こういった会話があるからまだ大丈夫だよな、もしこんなでも無かったら孤独感に押しつぶされるんじゃないだろうか。

「現在宙域の恒星系の他に、すぐに探査可能な恒星系が4つありますね、分散して調査いたします」

「ああ、わかった、それにしても 503 星団だけ？そこのはずれの宙域なのに恒星系がいくつもあるな、密集宙域なのか？」

「はい、そのようです」

少し明るく返事をしてくる、俺の気持ちを考えて気を使ってくれているようだ。

続けて言うてくる。

「運よく居住可能な惑星とか改造すれば住める星があればいいのですが、むしのいい話ですかね」

「だよなー、そうそう居住可能な星があるわけでもないからな」

少しでも期待があるように言うてくれる。

るぶすから

ロプスは巨大な船体を省エネモードにて稼働させるために一番近い恒星に近づきつつあった。

エネルギーに問題が無い場合は波動エネルギーとタキオン粒子エネルギーの併用なのだが、今のような状況の場合少しでも節約したほうが良い。

「タスク司令、省エネルギーモードに移行するため光エネルギーも併用しようと思います、恒星に少し近づく許可を」

「るぶすか、わかった、変化があった場合はすぐに教えてくれ」

「了解しました」

るぶすは少し不安を感じていた、コンピュータなので不安と言うのは少し違うだろうが。

正確には銀河系に居たときとの些細な違いだろうか、空間密集とそこにある気体の密度、恒星と恒星の距離やその密集度、

銀河系でも同じような宙域はある、しかしこの宙域はその頻度が高いように思われる。

そう、思われるというだけで明確なおかしさではないのである。

それでも指令には伝えるべきだろう。

「司令」

「なんだ」

「この宙域における計測可能な数値で特段事項はないのですが不安のようなものが感じられます、早いうちに他に移動するのがいいかと具申いたします」

「ろぶすがそんなことを言うてくるのは珍しいな」

私もこんな漠然とした理由で指令に意見具申するのは初めてだと記憶している。

「わかった、光エネルギーの補充ができたら移動しよう」

「ありがとうございます」

良かった、これで少しは不安の解消ができる。

エリアスも少し怪訝な顔をしていた。



## 5 話目 惑星

タスクi n艦内

こんなにいろんなことがあったんだ、お腹もすくわな。

ロプスの巨大な船体は色々な施設がある、惑星改造用の機材が無ければ移民船として使うことも考慮されていたからである。

しかし実際には機材にほとんどのスペースを取られている。

巨大な格納庫の一つを横目に食事を両手にもって独り言を言いながら歩いている。

どこで食べようかウロウロしているのである。

「司令！至急艦橋へ！」

エリアスのかなりあせったような声がスピーカーから聞こえる、どうしたんだ？

「居住可能な惑星がありました、すごいです！」

え？居住可能？ものすごい確率じゃないか！

「わかった、すぐ戻る」

俺はその場で声を上げて返事を返した。

宙図を表示しながら、「司令、この惑星です」

エリアスは興奮気味に話してきた。

アル人工的にテイシフアリクリエイト造られた者とは思えない感情表現である。

わかりやすいように3D表示ではなく2D表示だった。

「2つ隣の恒星系かな」

「そうですね、距離にして97光年ほど、時間にして21時間ほどの距離です」

それは思ったより近いと感じながらももう少し話を聞いてみた。

「それに生物もいるようです、高等生物の可能性もあります」

「10億分の1以下の確率じゃないか！」

俺はかなり興奮してきて、エリアスに指示を出した。

「すぐに向かおう！エリアス、準備してくれ、るぷすはどうか行けるか？」

「はい、大丈夫です光エネルギーも十分です、いけます」

居住可能な惑星と聞いてワクワクしていたが、それでも21時間を続き続けていることはできず、結局司令官席で寝てしまった。

眼が覚めると仮眠室だった、エリアスらが運んでくれたようだ。

艦橋に戻り状況確認をした。

「おはよう、状況は？」

「お目覚めですか、もう少し寝ていても良かったですよ」

そう前置きしてきてから説明してきた。

「あと2時間で目標の惑星の衛星軌道に入ります、3番目の衛星ですけど」

「3番目？いくつか衛星があるのか？」

「はい、説明していませんでしたね、全部で3つの衛星があります、

「一番内側のは直径が約9キロの衛星です」

「ロプスより小さいのか」

「はい、巨大な岩と言ったほうがいいかもしれませんが、2つ目は直径が約1200キロのほぼ球状です、最後が一番外側の直径約400キロの楕円衛星です」

「一番外側の衛星付近に待機して惑星の調査を行うのかな？」

「はい、それがいいかと思うのですが、いかがですか？」

「問題ないんじゃないかな、もし高等生物がいたとして、もし接触できるほどの文明があったとして、ていうか文明レベルはこちらのほうが低いってこともあるんだよね」

「はい、その可能性もありましたが、その後の観測からかなりの確立でこちらの文明レベルより低いことがわかっています」

「なるほど、ともかく不用意な接触は避けるとしようか」

「わかりました、優先事項の一つとして徹底させます」

衛星軌道に入り、その後の調査でぞくぞくと新しい情報がもたらされてきた。

まず、惑星の大きさは地球よりほんのわずか小さい、誤差と言って

よい範囲ではあるが。

海と陸があり、比率は8：2、地球より海の比率が大きい、大気的成分も酸素があり窒素があり、地球のものと良く似ていた。

正体不明な気体物質もあるが、人体には影響が無いこともわかった。そして一番の関心事が、どういった生物がいるかである。

炭素系生物が確認され、珪素系生物も確認された、人間らしき生物が町や村などを形成していることも確認された。

「人間は社会的な生き物である、実践できるかな」

期待が少しずつふくらむ。

「司令の言わんとするところはわかりますが、言語が不明なのでしばらくはコミュニケーションはできないかと思えます」

「確かにそうだった」

うなづくしか無い点を指摘されて少し残念だ。



## 6話目 地上に家を！

調査の結果人類と告示した生物を確認し、そして人間らしき生き物は分類的に見ても人類とほぼ同じようだ。

血液成分で若干の違いはあるが、やろうと思えば子孫を残すことも可能である。

生物に関する調査はそれなりに進んでいったのだが、言語の調査に関してはなかなか思うように進まない。

なぜかと言うと、もともと調査専門部隊では無かったからである。

現地人を拉致するわけにもいかず、どうしたものか困ってしまった。

「仕方ない、言葉についてはのんびり調査しよう、俺は地面にある建物で寝たい」

目の前に地面があるのに降りることができないなんて我慢できないのだ。

「では地上に司令用の住宅を建設いたします、何か希望はありますか？」

「そうだな」

少し考えて、

「まずノンビリしたいので人目の無いところがいいかな、仮に人と出会っても言葉が通じなければ意味が無いからな。あとはそうだなー、あんまり大きくなくていいぞ、大きいのはロプスだけで十分だ、ある意味俺の本当の家はロプスだからな」

「ありがとうございます」

るぷすが珍しく会話に割り込んできた。

本当の家と言われてうれしかったのかな？

「わかりました、18時間で準備します、お待ちください。気候もそこそこ良くて少しばかり人里の離れたすこしやすい地域を探し出します、お楽しみに」

惑星改造が本職の部隊構成と機材である、整備や建設はもつとも得意な分野である。

「明日の夜は地上で寝れるかー、いやー良かった良かった」

俺は地上時間の早朝、地上に降りた。

転送で降りることもできたのだが、エネルギー消費の面で止めていた。

転送と言ってもワープの応用で極近距離ワープをするようなものだが、距離の差がエネルギー消費に比例するわけではなく、近距離で使うにはあまりにも非効率であった。

それに送ることはできても、帰るには現地に同じくワープ装置がないとだめだからだ。

緊急以外では使うのは止めておこう。

さらに人里から離れた地域なので、見られる可能性も無いと判断し転送を使わないで降りたのだ。

駆逐艦で地上に降りたのだが、駆逐艦でわざわざ降りたのにも理由があった。

エリアスの話では「ドラゴンのような外見の凶暴な生き物がいます、

大きさ的には小型艇では危険かもしれませんが、念のため戦闘艦を使つてください」とのことだった。

そんなものが居るのかと思ったのだが、危険はできるだけ避けるべきである。

最終的には駆逐艦1番艦で降りることとした。

ドラゴンのようなものの攻撃力が解らない場合には、間違いなく安全であると思われる戦力で行くべきである。

「沼か？湖か？」

現地上空に着いて最初に声に出したのはそんな疑問だった。

あたり一面森に囲まれた中に濃い青色の水面が見えたのだ。

「小さい湖と言う感じでしょうか、外周約1キロあります」

答えてくれたのは指揮官アルティシファリクリエイト造られた者として艦隊に配属されているアポロである。

「泳ぐこともできません、水自体は地球のものと同じですから。しかし…。」

「そりゃーいいな、久しぶりに泳ぎたいな」

「泳ぐにはもう少しお待ちください安全対策がまだですので、生息動物に思った以上に危険なものが多いようです」

「そんなにいるのか、ドラゴンみたいなのだけじゃないのか？」

「はい、建設で来た第1部隊は、到着した当初現地生物にしばしば襲われていました。簡単に撃退はできたのですがそれでも何も準備していないのは危険です」

まだ色々と制約はあるようだ。

こんな会話をかわしながら湖の東側に降りていった。

湖畔ではかなり広く木を切り倒し、整地して建物を建て始めていた。

思ったより広いな、もう少しこじんまりしていてもいいかな。

駆逐艦の関係もあって広くスペースを取っているけど、湖底とかに待機させれないだろうか、

かなりの広さをとってしまっし、いつも目に付くところにあるのは気になって仕方が無い。

エリアスとアポロにあとで相談しよう。

そんなことを考えていた。

建設作業は順調に進み昼過ぎには建物は出来上がり、内装にとりかかっていた。

天気も良く、周りを散策しながらノンビリしていた。

こんなゆっくりしたのは久しぶりだなーなんて思いながら・・・。

その後、言葉については地道な調査の成果もあり10日ほどで解決した。



## 7話目 私だって地上に降りたい

エリアス in 衛星軌道

言語の調査と同時に文化・技術力の調査も行っていたが、どうにも不可解を感じている。

いくつかの国と思われるものがあり、王政とおぼしきものをしているのがほとんどである、

町並みや生活水準を見ると、地球で言うところの西暦の15世紀前後に近いといえる

交通は一般には徒歩と馬に似た動物、何種類かあるようだ。そしてそれに引かせている荷車などをつかっているようだ。

作物にしても栄養価が高いとはいえず、栄養失調が常になっている地域もあるようだ。

ある意味太古の地球文明を見ているかのようだった。

そして不可解と思われる原因を突き止めた、

思いもかけないことだった、特殊能力を持っている人間が数多く居

るということだ。

特殊能力、地球圏では超能力として認識されている。

この文明のレベルでは、超能力と言うより魔法みたいに思ってしまうだろう。

ここでの人口比率は多分50：1以下だろうと推計される。

ものすごい高い確率で居るのではないだろうか。

能力的には小さな火をおこして家事に役立てるとか、小さな風をおこして庭掃除をやったりといったレベルである。

中にはもっと強力な力を持っている者もいるかもしれないが調査の範囲ではそれ以上のを見ることは無かった。

まあ、どんなに力があっても所詮は一人が作り出す力、限度があるだろう。

さて、この調査報告を司令に伝えないと。

今日も地上でノンビリ昼寝でもしているのかな。

そういえば地上に降りてから10日だ、たまには顔でも見に行こうかな。

そう考えながら降下準備をはじめた。

「ろぶす、あとをお願いできるかな」

「わかりました」「こんな会話を交わしながら降りる準備をはじめた。

タスクin地上宅

エリアスが降りてきた、どうしたんだ何かあったのかな？

小型艇から降りてきたエリアスに声をかけた

「ひさしぶり、どうしたんだ？」

「はい、いくつか調査報告のために来ました」

「それはわかるが、わざわざ降りてくるほどのことでもないだろうに」

「それはそうかもしれませんが、私も地面に立ちたかったですからいいじゃないですか」

なんともアンドロイドらしくないセリフが帰ってきた、ほんと人間と同じようなものだな。

「まあいいか、中に入って報告を聞こうか」

「はい」

建物の外見はかなり豪華な邸宅といった感じた、中身は超科学の材質でできていて1000年以上持つような素材だ、

衛星軌道にいるロプスと連絡がとれるように機材があり、周辺には防衛のため邸宅を中心にエネルギーシールドが張られている。

上空との行き来には、小型艇でも大丈夫なように誘導ビームとその保護シールドが展開できるようにこの10日間できるようになっていた。

大広間でソファーに座りながら話を始めた。

「それでどうだった？」

「はい、この惑星の文明レベルですが、おおむね西暦の15世紀前後と似ています」

「数万年前と同じかー」

「しかし、地球とは違い特殊能力者が多いようです」

ちよつと驚いた。

「超能力みたいなものかな？」

「はい、そうです。まあ特殊能力みたいな人が多いと文明の発展は遅くなりますよね。

何かを発明しなくても、ある程度のこととはできてしまつわけですから」

「たしかにそうだな、『必要は発明の母』っていう古代からの言い伝えもあるくらいだ」

「そうですね」

その後言葉のキャッチボールのように会話が進んでいった。

20分ほど話が続き、口頭での報告が終わりに近づいてきた。

「他に重要なことは？」

「重要項目は以上です、あとは細かいことが多数あるのでそれを見ていただいて、解りにくいことを補足説明させていただくような感じですよ」

「そっか、わかったゆっくり見ていくよ。」

それで言語についてなんだが、どうだ？」

「はい、それについては日常的な範囲では調査完了しています。」

圧縮記憶注入できるよう準備はできていますが、ほんとに現地人と接触されるのですか？」

「そのつもりだよ、こんな果ての宇宙でもう二度と人間に会うことは無いと思っていたのに、思いもかけずこんなことになったのだから会わないなんて考えられない」

そうだよ！もったいない！心の中で強く叫んでいた。





## 7話目 私だって地上に降りたい（後書き）

投稿の仕方を間違っていたらしく昨日投稿したつもりができていませんでした。

2〜3話以上書き溜めてから投稿しているので、昨日投稿できなかつたので4話以上たまってしまいました。

誤字脱字、感想あればお願いします。

8話目 要求はのんでもらいます！

エリアス on 地上宅内

たしかにタスク司令の気持ちもわからないわけではない。

ではこちらの要求も飲んでもらわないと。

「わかりました、司令の言うことも人間としてもっともです」

「そうだろ！」

なんか勢いのいい返事だなー。

「でも安全のための装備は必ずしていつてください」

「危険なのか？」

ちよつと不安な感じの言い方だ、こんな未開のところなのだから治安が行き届いてるわけでもないでしょうに、ちよつとは考えてくださいよ。

「そりゃそうですよ、治安維持が地球圏と同じ水準なんてありえませんが。」

脳波連動防御フィールドとロプスによる完全バックアップ護衛体制は承諾していただきます」

「それくらいだったら身体の行動に不便が無ければまったく問題ないよ」

「ありがとうございます」

防御フィールドは最大レベルでも稼働できるよう万全の準備をします。

ロプスとの連動で亜空間フィールドを使ってエネルギーをダイレクトに送ろう。

「ここより東の方向に約8キロほど行けば小さな村がありますので、まずはそこがいいかと」

「そこが一番近いんだろ、しかしエリアはなんでも準備万端で助かるよ」

「そりゃ副官ですから」

ちよつと胸をはって言ってやれ、私のありがたみをわかってちよつ  
だいな。

その後順調に現地の人々との接触が行われた。

最初は単にどんな感じなのか見に行っただけだったが、その後は交  
流を持つために大きな町からきた商人と言う触れ込みで現地に違和  
感のない物を持ち込んで売りにいった。

最初のころは邸宅の回りにある木の実や自然にできている芋のよう  
なもの、地球圏では自然薯といった感じだろうか。

味は思ったより甘みのあるものだったが、良く似ていた。

他には工作機械で作ったガラスの小物のような物を持っていったり  
した。

それらを持っていくと珍しがられて思ったより早くうちとけることができた。

そして、こちらの素性に疑問を持たれないように気をつけるのは忘れなかった。

**8話目 要求はのんでもらいます！（後書き）**

一回の長さはまちまちです、

区切りで投稿しています。

ご都合主義なところもあるのは勘弁してください、どこかにヤマ場があると云う訳ではないかもしれませんが。

## 9 話目 インフルエンザ（前書き）

今回は人との交流です。

ここまで交流できるようになるまでも少し話的に考えていたのですが、とりあえず一気に1〜2ヶ月進めた感じの時間軸にしました。

それにちよつと話が強引なところもあります。

うちとける過程の話はいずれ投稿しようと思います。

## 9 話目 インフルエンザ

前回より数十日後、タスクイン村の定期市場

この村に定期的に来るようになって5回目だ。

昼食時が終わって少ししてからだった、

「タスクさん、いつも思っていたのですがこの木の実はどこから取ってきてるんだい？」

村人の女性から声をかけられたのは、40歳くらいだろうか現地としては恰幅がよく見える。

ここは村の中央にある広場で、10日に一回開かれている市場と言うかフリーマーケットのようなところだ。

その市場が開かれるのに合わせて村に1〜3日訪れ、露天を出していた。

「これはマシユリーさん、どこと言われても森に入って取っているのですよ」

マシユリーさんはこの村では年配のほうだ、村長夫妻の次に年配と  
いっていい。

「でもこの木の実ってこの近辺の森の奥にしか無いって聞いたこと  
があるんだよ」

そうだったのか？ちょっとあせった。

「そうなんですか、でも現にここに他で取って来たものがあるじゃ  
ないですか」

動揺を隠しながら言った。

「そうだねー、まあその話を聞いたのも何年も前だからね、あんま  
りあてにできないかね」

「そうですね、あはは」

「それはそうとタスクさん、薬つてないのかね？最近風邪が流行っ  
てるみたいで寝込んでる人が多いのさね」

「そうなんですか、わかりました、たしかエリアスが何か持ってた  
はずなので聞いてきますよ」

「いつも仲良しでうらやましいよ」

「そうですね？」

そんな会話をしながら護衛として連れ来ているアポロの部下（まあ、  
俺の部下でもあるわけだけど）に店番を任せて宿屋に向かった。

宿屋に戻りエリアスに声をかけた。

「エリアス、薬って持ってきていたと思うがどこだったかな」

「薬ですか、ここにありませんよ」

そういつて荷物箱の一つをさして教えてくれた。

「司令、薬ってどうするんですか？」

「ああ、マシユリーさんに頼まれて薬はないかってな」

「そうなんですか、判りました私も一緒に行きます」

「いや、薬だけ渡してもらえれば大丈夫だよ」

「そうはいかないです、いくつかの薬の現地人への影響は解析済みなのですがまだ全部は調べ終わってないんですよ」

「そうなのか？そりゃ一緒に来てもらったほうがいいな、頼む！」

「はい」

エリアスが箱を抱えて俺の後ろについて部屋を出て行った。

「マシュリーさん、薬もって来ましたよ」

エリアスが声をかけた。

「ありがとう、それでどんな薬があるんだい？」

「エリアス、説明してあげてくれ」

「はい、わかりました。マシュリーさん症状はどうなんですか？」

少し思い出しているようだ。

「熱がかなり高くて、それと咳が止まらない、長い人で4日以上続いている人もいたよ」

「4日もですか」

「そうだよ」

エリアスは少し考えているようだ。

「熱はどれくらいですか？」

「どれくらいって言われてもねー」

体温を測る習慣がないのかもしれない。

「わかりました、一度見せてもらえますか」

「そうかい、でも何人もいるんだよ？」

「そうなんですか？わかりました人数が多いのでしたら急いだ方がいいでしょう」

「わかったそれじゃ早速ついてきてちょうだい」

「司令、そういう訳でちょっと行ってきますね」

「わかった、あとでどうだったか教えてくれ」

「わかりました」

エリアスとマシューリーさんは俺から急ぎ足で離れていった。

エリアス s i d e

何人もいるって、何が原因かしら？

「何人くらいいるんですか？」

歩きながらマシュリーさんに声をかけた。

「そうさね、子供から大人まで全部で30人以上いたと思うよ」

歩く早さを変えずに答えてくれた。

「けっこういますね、何日くらい前からなんですか？」

「あんたらがこの前来て、帰っていった4・5日後だったと思うよ」

「そうですね、他に気がついたことがあったら教えてください、どんな小さなことでもいいですから」

「そうかい？あとどんなのがあったかね、えーっと」

その後症状についていくつか思い出してもらい出来るだけ詳しく聞くことができた。

「カリネ、ちょっといいかい」

寝込んでる人がいる家の前まできてマシユリーさんがドアを叩きながら言った。

少しして中から30歳前後に見える女性が出てきた。

「マシユリーさんいらっしゃい、どうしたんです？」

疲れた感じがする、看病疲れだろうか。

「薬を持ってる人がいてね、ガレリアに飲ませてあげたいと思ってきたんだよ」

「そうなんですか？」

嬉しそうな声をあげた、そして私に向かって「ありがとうございませす」と声をかけてきた。

「お子さんを見せていただけますか？」

「はい、どうぞこちらです」

力の無い返事だ、案内されて家の奥に入っていた。

女の子がベットに寝かされていた、年は10歳を越えたくらいだろうか、目はうつすらと開けているが見た目にも朦朧としている感じがする。

健康なときに見れば愛らしい印象を受けただろう。かわいらしいのがわかる。

「ガレリア、薬をもってきたよ」

「お母さん？薬？」

声に力がない。

「見せてくださいね」

そう言ってカバンの中から小型銃のような形をした簡易診断装置を手に持ち、女の子に向けて身体スキャンをしていく。

マシユリーさんとカリネさんは少し不思議な表情をしている。

「なんだいあれ？」

「私が解るわけじゃないじゃないですか」小声でそんな会話が聞こえてくる。

スキャンをし終わり10秒ほどで診断結果が出た、インフルエンザだ。

「この病気でしたら効く薬があります、ちょっと待ってください」

適合調査が済んでる薬でよかった、そう思いながらカバンの中からインフルエンザ特效薬を出した。

「あるんだね、よかった」「治るのですか？」「マシユリーさんとカリネさんが同時に言ってくる。

「この薬です、水と一緒に飲んでください」

小さな丸い錠剤を渡した、

(指令にはナノマシンの補助があるから効きが早いだろうけど、この人たちには補助がないから効くのに少し時間がかかるかな？それでも半日もあれば効くはずだ)

カリネさんは薬をお子さんに飲ませながら「治るんですか？」

さっきと同じことを聞いてくる。

「明日の朝には熱は下がってると思います」

「よかった・・・ありがとうございます」

感謝仕切りだ。

「他にも居るんですよ、次の方のところに行きましょう」

「わかったよ、じゃあカリネ、村中回るからこのへんで」

「はい、ありがとうございます」

家の外に出てマシユリーさんに聞いてみた。

「他の方も同じ症状なんですか？」

「そうだね、同じ感じだったと思う」

「わかりました、急ぎましょう」

その後村中を回り全員を見て回った、インフルエンザだった。

帰り道でマシユリーさんから、

「みんなのところで最初に使っていたあの手に持っていた物、なん  
だい？」

簡易診断装置のことかな？

「あれですか、患者さんの病気を調べる物ですよ」

「？魔道具なのかい？」

（魔道具？なんだろ？よくわかんないけどこんなはずれの村の人でも知ってる物なんだから一般に結構知られている物なのかもしれない、適当に話を合わせた方がいいかな）

「えっと、そうです、その魔道具ってものです」

「やっぱりそうだったのかい、タスクさんはあんなのも扱っているのかい？」

「扱っているというか、たまたまです」

（魔道具と言うものがどういうものか解らないから司令がたまたま持っていたってことにしてしまおう、もし返事が出来ないレベルまで話がいったらあれだけしか無いってことにしてしまおう、それができる範囲で情報も収集しないと）

「しっかし、魔道具って便利だね、病気がわかったりするんだからね、他にはどんなのあるんだい？」

「どんなのがあるって言われても、あれしか見たことがないので・・・」

「そうかい、あんなの持ってるんだから他にも色々扱ったことがあ

ったのかと思つたよ。魔道具つて遠くと話をしたり、壁の向こうを見たり、力が強くなつたり、色々あるつて言つたら？」

「そんなんですか？」

「そつか、あれしか見たことが無かつたんだね、昔帝都に行つたときに早く走ることのできる指輪の魔道具を見たことがあつてそのときの事を思い出しまつたよ」

（魔道具つて色々なものがあるのかな、話しから推測できるのは色々な形の物があり、色々な使い道があり、結構高価な物のようだ）

マシユリーさんはまだ話してくる。

「あんたらみたいなのがこの村に居てくれたらいいのにな、どうだいいここに住んでみたら」

「そつ言つてもらつるのは嬉しいですね、タスクさんに話しておきますよ」

「言つておいてくれよ」

マシユリーさんは宿屋まで送つてくれてそこで別れた。

その夜は司令に一日の状況報告を行った。

## 9 話目 インフルエンザ（後書き）

村での交流は次回かその次くらいまで続きます。

その後少し宇宙での話しにしようと思っています。

これを書くにあたり、以前から宇宙と地上の行き来があるようにしたいと思っていました。

誰でも真剣に何かに取り組んでいる姿と、休息のときのやすらぎ、そんな中でのハプニング、そんな物語に出来ればなと思っています。

まあ、書いてるうちになんか変わってきたかな？となるかもしれませんが。

## 10話目 お嬢様もインフルエンザ？

翌朝、昼少し前、タスクiIn宿屋

「タスクさん、エリアスさん、お客さんだよ」

宿屋の女将さんがドアの向こうから声をかけてきた。

エリアスが返事をした「わかりました、すぐ行きます」

「お客さんって誰だ？」

「早く起きてください司令」

「わかったよ」

着替えをして宿屋の食堂まで行くとマシユリーさんとその連れ2人がいた。

「おはようございます女将さん、お客さんってマシユリーさんたちですか」

「おはようさん、そうだよさっきから待ってるんだから」

マシユリーさんに近づいていった。

「おはようございます、マシユリーさんどうしたんですか？」

「まずは昨日のお礼だよ。みんな今朝には熱も下がって元気になったよ、しかも病気になる前より血色が良くなった感じもするんだよ」  
（なるほど、薬に含まれている体力回復成分もすっかり効いたんだな）

「それは良かったです、エリ阿斯も来ますので教えてあげてください」  
「い」

そう話しているところにエリ阿斯もやってきた。

「エリ阿斯さん、昨日はありがとう、みんな元気になったよ」

「そうですね、良かったですね」

「ほんと助かったよ」そう言っているとここで一緒に居る人がマシュリーさんの肩をたたいて声を掛けています。

「そろそろいいだろうか」

「そうだったね」一緒にいる人（男性）に返事をしている。

連れは男性と女性だった。

「じつはね、この村に病気療養にきているお嬢様が村人がかかった病気と同じような症状になってしまったらしいんだよ」

男性が続けて話をしてくる。

「はじめまして、ガウスレバス男爵家の護衛役をたまわってるカベ

ルと言います、うちのお嬢様が2日ほど前から熱が出だしてしまっ  
たのです」

そこまで話を聞いたところでマシユリーさんも説明をしてきた。

「だそうなんだよ、それで今朝なんだがこっちの女中さんが」

もう一人の連れの女性を指しながら、

「昨日まで高熱で寝込んでいた子供たちが、朝には元気に走り回っ  
てるのを見てどうやって治ったのか聞いてここまで来たってことさ  
ね」

女中さんがお辞儀をしている。女中さんはお嬢様が村に滞在中交代  
で奉公に行っている村人なのだそうだ。

村のことでわからないことがあれば村長かマシユリーさんに聞けと  
言う事でここの宿屋がすぐわかったそうだ。

「そうなのです、この者が病気が一夜で治ったと屋敷で話している  
のを聞いてここまで来たしだいです。どうか家家のお嬢様も治して  
いただけないでしょうか」

カベルさんが頭を下げてくる、お偉いさんだったら命令形で言っ  
てる場合もあるのだろうがこの人は実に礼儀正しいようだ。

肩書きをかさにきて高圧的に言ってきたら追いつ返すかもしれないが、  
こつこられては断る理由も無い。

「わかりました、エリアス用意して行こうか」

「わかりました、準備してきますね」

「たのむ」

そこまで話して肝心なことを言うのを忘れていた。

「自己紹介がまだでしたね、如月タスクといいます、準備できしだ  
い行きましよう」

マシュリー女史の案内で宿屋にきたが、ここに滞在しているのだろうか？

少ししたら男性がきた、特別背も高いわけではないな、恰幅が良いわけでもない、鍛え上げられてる感じではないがそれでも均整は取れている。

治せるということは薬師だろうか、それとも治癒系の魔導士だろうか？

なんにしても、そんな人が商人として動いているのだから何か事情があるのかもしれない。

「おはようございます、マシュリーさんどうしたんですか？」

男がマシュリー女史に話しかけている、ずいぶん気さくな感じだな。

「まずは昨日のお礼だよ、みんな今朝には熱も下がって元気になったよ、しかも病気になる前より血色が良くなった感じもするんだよ」

そこまでは聞いていなかった、驚きだ。

「それは良かったです、エリアスも来ますので教えてあげてください」

2人は親しげに話しているな、向こうから女性も来た、かなりの美人だ。

「エリアスさん、昨日はありがとう、みんな元気になったよ」

女性はエリアスと言うのか、普通に話しに加わったな。

「そうですか、良かったですね」

こちらの用件も進めてもらわねば、話の邪魔をするのは心苦しいが。

「ほんと助かったよ」そう言っているとここでマシユリー女史の肩をたたいた。

「そろそろいいだろうか」

「そうだったね、実はねこの村に病気療養にきているお嬢様が村人がかかった病気と同じような症状になってしまったらしいんだよ」

どうにかこちらの用件に入ることができたな。まずは自己紹介からしなければ、印象が悪いと助けられないかもしれない。

「はじめまして、ガウスレバス男爵家の護衛役をたまわってるカベルと言います、2日ほど前から熱が出だしてしまつたのです」

マシユリー女史も続けて説明してくれる、こちらと同じ立場で話してくれるのは助かるな。

「だそうなんだよ、それで今朝なんだがこつちの女中さんが」

当家に来ている女中を指しながら、

「昨日まで高熱で寝込んでいた子供たちが、朝には元気に走り回っているのを見てどうやって治ったのか聞いてここまで来たってことさね」

女中がお辞儀をしている。

「そうなのです、この者が病気が一夜で治ったと屋敷で話しているを聞いてここまで来たしだいです。どうか家のお嬢様も治していただけないでしょうか」

頭を下げをお願いをする、医者や魔導士相手だと特別な肩書きが無いときは平身低頭するにかぎる。

「わかりました、エリアス用意して行こうか」

簡単に快諾してもらえた、思ったより接しやすい人なのかもしれない。

「わかりました、準備してきますね」

「たのむ」

ん？最後のやり取り、上司から部下への了承のような感じだ、軍隊と似た感じを受けたがどういう人たちなのだ？

なんにしてもお嬢様の病気を治してもらわねば、いらぬことを言うて機嫌を損ねられてはたまらない。

必要なことだけにとどめておこう。

「自己紹介がまだでしたね、如月タスクといいます、準備できしだい行きましょう」

そういえば、こちらの話ばかりで名前を聞くのも忘れていた。

タスクinお嬢様のお屋敷

村はずれに豪華な建物があつた、中央広場から歩いて30分くらいのところだ。

綺麗に手入れが行き届いている雑木林の中だ。

(こんなところがあるとは知らなかったな) そんなことを思いながら建物の中に入っていった。

「カベル殿、おかえりなさいませ」

出迎えてくれたのは30代半ばくらいに見える男性だった。

「家令どの、村で治療に当たっていた人を連れてまいりました、キサラギ殿です」

治療なんてたいそうなことは何もやってないんだけどな、それにエリ阿斯もただ症状を確認して薬を飲ませただけだし。

家令と呼ばれた人がこちらに視線を向けて挨拶してくる。

「いらっしやいませ、ガウスレバス家の家令を勤めているアウシュレバンと申します」

なかなか感じとれないが表情に、大丈夫なのか？と言つ感じが時折見られる。

家令とカベルは視線を合わせてわずかにうなずきあっている。

「キサラギです、よろしく願ひします」

エリアスがさっそく本題に入り案内をお願いしている。

「こちらです、どうぞ」

家令に案内されて屋敷の奥に進んでいった。

外から見ると中は思った以上に広がった、雑木林に隠れているのもあって大きさを測り間違ったようだ。

「この部屋にあります」そう言ってドアをノックした。

「アウシュなのだが、入っても良いか？」

「はい、どうぞ」中から女性の声が返ってきた。

中には看病についている女性がいた、紹介によるとガウスレバス家から連れてきている女中さんのことだ。

豪華なベットには20代前半だろうか女性が寝ていた、熱が高いのだから意識もあまりないようだ。

「ではさっそく始めますので皆さん少し離れてください」エリアスがそう言った。

カバンの中から簡易診断装置を取り出して彼女に向けた、俺はエリアスの横についてそこに表示される内容を確認していった。

「熱が41.5度？かなりの高熱だな、病気はインフルエンザか、村の人たちと同じだな」

「そうですね司令、それに多分ですがここに療養に来ているといっ  
ていましたが、多発性皮膚炎で来ているではないでしょうか」

「そうなのか？地球圏では数千年前に聞かれなくなったんじゃない  
か」

「そうですね、その療養に来ているここでインフルエンザにかかっ  
てしまったと思われます」

「わかった、とにかくインフルエンザの薬を」

「わかりました」

カバンの中から村人にも飲ませた薬を出し、

「家令さん、この薬を飲ませてもらえますか」

「わかりました」そういつて女中に水を用意させ、少し女性を起こ  
して飲ませた。

「半日ほどで回復してくると思います、回復してきましたら無理は  
させずに消化の良い食事を摂らせてください、彼女は村の人より症  
状が重いですから」

エリアスの説明をしつかり聞き「わかりました」と返事が返ってき  
た。

部屋から出て家令にエリアスがさらに問いかけた。

「家令さん、彼女は皮膚の病気でここに療養に来たのではないのですか？」

「わかりますか、あんな魔道具を使うのですからわかりますよね」

「ここでも魔道具と言う言葉がでてきた。」

「子供のころから皮膚が突然炎症を起こしたり、水ぶくれができた、何もしてないのに手のひらくらいの広さから血が出てきたりするのです」

「やはりそうですか」

「はい、その病気でお嬢様はずっとつらい思いをしてまいりました」  
それまで家令に向かって話していたのだが、急に俺のほうに向きを変えて小さな声で話しかけてきた。

「司令、皮膚炎も治療しましょうか」

ずっと話を聞いていて俺もどうにかしてあげたいと思ってはいた。

「いいんじゃないか、インフルエンザが治ったらそっちの治療をしても」

「ただですね、年齢が23歳なので症状がかなり固定されている可能性があります、湖の屋敷でないと無理かもしれません」

「そうなのか、それはちょっとまずいな、どうにかならないか？」

「何か方法を考えますか」

「そうしてくれ」

エリアスはそこまで話をすると家令に向きなおり、治療について話  
がしたいのでどこか落ち着けるところがないか聞いている。

10 話目 お嬢様もインフルエンザ？（後書き）

村での交流を今回で終わらせようと思っていたのですが、思った以上に長くなってしまいました。

次ももう少し村が続きます。

## 11話目 左右対称！

カベルiin屋敷

「家令さん、彼女は皮膚の病気でここに療養に来たのではないのですか？」

エリアスと言う女性がこちらが話していないことをいきなり言ってきた。

「わかりますか、あんな魔道具を使うのですからわかりますよね」「たしかにそうだ、病気を調べる魔道具など見たことも聞いたこともない。」

彼らは何者なのかいよいよわからない。

「子供のころから皮膚が突然炎症を起こしたり、水ぶくれができたり、何もしてないのに手のひらくらいの広さから血が出てきたりするのです」

「やはりそうですか」

「はい、その病気でお嬢様はずっとつらい思いをしまっていました」  
たしかにそうだ、

そこまで話して、彼らはこちらから顔をそむけ何やら小声で話している。

「司令、皮膚炎も……………」

「いいんじゃない、インフルエンザ…………そっちの治療……………」

「ただですね、年齢が……………かなり固……………  
……………があります、湖の屋敷……………ません」

「そうなのか、それはちょっと……………ならないか？」

「何か……………えますか」

「そうしてくれ」

聞き耳を立て彼らの話を聞いていた、私はかなり耳がいいほうだ。

少し話を聞きとることができた。

病気はインフルエンザと言うのか？聞いたことがない、それに司令とか言っているし軍隊らしき言葉だ、それに湖の屋敷？

湖に屋敷を持っている有力者や貴族はいるが彼らのような人の話は聞いたことがない、どこの湖のことを言っているんだ？

エリアス女史は家令に向きなおり、治療について話がしたいのでどこか落ち着けるところがないか聞いています。

治療？皮膚の病気を治せるのか？10年以上にわたり国中の薬師や治療魔導士が投げ出したのに。

それともただのはったりか？

ともかく熱が下がりインフルエンザと呼んでいる病気が治ってからだ、まずこれが治らないことには信じる事ができない。

応接室のようなところに案内された、家具なども品良く配置されてここが趣味のいい貴族の屋敷だと認識させられる。

「皮膚の病気なのですがどこまでわかっていますか？」

「そう言われましても、家令と言う身分では詳しくは聞かされていないのです、カベルどのはいかがですか？」

「私も詳しくは聞かされておりません」

「そうですね、皮膚の病気は多発性皮膚炎と言います、両親からの遺伝組み合わせの要素もありますが、アレルギーの側面もあり、免疫不全な側面もあり、同時にいくつもの治療を平行して行わなければいけません」

「イデン？アレルギー？それとなんですかメンエキなんか？いたいそれらはなんなのでしょう？」

タスク指令がここで口を開いた、小さな声だ。

「そっか、たしかに今の状態でそんな話をされてもわからないな」

「たしかにそうですね、できるだけ簡単に話します」

「「お願いします」「2人が合わせたように返事をした。」

「彼女の皮膚の病気の原因は最低でも3つ以上の原因があり、治すにはその原因すべてを同時に治していかないとはいけません」

「なるほど」「家令さんがわかってるのか返事をした。

「ご両親や親戚の方に体の弱い方や何か食べられない物があるとか居ましたでしょうか？」

「はい、たしかにご親戚も含めますといたはずです」

「そう言った人たちとも彼女は血縁関係にあるわけですから、同じような症状が出てもおおかしくありません、そして場合によっては症状がいくつも出てしまう場合もあります」

「そんなことが？」

「はい、そしてその症状が重なると新しい症状が出てくるのです自分で言っていてかなり大雑把な説明だ、しかも抜けもかなりある。

「そうなのですか？」

「はい、そして原因がわかればそれを取り除いたり、そこを治したりすれば症状は出てこなくなるのです」

「確かに理屈としてはわかります、しかしそれができるのですか？」

「はい、私たちにはできません、しかしなんにしてもインフルエンザが治ってからです」

「あの病気はインフルエンザと言つのですか？」

「そうでした、その名前をお教えすることも忘れていました」

私たちはその後、明日また様子を見に来ると言い屋敷をあとにした。

## カベルiin屋敷

夜にはお嬢様の熱も下がり、立って歩けるくらいまで回復した。

あんなに重い症状だったのに信じられない気持ちでイッパイだ。

最初は彼らをどこかの間諜か何かかも知れないと考えたが、その可能性は低いのではないだろうか。

病気をこんな短時間で治せるような者を間諜に使うなど考えられない。

それにこう言うてはなんだが、我がガウスレバス家は中央から遠ざかって久しい、いまさら間諜を潜り込ませても何も意味が無い。

しかしどこの誰かわからないことには違いない、隊のものに調べさ

せたほうがいいだろうな。

「お嬢様、早めに寝てください。ずいぶん回復しましたが明日また治療の者が来ますのでそれまで無理をしないでください」

お嬢様は使用人と広間で話をしている。

「そうですね、今朝はもう立って歩けなくなるのではと思っていたのが、夜にはこうやって元気に歩けるようになるなんて信じられないです」

「そうですね」使用人の女性が同意をしめした。

「わかったわ、明日来られる方に会うまで自重します。それにしてもどんな方なのですか？来られたときは意識が朦朧としてよく覚えていないの」

「そうでしたよね、お嬢様は意識もハッキリしていなかったですよ」と使用人の女性、

「30くらいの男性とその使用人の女性ですよ」と俺、

「そうなの？会えるのが楽しみです」

「早くお部屋に戻りお休みください」最後は家令が声をかけ部屋に戻るのを急かした。

翌日 タスクi n 屋敷

翌日の昼過ぎに昨日の屋敷に向かった。

「こんにちは、昨日お伺いしました如月です」

「はい、お待ちしていました、どうぞお入り下さい」家令さんがドアを開けてくれた。

中に入りあれからのどうだったか歩きながら聞いてみた。

「お嬢様の熱は下がりました？」

「はい、夜には熱も下がり元気になりました」

「そうでしたか、それは良かったです」

「ところで昨日いらしたエリアス殿は？」

「エリアスでしたら移動のための荷造りをしてますよ」

「荷造り？どこかに行くのですか？」

「忘れてるんですか？私は売り歩きしている商人ですよ、市場も今日までですから夜には出発しようと思ってます」

「行ってしまわれるのですか、お嬢様の病気を治していただけると言ってみましたか・・・」

「はい、そのことについても相談がありまして」

そこまで話すと目的の部屋の前まで着いてしまった。

「話はのちほど、お嬢様にはまだ話さないでおいてください」

「なぜですか？」

「治せることは治せますが準備に少々時間がかかるかもしれないのです」

「そうなのですか、わかりました」

家令さんがドアをノックして中に入っていった、俺も後ろからついていった。

部屋の中には昨日の女性がベッドに腰掛けていた、女中の人と話をしていたようだ。

「昨日来ていただいた如月殿です」

「ありがとうございます、ガウスレバス家のセフォリアといいます」  
自己紹介を受けた、思った以上に元気になっている昨日のが嘘のようだ。

ベットに寝ていたので昨日は判らなかつたが、彼女は金髪が腰近くまでのび、背は150cmを少し超えるくらいだろうか、体格は均整がとれているが少し細い感じがする、そして印象に残るのはその瞳だった、緑色の瞳で吸い込まれそうな深い色をしている。誰もが第一印象は綺麗と感じるだろう。

しかし、着ているのは手足のさきまで隠れる衣服を身につけ手袋まではめている、顔以外の皮膚が人目につかないようにしているのだろう。

「如月タスクといいます、お元気になられてよかつた」

「はい、昨日の夜には起きて歩くことも出来るようになりました」

「そうでしたか」薬が効くと同時に体力回復も効いたな、良かつた。

その後、女性と家令さんと少し話をして部屋を出て行った。

「皮膚病についてなのですが、7日後くらいにもう一度この村に来ますので準備をしてきます」

屋敷の玄関で家令さんと話をしている。

「ほんとに治るのです？」

「ハハハ、信じられないのも判りますが治せますよ」

「そうですか、それと今回のお礼なのですが、受け取ってください」

そう言つて硬貨が入っているのだろう袋を渡してきた。

受け取らずに慈善事業のようなことをするとかえつて怪しまれると思ひ受け取つた、ただでさえしばらく治らなかつた病気を治そうとしているのだから出来る範囲で怪しまれないようにしないと。

(タスクたちは勘違いしていた、女性の病気は時間さえかければこの星の技術でも治せると思つていた、まさか10年以上にわたり苦しんでいた難病とは思つていなかったのだ)

お嬢様in自室

家令が男性を連れてきた

「昨日来ていただいた如月殿です」

この人が治してくれた方？思ったより若いわね。

「ありがとうございます、ガウスレバス家のセフォリアといいます」

礼儀正しく挨拶を、家の印象が悪くなるのはまずいですから。

でもなんかじろじろ見られてちょっと不快、まあ私の病気をしっつて見ているのでしょうかけどそれでもちよつと・・・。

「如月タスクといいます、お元気になられてよかったです」

あら、声の感じは思ったより年上って感じ、見た目より歳がいつてるのかしら？

「はい、昨日の夜には起きて歩くことも出来るようになりました」

「そうでしたか」

その後、タスクさんと家令とで話をして出て行った。

「ねえ、さっきの男性どう思う？」「この村からきてもらってる女中に声をかけた。」

「タスクさんですか？」

「ええ」

「いい方ですよ、村の病人も治してもらったし、しばらく前から村に物売りに来ている方なんですよ」

「物売り？商人なのですか？」

「そうですね、気さくな方ですよ、一緒にエリアスさんって方も来ていて彼女は使用人って感じでしょうか」

「そうなの」商人なの？それにしても商人がこんなに効く薬を普通に扱ってるなんてどうということ？

「珍しいものを売っていて、村の女性で知らない人は居ないですよ」

「珍しいもの？どんなの？」

「お嬢様にはそうでもないでしょうけど、村では結構人気の小物なんですよ」

そういつて女中は普段は髪に隠れているイヤリングをとって見せてくれた。

なに？これ？こんな細かい細工見たことが無い、それにこんな色が出せるなんて、しかも細工が完全に左右対称にできている。

人の手でここまで出来るものなの？

「こんなものが・・・」

「中央では普通に出回ってるんでしょうけど、どうですかお嬢様」

「ええ、そうね、たしかに中央ではたまに見かけますね・・・」  
(見たことなんて無いわよ)

「どうかしましたか、お嬢様」

「なんでもないわ、ちょっと考えたいことがあるので一人にしてくださいます？」

「????わかりました、失礼します」そういつて女中は部屋から出て行った。

あんな綺麗なものを扱ってるなんて、私も欲しいかも・・・じゃなくてどういう人なんでしょう？

また会えないかしら、村に来ているってことは定期的に来ているのかしら。

たしかこの村は5の着く日に市場が立っていたはず、今回の市は今日で終わりのはず、

次はたしか7日後、次会うことができれば色々詳しくお話したいですね。

## 12話目 生物なのか?!

カベルin屋敷

タスク殿が帰られるとのことで、一応念のため身元確認のため部下にあとをつけさせた。

結果は2時間後には見失ったとのことだった。

部下は「途中で意識が朦朧として、気がついたら見失っていた」と言っていた。

どういうことだ？

部下の職務怠慢なのか、それともなんらかの力が加わったのか。

部下の中でも真面目な者を使ったのでウソは言っていないと思いたい。

だとすると何らかの力があつたと考えられるだろう、どんな力だ？

人の意識に干渉するなんて事は私は聞いたことがない、魔術師にはそういった力を有するものがあるかもしれない。

しかし私はもともと魔術関係にはかなり弱い、知り合いにもほとんどいない。

さて、仮定を立てるにも手詰まりになってしまった。

仕方ない、7日後にはまた来るとのことなのだから。

それにしても本当にお嬢様の皮膚病は治るのだろうか？

村を出たその日の夜には湖の邸宅に着いていた。

「司令、追跡者を足止めできてよかったですね」

タスクたちは村から離れてしばらくして、ロプスからの報告で後方から意図的に着いてきている人間の存在を知ったのだ。

そして、追跡を巻くために麻痺フィールドを意識障害モードで作動させ追跡者の足を止めたのだ。

「そうだな、いままで追跡者なんて居なかったから気にもしてなかったが、貴族と呼ばれる人と接触してしかも身元がはっきりしない旅の商人となれば不審がっても仕方ないか」

「そうですね、それに病気を治せる薬まで提供してるわけですから、余計気になるんでしょう」

「たしかにな、そういえば足止めした人は大丈夫なんだろうな？」

「はい、それは大丈夫です、先ほどロプスからの報告で衛星軌道から無事屋敷に戻ったと確認できたそうです」

「そうか」

そこまで話しているとロプスから緊急連絡が入った。

詳しく聞くために壁一面がスクリーンに変わる大広間に移動した。

そこにはすでに詳しく報告するためにロプスが宙図を表示していた。

「司令、R A 3 Z A の方角より未確認物体の接近を補足しました。距離は約45光年、誤差は0.5光年以内です」

早速ロプスが報告してきた。

「未確認物体？なんだそれは」

「はつきりしたことは判りません、しかし自然物でないことは確認してます」

「自然物じゃない？どうことだ？」

「はい、まず軌道がかなり不安定です、まるで子供の学校帰りの寄り道のようなようです」

そういつて軌道を表示してきた、確かにこれは寄り道みたいだ、あつちこつちに動いているが全体的な方向は同じように感じる。

「たしかに寄り道に見えるな、こんな動きはたしかに意図的な動きだ」

「はい、さらに現在までの観測情報によりますと速度は約光速の10分の1、大きさ全長80メートル前後、形状は細長い感じで突起物もあり、質量は100トンほどです」

「そこまでの速度を出せるにしては小さな宇宙船だな、こちらより技術の進んだ星があったのかな？」

「いえ、それは確認できません。それにここまでの調査で推測されることは、これは人工物ではなく自然物と推測されることです」

「え？さっき自然物ではないと言っていたじゃないか」

「はいそうでした、説明が不十分でした、正確には動きは自然物ではないが、動いている‘もの’は自然物と言うことです」

「それは？どういう？」

「はい、宇宙生物ではないかと思われます」

「宇宙生物？宇宙空間を光速の10分の1の速度で移動する100トンの生き物？」

エリアスも怪訝な顔をしている。

「はい、驚かれるのももつともだと思えます、光学観測、亜空間スキャナ、光粒子観測、考えられる観測方法で得られたデータを総合的に検証すると生物と言うのが一番合います」

「まさか、そんなものが存在するなんて・・・」

「地球圏にいる生物と同じと言うことではありません、しかももう一つ特徴があります」

「まだあるのか？！なんだ？」

「はい、ワープ航法と思われる移動方法を確認しています」

「はあ？」

エリアスも俺と同じような顔をしている、生き物でワープする？

「ワープです」

「そんなバカなことがあるか！生き物自身がワープするわけないだろ！」

「そう怒られても事実です。地球圏で常識と考えられていたことが、すべてに当てはまるといふことはありません」

「まあそうかもしれないが、それにしても信じられない……」

「私たちの基準では生物と定義して良いものかもまだ不確定です、あくまでも当てはめるとしたら生物だと言ふ事ですので」

「確かにそうだ、ともかく一度宇宙ウチウチに上がろう」

「はい、これ以上の判断は私にはできません、お待ちしています」

「ああ、準備できしだい宇宙ウチウチにあがる、エリアスたのむ」

「はいわかりました」

「それと、緊急時にワープ転送装置を早く用意しておいたほうがいいな、いちいち小型艇を使うのでは時間がかかってしまうからな」

「わかりました、そちらはアポロに言っておきます」

「たのむ」

その後小型艇で宇宙そふにあがった。

タスクi n 第三衛星上ロプス艦内

定期的に連絡はとっていたがロプスに戻ったのは久しぶりだ。

ロプス内は見慣れた風景ではあるが懐かしい気もする。

「ロプス、船体状況はどうだ？」

「はい、問題ありません、おかえりなさい司令」

すぐに返事が返ってきた。

「ああ、ただいま」

もともと何か問題があればすぐに報告されるのでわざわざ聞く必要は無いのだが、タスクは人間である以上会話でコミュニケーションをとりたくなってしまうのだ。

総合中央管制室に向かいながらその後何か変わったことが無かったか確認していく。

エリアスは後ろからついてきて、俺と同じように話しを聞いている。

「物体がワープしました、現在地は約41光年ほどのところですよ」

「先ほどから約4光年飛んだのか」

「はい、ワープ時間と飛んだ距離からわれわれが行っているワープ航法とほぼ同じ原理のものと推測されます」

「ワープのスピードは同じと言うことか」

「はい、それと今回のワープから物体の来た方向がかなり特定されました」

「どこだ？」

「はい、我々が最初にこの星雲に飛ばされてきたときの太陽系です」

「あそこから？しかしあの宙域には何も居なかったはずだが」

「はい、たしかにそうです。まだ不明なことがありますのでさらに調査を進める必要があります」

「わかった、まかせる」

そこまで話して管制室の前までつき中に入った。

ロプスが宙図をいくつか表示し今までの報告を解りやすく表示している、そして新しい情報も重ねて表示される。

「こちらに向かってきているのはわかるが、なにか接触はあったのか？」

「いえ、今のところありません」

「そうか、偵察機を出せ、何か反応があるかもしれない、一応こちらの位置がわからないよう別方向から接近するように」

すでにこちらの場所は解っているのかもしれないが、それでも念のためだ。

「わかりました」

「それと第一警戒態勢発令、戦闘艦を出しいつでも稼働できるように待機」

「了解」

「エリアス、物体が友好的な場合と敵対的な場合の接触シミュレーションをたのむ、できれば接触することなく離れていってくれればいいんだけどね」

この場合のシミュレーションとは接触方法やその後にかかるであろう行動のことである、友好的な場合は接触できた方法でそのまま通信していけばいいが、敵対した場合有効攻撃手段やそのエネルギー量の算出、戦場が拡大しないような対処、そして惑星への影響確認である。

「わかりました、そうですね人々が住んでいる星に被害がでたりすると惑星規模の被害になるでしょうから」

指示を出してからおよそ24時間がたった、惑星の自転も地球とほぼ同じなので地上でも1日たったはずだ。

窓から惑星を見ている（綺麗な星だな、地球とはちょっと違つがそれでも似ている感じだ）そんなことを考えていた。

「司令、至急管制室へ」ロプスからの呼び出しだ。

「わかった」自分の個室から急いで出て行った。

管制室の中ではエリアスが先に来ていた。

「どうしたんだ？」

「はい、偵察機が撃墜されました」エリアスが答えてくれた。

「撃墜？生物らしいものから撃墜されたってことは、そんなに接近したのか？」

生物だったら、わからない小さな物が近づいてきたら払ったり叩いたりするだろう、手みたいなのがあつたらだが。俺だって虫みたいな小さなものが回りでちよろちよろされたら叩き潰してしまうからな。

「いえ違います、撃墜される直前にエネルギー流を検知しています。なにかのエネルギー砲だと思われず、距離約10光秒でした」口ブスが言ってくる。

10光秒だったら近くは無いが遠くもないな、しかし……

「生物らしいのにエネルギー砲まで持つてるのか？もうインチキ反則生物って感じだな」考えていたいたことをそのまま声に出した。

「いかがいたしましたようか」エリアスが聞いてくる。

「そうだな、簡単に敵対していると判断するには早いと思う。再度偵察機を出してさらに慎重に観測してくれ、なんらかの反応があった場合考えられる方法すべてで交信してくれ」

「わかりました」2つの声が返ってきた。

「念のためにもう一つ、この恒星系の太陽から6光時のところまで移動その後待機、万一の場合に備えておこう」



13 話目 迎撃と簡易ペシット（前書き）

とりあえず投稿です

明日は早いのでおやすみなさい。

### 13 話目 迎撃と簡易ベクト

タスクin恒星系外周

この恒星系の最外周にあたる宙域には小惑星が10光秒にわたり群生しているところがいくつかある、これだけデブリが多ければ巨大なロプスでも十分に隠せる。

そして、再度出した偵察機がまた撃墜された。

今回はいくつか接触をしようと試み、すべて失敗に終わりそして最後に敵対すると思えられる思念波、もしくはテレパシーのようなものを観測した。

他にもいくつか思考らしきものを記録したのだが、断片的なものばかりではつきりとしたことはほとんどわからなかった。

唯一の結論は、向こうはこちらを排除しようとしていると言っ事だけだった。

そしてそのときの観測情報からこちらの戦力だったらかなり小規模（それでも駆逐艦1隻以上）でも撃破できるだろうと推測された。

「敵対するものだということとはほぼ間違いないな、さてどうしようか……」

あの物体を消し去ることは簡単にできる。問題はその後だ、あんなものが単体単独で活動しているとは思えない。

同じようなものが居るはずだ、もしあんなものだけだったらいくら来ても排除できるが違うタイプのものが居るかもしれない。

「考えても仕方ない、あれを片付けないことにはどうにもならない。エリアス！」

「はい」

「巡洋艦2隻で迎撃にあたれ、この星系の10光年以内に近づけるな」

「わかりました」

2隻の船が発進していった、敵物体の捕獲が出来ればいいが多分無理だろう。

残骸を回収できるだけでも十分だ

その5時間後戦闘が始まった、距離がこちらから約41光年先だ。スクリーンに戦闘状況が表示されている。

敵は一体、基本的には包囲して攻撃をしかける、数機の自立思考型艦載機を出し包囲を縮めていくが距離はある程度とっておく。

エネルギー砲を防ぐためだ、艦には防御シールドがあるがそれでもどれほどの威力があるのかまだ未知数だ、慎重にしなければ。

生物からはエネルギー砲が先ほどから何発も発射されている、いくつか艦載機は落とされているが艦には効果がない、シールドで完璧にはじいている。

「敵の破壊後サンプルを持ち帰ること、頼むぞ」

巡洋艦の自立思考から返事が返ってくる

「わかりました」若干感情表現にかける話し方だ、戦闘艦の会話能力はロプスほど高くない。

「それにしても、送られてくる映像の、この生物はなんなんだ？」

それは地球にいるオケラに似ていて、頭に一角のツノをつけ足したような感じだ。

「そうですね、虫みたいですね」

「持ち帰ってきたら調べてくれ」

「はい、分析部署にまわしておきます」

もともと惑星改造をする艦隊なので星の分析、そこに生物がいた場合の分析、対人調査は得意ではないが現物やサンプルの一部がある

場合の調査はある程度得意だったりする。専門機関の最新調査技術にはかなわないが。

急に関係ないことを思い出し口に出してしまった、「そういえば、地上でのお嬢様の治療方法についてはどうかな？」今まで完全に忘れていたことをエリアスに急に聞いた。

少し目を大きく開いた感じだが戸惑い無く返答が返ってきた「そうですね、簡易治療ベットを運びましょう、ここにある設備と比べると少し時間がかかりますがそれでもこちらの素性を知られるよりはいいはずです」

「たしかにそうだな・・・」俺は同時に他のことも考えていた。（お嬢様の治療も考えなきゃいけないが、あの生物に対するこちらの防御体制も考えておかなければな。艦数を増やさないとダメだ、なんと言っても戦力は数が第一だからな）

「エリアス、戦力を補充しないといけないな、あの星で資源確保してできるか？」

「出来なくはないでしょうが、無理にあの星じゃなくても良いかと思えます。他の星で資源確保して建造すればいいと思えます、なんと言ってもあそこ以外には人が居ないので作業がしやすいですから」

「たしかにそうだ、資源確保はそれでいいが建造はどこで？あそこ  
の星の第3衛星か？ロプスも普段はあそこにいるからそのほうが便利だと思っが」

「はい、それがいいですね」

「ではそうしよう、ロプスもたのむ」

「はい、わかりました」

話をしているうちに画面が光り大きな爆発が映し出され戦闘は終わった、推測どおりあれくらいのものだったら少ない戦力でも十分撃退できることが解った。

残骸も全体の3分の2以上確保でき調査するには十分だ。

「戦闘終了しました、回収作業も完了、観測衛星を設置後帰投します」戦闘艦より通信が入ってきた。

「わかった、お疲れさま」

「ありがとうございます」戦闘艦にしては気の利いた返事が返ってきた、話し方は平坦だが。

「ではこの宙域にも監視衛星と中継ステーションを設置して戻ろう、無人砲台も設置できるか？」

「できなくはありませんが数が少ないです。全部放出しても5個も設置できません」

「それでも無いよりはいいだろう」

「わかりました、他にはなにか？」

「そうだな、るぶすが言っていたあれが来た方向だが、最初にここに来た恒星系の方かららしい、それについても調査してくれ」

「わかりました」「これについてはるぷすが返事を返してくれた。」

14話目 協力依頼（前書き）

取り急ぎ投稿です

## 14 話目 協力依頼

タスクin第3衛星ロプス内

戦闘終了後24時間後には惑星に戻ってきた。

そういえばこの星を惑星としか呼んでいなかったな、地上の人々はまだ天動説が主流で地面が丸いものだと思われていない。

ただ地面としか呼ばれていないから星と言う概念が無い、この際俺がかつてに何か呼び方を決めてしまおう。

そうだな………ブルーマール星にしよう、たしか数万年前に地球をそう呼んだ人がいたらしい。

「エリアス、この星の名前なんだがブルーマールと呼ぼうと思う、月については3つもあるんだから惑星に近いところからムーン1、ムーン2、ムーン3にしよう」

「なんだかブルーマールの呼び方と比べて手抜きって感じですね」

「ほっとけ！三つもあるとほんぽん名前がでてこないよ」

「はいはいわかりました、それではそれぞれの名称を全艦に通達しておきます」

「ではムーン3上に建造施設を作って資源を他の惑星から集めてきてくれ、それで俺は少し休む、疲れた」

「わかりました」ちよつとあきれた感じのする言い方だ、仕方ないだろ俺は人間なんだから疲れるんだよ。

「それとブルーマーブルから直接見えないようにしろよ、まあわかっているだろけどな」

「はい」

7時間後、睡眠から覚め管制室に戻った。

エリアスが声をかけてきた。

「おはようございます、司令」

「おはよう、その後どうだ変化は？」

「はい、残骸の調査が進んでいます」

「それで？」

「はい、まず簡単に言いますとあれは生物です、それと内部には不明な器官もあります、それらがワープやエネルギー砲のようなもののエネルギー発生器官と発信機であると思われます」

「知能のようなものはあるだろうか？」

「はい、遺伝子と思われるものがあるようなので生物完全シミュレートでかなり解析できると思います。まあ遺伝子と言っても地球圏にいる生物やこの惑星、ブルーマーブルにいる炭素系生物とはかなり違います」

「炭素系生物とはってことは似ているものがあると言う事なのかな？」

「はい、似ているというか地球圏にはいませんが、ブルーマーブルに生息している珪素系生物に似ているところがあります」

「珪素系生物か、そういえばこのブルーマーブル星には居たんだっただな、存在が仮定されていたが今まで確認されていなかったんだよな」

「はい、しかもあれは珪素系生物と若干の炭素系生物の特徴を備えているようです」

「初めてづくしのものが多いが大丈夫か？」

「難しいところがあると思われれます、それで司令にお願いが」

「なんだ」

「地球圏に調査資料の分析協力を依頼できないでしょうか」

「そんなことか！わかった、通信を入れて協力してもらおう」今では地球圏に対するというより、スキウエル大将に対する反発心も以前ほどではないのですぐに了承の返事をした。

「ありがとうございます」

さっそく地球圏に通信を入れ協力を仰いだ。

「久しぶりだな、タスク君」スキウエル大将が画面に出てきた。

「お久しぶりです」2億光年飛ばされたあとに画面越しに怒鳴りあって以来だ。

「そちらどうだ、順調か？」あんまり心配もしてないような口ぶりだな、社交辞令がありありとわかる。

「はい、こちらは順調です、居住可能惑星も見つけられましたよ」

「は？まさかそんな星が？！」かなり驚いている、それはそうだろう数十年かけても見つけられないのが当たり前だからだ。

「それに人類と呼べる人々も居住しています」

「え？そんなに進化したものでいるのか！？」かなりこちらの状況に喰いついて来ている。

「はい、接触もしました、交流も始めてますよ」

「そんな・・・信じられん・・・」ノイズが入っている画面だが呆然としているのがわかる。

「そんなことはどうでもいいですよ、それよりこちらで他に問題が発生しましてこちらの協力をいただきたいと思ひまして」

「そんなことはどうでもいいって・・・大発見だぞ！！詳しく教えてくれ！」

「わかりました、それについてはのちほどデータを送ります」

「わかった！！！！、そちらからの依頼については出来る限り協力する」スキウエル大将の専門分野からかけ離れているが、情報を早くよこせという興味津々なのがよく解る。

「助かります」

その後スキウエル大将の興奮を抑えるのが大変だった。

そしていろいろ話をした、地球圏での最近の情勢や動き、芸能ニュースなんかも少し話してくれた。まあ聞いたとしても聞くだけであつた関係の無い話になつてしまつたのだが。

こちらからも個人的な要望を出したりした、地球圏にいるところは週

刊誌（電子化されたものが一般的で紙媒体のものは高価だった）を読むのが好きで定期的に買っていた雑誌があったのだ、あれ以来読んでいないので雑誌データを送って欲しいとお願いした。

もしかして、こんな本をこちらで売ったら受けいれられるんじゃないだろうか、などと考えながら会話は続いていった。

売れるだろうが、羊皮紙文化だから使い勝手が悪いな、まあなにか考えよう。

「それでは、こちらからデータを送りますのでよろしくお願いします」

「わかった、タスク君の発見したものはかなり貴重なものだ、一大センセーションを巻き起こすだろう」

「そうかもしれませんが、私が飛ばされたことは機密扱いじゃなかったのですか？」

「……そうだったすっかり忘れていた、これほどの発見を秘密にしないといけないのか?!」

「まあ、そちらの事情はこちらではどうしようもありませんから、2億光年も離れていたらどうになります」

「たしかにそうだ」

その後事務的なやり取りをして、今後は定期的な連絡を入れるということで回線を切った。



#### 14話目 協力依頼（後書き）

最近仕事で疲れがたまりまくりでなかなか書けません。

書きたいと思ってることはいっぱいあるのに文才無くて思うように書けません。

今も眠くてしかたありません。

1〜3日以内に次話を投稿しようと考えています。

書き溜めがなかなかたまらない・・・せいぜい2話分あるかないかくらい・・・はぁ・・・疲れた・・・

15 話目 治療（前書き）

どうにかこうにか投稿です

## 15話目 治療

タスクインブルーマーブル星、湖の邸宅から

村に行く前日には地上に降りた、やらなければいけないことが多く  
エリアスやアポロも忙しい。

ロプスもムーニーで艦船の建造施設・採掘部隊の編成などせわしなく準備している。

俺は方針や指示を出し最終決定をするだけなので、ある意味一番ヒマかもしれない。

まあそれでもそれなりに動いてはいるが。

「明日村に行く準備はどうか？」

「はい、機材の準備はできています。しかし今回は時間が無かったので露天で売れるものが少ししかありません」

「仕方ないな、今回は病気治療をメインで行こう」

「はい、明日の朝には出ますので今日は早くに休んでください」

「そうだな」

その日は地球圏から送られてきた雑誌のデータを表示して寝るまでのしばらくのあいだ読んでいた。雑誌を読むなんて久しぶりだ。

翌日は朝から出発し昼前には村の近くの街道まで来ていた。

「指令、最初は広場で露天を出して店番を部下に任せて、その後ガウスレバス家の別荘に行きますか」

今回は簡易治療装置を持ってきているためいつもより大掛かりな台車とそれを引く馬らしきものを連れてきている。

馬らしきものは野生に居る生き物を捕獲し飼いならしたものだ、ここまで言うことを聞くようになるにはかなり大変だった。

最初は興奮して手がつけられなかったため、やりたくはなかったが薬の投与などをして興奮を抑えたりした。

そして数日前になってやっと地球で言うところの馬と同じほどに扱えるようになったのだ。

そして簡易治療装置は簡易とは言ってもそれなりに大きく、形状は筒状で全長は約2.5メートルほどあるカプセルだ、それに制御するコンソールなどがあり縦5メートル、横2.3メートルの荷台はイッパイの状態だ。

重さもあり最初は運ぶことが出来るのか?と思ったのだが馬に似た動物は思った以上に力が強く心配することがなかった。

「わかった、そうしよう」

村に着き露天も出し、エリアスと共にガウスレバス家に向かった。

「こんにちは、如月です」

「これはようこそ、お待ちしていました、どうぞ中へ」

応接室に案内された、そこには前回は見かけなかった人が2人いた、2人とも年齢は40をこえたくらいだろうか。

「ようこそ、ガウスレバス家当主のガルバジと申します」

「同じくその妻のシャウリと申します」

セフォリアお嬢様のご両親か、

「はじめまして如月タスクと言います」

自己紹介を終え本題に入っていた。

「まだお嬢様には皮膚病の治療については話しておりません、本当に大丈夫なんでしょうか？」家令が言ってきた。

「私たちも治ると聞き急いでこちらに来たしいです、どうなんでしょうか？」当主のガルバジがさらに聞いてきた、母親のほうは話に入ってこないが心配そうな表情だ。

「大丈夫ですよ、時間は少しかかりますが治ります」俺が言った。

多分60時間もあれば治るだろう。

「やはり時間はかかりますか」さっきよりは声のトーンは良い感じに聞こえるが嬉しさは思ったほど感じられなかった。

「そうですね、2日から3日ほどかかるかと思います」

「」「2〜3日で?!そんなに早くですか?!」「」「ご夫婦と家令さんの3人の声が綺麗に重なった、声のトーンも上がり声量も段違いだ。

「はい」俺は当然のように返事を返した。

「時間がかかると言ったので、てっきり半年とか1年とかかかると思っていました」シャウリさんの言葉だ。

「そんなにかかりませんよ、あの手の病気は今までも治療実績がありますから」

「あの病気の治療実績ですか、どちらの地方ですかね？」

「まあ、それはおいおいと言うことで」まあ地球では実績がありますよなんて話す気は無いですけど。

「そうですね、なにはともあれ宜しくお願いします」

「わかりました、エリアス準備をしてくれ。それとご夫妻、そして家令さん、お嬢様に治療をお伝え下さい」

「わかりました」

「さて、準備準備！」

屋敷の中で広くて治療に専念できる部屋が無いか確認しそこに簡易治療装置を設置した。

「これで治療するのですか？」父親のガルバジさんが聞いてくる。

「はい、この中に入っただき治療します」

「なるほど、こんな大掛かりな魔道具は初めて見る、如月殿はこの魔導士なのですか？」

「魔導士ですか、まあ当たらずとも遠からずと言つことにおきます」たしかにこの星の文明ではこれらの技術は魔法のように感じるだろうな。

そこまで話してセフォリアお嬢様がやってきた。

「お連れいたしました、旦那様」

「おお、待っていた、セフォリアお前の病気が治療できると如月殿が言ってくださり、これからその治療にとりかかるつもり」

「話は家令より聞きましたが、本当なのですか？」

「治せますよ、少し時間がかかりますけど」俺が返事をした。

「如月様、この前はありがとうございました。こんなことでまた会えるとは思っていませんでした」

「そうですか、こちらはこの前来た時から家令さんと話していたので予定通りなんですけどね」片目をつぶりきざつぽく見せた。

「そうだったんですか、知っていれば前もって準備もできたのですが」

「準備ですか？」

「こちらのことですので」

「そうですか」

「あ！時間ってどれくらいかかるのですか？」

「はい、2〜3日ってところですね」

「え？そんなに早いんですか？」あつけにとられた表情をしている。

「早く始めればそれだけ早く終わりますから」

「わかりました」

「セフォリアよ、そこにある魔道具の中に入って治すのだそうだが、

大丈夫か？」

「はい、お父様大丈夫です、病気が治るのですたら不安はありませんが我慢します」

「中に入ってしまったえば気持ちの良さにすぐに眠ってしまいますよ」

「そうなんですか？」

会話は続いていき、セフォリアはカプセルの中に入った。

その後治療は順調に進み、当初の予定通り60時間で病気を治すことができた。



## 15 話目 治療（後書き）

昨日やっと感想などの書き込み設定を変えることが出来ました、恥ずかしながら今までちゃんと設定できてなかったです。

## 16話目 報告そして推論(前書き)

疲れがたまりすぎて書き溜めができません。

思った以上に進まない・・・

書きたいなって思ってることはあるのにどっつなげてどっつ書いじつか、  
今も思案中。

## 16 話目 報告そして推論

タスクイン湖の邸宅

セフォリアお嬢さんの治療を終え2日後、湖に戻ってきた。

治療直後は家族からの多大な感謝と本人からの声にならない感謝の言葉、思った以上の反応にびっくりした。

両親は食事に招待して感謝を表したいと言っていたが、まだ完治したかわからないので次に来た時にまた見せて欲しいと話し遠慮した。まず、確実に治った自信はあるが堅苦しい席は遠慮したいのでそれらしいことを言って断ったのだ。

人との接触が欲しくて村に行ったりしたが煩わしいのは面倒だ。

今は先日遭遇した宇宙生物について話している。

「ある意味、あれは完全生物とも言えます」

ロプスが画面を表示しながら説明する、地球圏とのやり取りも重ねてかなり確度の高い推論を出している。

「宇宙空間でも活動でき、ワープすら可能にする器官をもち、エネ

ルギー補給をしなくても10年以上活動できる、こんな生き物が存在するなんて信じられないそうです」

「たしかにそうだろうな」

「それに生物完全シミュレートの結果も出ました、地球圏では新しい解析プログラムが出来ていましたのでバージョンアップしました」

「通信がどうかできるのは助かるな、それでどうだった？」

エリアスも隣で興味深そうに聞いている。

「はい、表と数値を表示します。それぞれ説明していきます」

「わかった」

その後順番に説明を受けていった、端的に言う結構ワカラン！そりゃそうだろ俺はもともと生物学や鉱石学なんかの専門家じゃない、それでも気になったことについてはそれなりに聞いていった。

その中でも特に気になったのは知能があるのか？あるなら意思疎通はできるのか？そしてあれの目的はなんなのかだった。

「知能はある程度あるようです、個々で活動しているときはレベルは低いようですが自我を持っています、そして条件が加わることにより端末的な状態に変化するようです」

「端末？どういうことだ？」

「はい、前回我々が遭遇したときは自我を持った状態だったと思わ

れます、ですのであの宇宙生物がとつた行動はあれ自身の判断によるものだと考えられます」

「フム」

「端末的な状態とは、あの生物に関して言うと社会性昆虫を進めたような状態のことです」

「社会性昆虫？それを進めた状態？なんだそれは」

「はい、あの宇宙生物には上位となるものがあると考えられます、働き蟻から見た女王蟻といった感じですが、そしてさらにそれを進めた状態とは例えば働き蟻が女王蟻の手や足そのものになると言う事です、手足に自我はありませんよね。脳から、この場合上位種の命令で動くようになります」

「なるほど、普段は個々で動き、あるときは自我の無い手足のようになるということか」

「はい」

「と言うことはだよ、手足のように動いているものよりその上位に位置してる、脳にあたるもののほうが問題だと言う事じゃないか？」

「はい、そうです、しかも上位にあたるものが一つとは限りません」

「一つじゃない？」

「はい、一段上の脳にあたるもののさらに上に脳があるかもしれない、働き蟻の上に女王蟻、さらに上に大女王蟻、さらに上に特大

女王蟻のように上が居るのではと考えられます」

「ぶっ！なんじゃそりゃ！」

「これが今出ている推論です」

続けて現在の観測体制を報告してきた。

「あの生物が来たと思われる恒星系の調査なのですが、さきほどの報告の中にもありましたワープエネルギーの補給に関係して」

「そんなのあつたっけ？」

「はい、それであの生物はあの恒星系、と言うより恒星から出ていくエネルギーをエネルギー源の一つに使っているようです」

「あの恒星って他のと違うのか？」

「はい、原因は今のところ不明ですが質量のわりに重力が小さいです、それによつて何がどう影響するのか現在のところまだデータ不足で結論が出ていません」

「はぁ・・・そうか」

わかったこともあるが余計わかんなくなつたことも出てきたな。

「なんか頭が綿になりそうだよ」

ロプスからの説明を終え大広間でソファアに座ってエリアスに声をかけた。

「仕方ないです、今のところ確定情報が少ないわけですからできるだけ多くの情報から今後の展開を考えないといけないです」

「それは解ってるけどね、それにしたって断片情報が多すぎるな。結局肝心のあれの目的ははっきりしてないからな」

「そうですね」

「はあ、疲れた・・・」

「・・・」

「そういえば次、村に行くのはいつだったかな？」

「はい、5日後にこちらを出るのが良いかと思います」

「わかった、そのあたりの予定はエリアスにまかせるよ」

「はい」

「セフォリアさんのところにも経過を見に行かないといけないな」

5日後か、それまで何をしようか、やりたいことはいくらでもあるからな、何を売りに行くか考えよう。

それにしてもこれまでちょっと珍しいと思われるものを持って行きすぎたな、今度は無難なものだけにしよう。



## 16話目 報告そして推論（後書き）

挿絵なんてついている方、自分で書いてるのでしょいか？

絵書く才能皆無なのでつきたいと思ってもつけられず残念。

## 17話目 それぞれの思い（前書き）

本日2回目の投稿です。

さっきまで4時間寝ていたのですが、疲れがいまひとつとれていないような。

## 17話目 それぞれの思い

エリアス・イン湖の邸宅

セフォリアさんの病気も治したし、宇宙生物の調査もある程度は順調ですし、これ以上あんまり問題がおきないようにしないと。

ただでさえセフォリアさんのインフルエンザを治したときに、尾行まで付けられたんですから怪しまれない程度にこの世界での立ち位置を明確にしておいたほうがいいんじゃないかな。

司令に相談したほうがいいかしらね。

セフォリアin別荘屋敷内

お父様とお母様がこんな田舎に来られるとは思ってもいませんでした。

しかも来た理由が私の病気の治療のためだなんて、治るなんて諦めていたので聞いたときも信じられませんでした。

今は全身の肌が綺麗になっている、私の肌ってこんなに綺麗だったんだ。

それにしても、急にやってきていきなり治してしまうなんてタスクさんて本当にどういった方なんでしょう？

話したいと思っていたことがたくさんあったのに、あんなに自信たっぷりな病気が治るなんて聞かされてそのまま話すことも出来ませんでした。

病気も治ったことですし、今度は色々お話をしたいですね！

カベルi n別荘屋敷内

お嬢様の病気が治った、それもこんなに短時間で。

ますますタスクと言う人がわからない。

たぶん間違いなく腕の立つ魔導士なのだろう、しかしその名前は聞いたことがない…。

先日知り合いに病気の治療などを行っている『タスクと言う魔導士がいないか』問い合わせしてみた、返事はまだ無いがなにか手がかりになる返事が返ってきて欲しいものだ。

ガウスレバス夫妻in別荘屋敷内

「家令のアウシュレバンからセフォリアの病気の治療ができるかも知れないと聞き急いで来た訳だが…」

「最初は信じていらっしやらなかったですわね」

男爵の話しかけにその妻が答える。

「それはそうだろ、今までどんなに手を尽くしても治らなかったのだぞ」

「そうですわね」

「それがたったの3日だぞ！」

「はい、3日でしたわね」

「この10年の苦勞とセフォリアの心勞は何だったのだ?!」

「本当に……あの子の今までの痛々しいのがいったいなんだつたのか……」

「なにはともあれあの子が治ったことは嬉しいことだ、これで婚姻の話も出てくるだろう」

「まあ！もう婚姻の話ですか？ちょっと早すぎると思いますわよ」

「何を言うか、あれはもう今年で24になるんだ、行き遅れと言われてもおかしくない」

「それはそうですね……」

「ともかくいくつか声をかけてみようと思っ」

「そうですね……それにしてもタスクさんってどういった方なんでしょうか？」

「それがさっぱりわからん、こちらに来る前に家令頭かれいがしらに調べるよう言ってきたがいまだになんの連絡もない」

「そうですね、それにしてもあんなに簡単に治してしまうのですから名の有る治癒魔導士なんじゃありませんか？」

「そうかとは思つが、おまえはタスクと言う治癒魔導士、聞いたことがあるか？」

「いえ、わたくしはありません」

「そうだろう、わしも無いのだ」

「家令頭かれいがしらからの連絡を待つしかないですわね」

「そうだな」

2人の会話はそこで終わった。

セフォリアイン別荘屋敷内

今日はタスクさんが来られる日だ、朝からいつ頃来られるか楽しみにしてる。

治療の魔道具の中から出てきて今日までますます肌が綺麗になってきてるよう、タスクさんが『出た後は栄養に気をつけた食事をして下さい』と言っていた、そしてそのとき『バランスよく食べれば肌はもっと綺麗になるはずですよ、睡眠も忘れずに！』なんて言っていた。

ことは通りになっている、この前のインフルエンザでしたっけ？あの病気のときも言われたとおりの時間には元気になっていた。

すごく腕のいい治療魔導士で間違いないです！

それにしても早く来ないかしら、御礼も言いたいし聞きたいこともいっぱいあるんですから。

マシュリー in 村内

タスクさんってどうも治癒魔導士らしい、しかもかなり腕の立つ。

ぜんぜんそんな感じがしなかったので、ずいぶんなれなれしくしてしまっただのではないかい？

普通魔導士と呼ばれるような人は、偉ぶっていて権力を笠にかけているような人ばかりって感じだから。

つくづくタスクさんはそんな感じがしない、それにガウスレバス家へ奉公に行っている村の子の話では『タスクさんはお忍びで村に来ているんじゃないか』と言っていた。

どこかのお偉いさんかもしれないって。

そうかもしれないね、考えてみればそう思うところがある。

こんな村に定期的にしかも10日ごとの市いちに毎回来るなんて今まで

誰も居なかった。

こんな村に珍しい装飾品をあんなに持ってきた人も居なかった。

薬は持ってきた人はいたがあんなに大人数を治せるほど大量に持ってきた人なんていなかった。

タスクさんとエリアスさんの会話も本人たちは気をつけているんだろうけど、ときどき聞いたこともないようなことを互いに言っているのを聞く。

魔導士と言われる人だったら合点がいく。

でもそんな人にこの村に住んでなんてことを言ってしまったよ、どうしようかね。

気分を悪くしてもう来なくなってしまうたらどうしようかね。

はぁ・・・・・・・・



## 18話目 誘い（前書き）

今回は肩書きを手に入れるお話です。

「ご都合主義のところは勘弁してください、なにぶん『おはなし』ですから。」

この肩書きを持つことによって、人間っているんなことを出来るようにもなります。

社会人でも営業先に挨拶するとき「〇〇会社の です」と言いますよね。

〇〇会社と言うのがある意味肩書きになるわけです、それがなければなかなか色々などころには行けませんから。

## 18話目 誘い

タスクin村の市 昼頃

「こんにちはマシュリーさん、元気にしてましたか？」市場いちばでマシュリーさんを見かけて声をかけた。

「これはタスクさん、はい元気です」

「どうしたんですか、なんだかいつもよりよそよそしいような気がします」

「そんなことないさね」

「そうですか？そういえばこのあいだエリアスにここに住んでみたらって言ってくれたそうで」

「そんなこと言ったかね、気分を悪くしたなら忘れてほしいんだが……」

「そんなことないですよ、ここはいいところですしずっと住み続けるのは難しいですが滞在する家は欲しいと思うんですよ」

「え？そうなのかい？」

そこまで話してエリアスが後ろから声をかけてきた、村人の態度が

今までに無いくらいよそよそしかったので今まで聞き込みに行っていたのだ。

「マシユリーさん、そんなによそよそしくしなくてもいいですよ。私たちは確かにいろんなことをやってはいますが、あなた達が考えているようなごたいそうな人ではありませんから」

「そんな言いようをするということは、私らが思ってることを知っているのかい？」

「はい、さきほど村の子供たちから聞きましたよ」エリアスが笑顔で答えた。

俺にはさっぱり話が見えてこない、何かあったのかな？

「村の子供から？どんなことを聞いたんだ？」

「はい、村の人は私たちが中央の偉い魔導士だと思っているようです」

「そうなのか？」

「はい」

「そうなんだよ、違うのかい？」マシユリーさんが疑問を直接ぶつけてきた。

エリアスと先日簡単に打ち合わせていたことをここで言うことにした。

「そうなんですか、一つ一つ説明します、まず魔導士かってことですが、すけどある程度の魔術的なことはできますね、そして病気の治療はそうですね結構得意かなって感じですよ」

「やっぱり魔導士だったんだね、どこのだい？」

「どこの？魔導士って言われる人はどこかに所属しているのが普通なのかな？」

「いえ、どこに所属してないですよ」

「どこにも召しかかられていないのかい？あんなに腕がたつのに」

「はい」自分で言っていて変な話だがこの返事はなんか間抜けに聞こえた。

「あんなに簡単に病気を治せるのに、どこで覚えたんだね？」

「えつとそれはですね・・・お爺さん？」自分で自分の言ったことに疑問符を付けてしまった。

「お爺さんから教わったのかかい」

「はい」そうしておこう、これ以上は教えられないってことにしよう、ぼろが出そうだし。

「おじいさんはさぞや名の有る人だったんだろうね、なんて方なんだい？」

どうしようか、いろいろ話さなきゃいけない感じになってきてる…。

「お爺さんは人との係わり合いがイヤで隠遁してしまっただんですよ、なのでこれ以上はちょっと遠慮させてください」

「……………そうかい、聞きたいけどこれ以上はやめておくよ。タスクさんがお偉いさんじゃなくてこれからもここに来てくれればそれだけで満足しなけりゃね」

「そう言ってもらえると助かります」

「じゃあ、どこかのお偉いさんでもないならこれからも普通に『タスクさん』でいいのかい？」

「そうしてください、お願いします。それにこの村に家を持つとも思っているんですからそんな他人行儀な態度はやめてください」

「すぐには無理かもしれないがそうするよ、村の人にも言うておくよ」

「お願いします」

その後はどのあたりに家をもとうか話していった。

「そろそろセフォリアさんのところに行ってきます、エリアスちよつと来てくれ」

「わかりました」

部下に店番を任せてガウスレバス家の別荘に向かった。

マシュリーさんも市いちで買い物を買わせて帰るといつていた。

向かう途中エリアスに自分たちの身分について場合によってはその場で取り繕うこともあるので、俺の話を絶えずモニターしてつじつまが合うようチェックして欲しいと伝えた。

エリアスも先ほどの会話で感じたのだろう、それについてはフォロ―すると行ってくれた。

いくつか身分について確認や打ち合わせをしているうちにガウスレバス家の別荘についてしまった、話しながらだったので思った以上に時間がかかった気がしない。

こんなに近かったっけ？

「こんにちは、タスクです」

中から戸をあけてようとしている音が聞こえてくる、扉があくと女中が「いらっしやいませ、お待ちしております」そう声をかけてくれた。

以前にも案内された応接室に通され、そこにはすでに夫妻が待っていた。

「ようこそ、お待ちしました」ガウスレバス家夫妻が出迎えて言葉をかけてくれた。

「セフォリアお嬢様のご様子を確認させていただきたく、お邪魔いたしました」

前回から来るとは言っていたので、これは完全な社交辞令のようなものだ、用件を何も言わずに話し始めるのを無作法と思う人もいるからな。

そこへセフォリアさんが部屋に入ってきた。

「いらっしやいませ、タスク様」

「部屋の方に行こうと思っていたのに、こちらに来てしまったか」  
ガルバジが声に出す。

「来るのを楽しみにしていたのですから、女中に、タスクさんが来たらずく知らせてと言っておいたのです」

「まあまあ、セフォはタスクさんが来るのを楽しみにしてましたからね」婦人が言う。

その後は治療成果の確認や気をつけることを話した、と言っても治療は完璧にうまくいっている。

こう言うのもなんだが、これほど完璧な治療は地球圏の人々には出ないかもしれない。

この星、ブルーマーブル星の文明が思った以上に進んでいないのでそこに住む人の病気耐性や自然治癒力が高いと考えられる。

太古の地球でも文明社会から持っていたただの栄養剤が、未開の住民の病気に想像以上の治療効果を及ぼしたと記録が残っている。

それと似たことがおこったのではないだろうか。

体調や病気の話がある程度終わってくると、ガルバジが当初から聞きたかったのだろ。こちらの素性を聞いてきた。

「タスク殿はただの商人ではありませんまい、どういった方なのか？」

「私も気になっていました」セフォリアさんも一緒に聞いてくる。

「あなたほどの腕の立つ治癒魔導士、失礼ながらそのお名前を聞いたことが無いのです」

「私もです、それにこの前聞くことが出来なかったのですが女中から見せてもらったイヤリング、あんな精巧なものはじめて見ました」

「ん？そんな物まで扱っているのですか、タスク殿ぜひご身分をお聞かせ頂きたい」

なんか思った以上にお偉いさんに見られている、村で思われている以上に過大評価しているんじゃないだろうか。

それにここに持ってきたイヤリングなんて子供の装飾品のレベルだぞ、そんなにすごいのか？

なんにしてもうまく説明しないと。でっ上げの話だが信じてもらえるようにしないと。

「そんなにかしこまらないで下さい、村の人からも聞かれたのですが、私たちはそんなたいそうな者ではありません」

「しかし！」

「まあ待ってください、そうですね確かに私たちには病気を治したり精巧なものを作ったりできます。それらはすべて祖父から受け継いだものでして、その祖父も今は亡くなりどこでどうやって手に入れた技術や知識なのかわからないのです」

「そんなすごい祖父殿ならどこかで話にのぼっていてもおかしくないのですが…」ガルバジが当然な疑問を聞いてくる。

「そうかもしれないませんが、私が物心つくころにはすでに世捨て人になっていまして接していたのは家族だけだったのです。しかも住んでいたのも森の奥ときていましたからほとんどの人はその森に人が住んでいたことも知らなかったのではないのでしょうか」

「それにしてもすばらしい知識と技術をお持ちの祖父殿だったのですな、してそのお名前は？」

「えーとですね、お恥ずかしい話いつもジジイと呼んでいたものですから、そういえばパウスとかつて呼ばれていましたね」

「パウス殿ですか？聞いたことがあるような無いような…」

聞いたことなんてあるわけ無いよ、俺がここで適当にでっちあげたんだから。もし居たとしたら偶然の産物、実在のパウスさんごめんなさい、まあいないとは思っけど。

「それに私自身もどこかに属してるわけでもありませんから、そんなに畏<sup>かしこ</sup>まらないでください」

「そうなのですか?!」ガルバジが勢いのある声で聞き返してきた。

「はい、そうですがなにか?」

「でしたら我が家に仕官されませんか!」

「仕官ですか?今のところそういったことは考えていないのですが……」

「ぜひ考えてほしい!結論をすぐとは言いません、娘を治して頂いたのですから無理強いをするのは気がとがめますのでいたしません。しかしタスク殿ほどの腕前でしたらこの貴族でも召抱えたいと思うはずですよ。どこからも声をかけられていないのでしたら是非我がガウスレバス家を考えて頂きたい!」

「そうなのですか?治癒魔導士と言うものがどう受け入れられているのか田舎者なのでよく解らないのですよ」

「魔導士も突き詰めれば腕前が大事なのですが、タスク殿ほどでしたら一流と言って差し支えないと思います」

「そうなんですか?今のところ声をかけられているところもないですけど、士官を考えていたわけでもありませんのですぐに色よい返事はできませんよ」

「そうでしょうとも、それだけの腕を持って商人のような生活をしているわけですから何か理由があるのでしょう。待ちますので他からも誘いがあつたらガウスレバス家はそれ以上の気持ちでお待ちしていると思ってください」

かなり熱心にガルバジは話してくる、士官なんて考えてもいなかったからな。

ともかくこの話にいい返事をするつもりはないから話を変えないと。

「まあまあ、タスクさんも急な話で戸惑っていますわ、ともかくタスクさんの知識と腕前で娘の病気も治ったわけですし、そんな堅苦しい話はそこまでいたしましょう」

「ああ、そうだなあれほどの腕を持っていながらどこにも属していないと聞き驚いたものだから、ついっな……」

「なにはともあれ娘を治して頂いてありがとうございます」シャウリ婦人が話を締めくくってくれた。

ともかくよかった仕官の話がここで終わってくれて。

「タスクさん、イヤリングなのですが私にもお売りしてただけな  
いですか？」

いきなりアクセサリーの話をふられた。セフォリア嬢はやはり女性だ、アクセサリーのことが気になっていたのだろう。

しかし困った、今回はあまり目立ったものは控えようと思ってそういったものをまったく持ってこなかった。

「それはいいのですが、今回は持ってきていないのです」

「そうなのですか？残念です……」

「タスクさんほどの人が扱っているアクセサリーなのですからそれは素晴らしい物なのでしょう?」この話にはシャウリ婦人も乗ってくる。

「それはもう、女中の持っていた物を見せられたときはビックリしました」

「まあ!それはぜひ私もお願いしたですわね」

「そうですね、次来的时候にはいくつか持ってきます」

「「お願いします」」2人が声を合わせた。

その後、タスクはアクセサリーや魔道具について色々聞かれるはめになった。

アクセサリーについてはエリアスもいたのでそれなりに2人で話してきたが、魔道具、我々にとっては科学文明の技術力だがどこまで話したらいいのかわからず適当に話を濁すことになってしまった。

## 18話目 誘い（後書き）

今回の話で今後さらに展開を色々持っていくことができると思います。

今まで考えていたことに持っていくのがやり易くなるんじゃないかと。

そんな中でも、タスクはできるだけ自分の力を出さないようにしようとしていきます。

宇宙生物も絡んできますが、さてどこで出そうか？？

地上でもエピソードは色々おきます！

19 話目 打ち合わせ（前書き）

めちゃめちゃ短いです

すみません。

## 19 話目 打ち合わせ

タスクin湖の邸宅

エリアスと今後について話をしてる。

先日村でマシユリーさんやガウスレバス家の人たちに適当に言ったことをどうやって妥当な話にしようかということだ。

それにマシユリーさんにも言った家についてもだ。

「司令、まずはこんな感じでいいですね。司令は祖父から魔術の知識と技術を受け継ぎ、それなりに腕のいい治癒魔導士である。

そしてどうしてこんな商人みたいなことをしているかと言うと色々なところを巡り落ち着ける場所を探しているところだった。

使用人らは祖父や両親の代から仕えてくれている信頼のおける者たちであるということ、そんなところでいいですか？」

「そうだね、あんまり聞かれてどうしても居られなくなったらトンズラしてしまおう、ここにいなきゃいけないわけでも無いからな」

「そうですね、それと家についてですが村にちょうど空き家になっているところがあるのでそこを掃除して使わせてもらってはどうぞしょう」

「そのあたりは任せるよ、ある意味別荘みたいなものだよな、行く度に宿屋に泊まるのはちょっと気を使っていたいへんだ」

「それと仕官についてなのですが」

「ん？それがどうした、仕官なんてするつもりはないぞ」

「そうだとは思いますが、身分を作る上では申し分ないかと思ひます」

「ん？たしかにそうかもしれないが……」

「はい、どこかに属している、しかもそれが貴族のお抱えとなればこれ以上の身元保証はないかと思ひます」

「フム、たしかにそうかもしれないな。仕官なんてまったく考えてなかったがそういつた面では申し分ないな」

「はい、とりあえず動き回る上では格好の肩書きになります、それに先ほども言つてましたが面倒ごとなんかには巻き込まれてしまつたら逃げてしまえばいいんじゃないですか、この湖の邸宅でもロプスにでも行つてしまえば誰とも接触しませんから」

「たしかにそうだな、仕官のこと受けてみようか」

「悪くないと思ひますよ」

最初はまったく考えていなかったが結局士官することにした、いつまでもここだけでウロウロしているのも飽きるだろうから丁度いいかもしれない。



19 話目 打ち合わせ（後書き）

最後にもう一度 短すぎてすみません

## 20話目 仕官（前書き）

投稿です。

時間が無く書きだめがなかなかできず、今回は書いてから1日ほどしかたっていない、読みのなおしが1回しかできてません。

ご都合主義の展開がいつそう進んでいます。

今日中にまた次話を投稿したいと思いますが、思ったようにできるか心配。

今回投稿の後半は今までの回想形式で若干の設定が出てきます。

はっきり言って設定はあまり考えていなかったのです。

もともと話のアイデアありきですので、それに合わせるように出てきた設定です。

それでも今後はいくつかその設定が出てくると思いますので、よろしくお願ひします。

## 20話目 仕官

タスクinガウスレバス家の別荘から

ガウスレバス家当主のガルバジに仕官についての話で別荘まで来ていた。

「それで仕官については考えてくれましたか？」

「はい、いくつか条件はあるのですが仕官させていただこうかと思  
います」

「そうですね、それは良かった、タスク殿のような方を野に埋もれ  
させておくのはもったいないですからな、それで条件とは？」

「はい、実は私事なのですがときどき急に行かなくてはならないと  
ころがあり、そのため突然連絡が取れなくなることがあります、な  
ぜかは聞かないで下さい。それと意に沿わないことはやらないこと  
を了承していただきたい、なにもガルバジ殿の言うことをまったく  
聞かないと言う訳ではありません。犯罪や良心に反することはたと  
え命令であつても聞けないと言うことです。いかがですか？」

「……………なるほどタスク殿に  
はタスク殿の矜持があるという事ですな、私もタスク殿の意に沿わ

ないことを無理強いしようとは思いませんので、わかりました」「一瞬の間だったけど返事が返ってきた。

「解っていただいで助かります」

「しかし最初に言っていた連絡がつかないとはどういう意味で？」

「文字通り急に連絡が取れなくなる場合があります、帰ってこないというわけではないです、ある事情により急に行かなければならないところがあるのです」

「しかし、それは近いところなのですか？帰ってくるということとは話の感じからどこかに行くように思うが」

「え〜、そうですね遠いと言えば遠いですけどすぐに戻ってこれると言えば戻ってこれるところでもありません」

「ふむ、よくわからんがタスク殿の言うことを信じるとしまして、こちらから仕官を持ちかけたわけですからな。それに戻られるというのですから」

まさか宇宙そに上がっているとは言えないからな、この前の宇宙生物の件がまだ解決したわけじゃないからどうなるかわからない。

それにあんまり縛られるのも嫌だから、こう言っておけば何かあるとき急にいなくなっても不思議じゃないからな。

その後、仕官はとくに問題もなく進み、村での家もエリアスに言っ

て住めるようにはなった。

ちなみに仕官はしたが普段は村の家にいることになった、ここでの仕官、とくに魔導士に関しては住む場所が個人の自由になっていることが多いそうだ。

研究に没頭する者がいたり、危険な実験をやりたがる者もいて無理に貴族の屋敷の近くに住まわせた場合何がおきるかわからないからだ、実際数十年前に研究実験の最中、大きな爆発があり貴族の屋敷も含めてすべて吹き飛んだことがあったからだ。ちなみにそのときの事故で10人以上の人が亡くなったそうだ。

そしてその後は徐々に住む場所の指定が無くなって行ったとのことだった。それに魔導士の仕官は、仕官と言う名のパトロンの意味合いが強いらしい。

そんなこともあり特に問題も無く普段は村に居ることが許されたのだ。だからと言って自由気ままに居るわけでは無く離れて住んでいる魔導士はその土地での住民台帳の作成や公共的な活動をする事が課せられていた。

他にも仕官先の貴族からの依頼で動いたり、公式の場に出たりすることもあるとのことだった。

仕官したことを機に、タスクは村に持った家に極々簡単な診療所を

作ることにした。公共的な活動はするようにと言われていたので  
ようど良かった。

と言っても簡易診断装置で診断し、持っている薬を渡すと言っ程度  
だ。

それに、思った以上にアクセサリー類が好評なのでそれらも置くこ  
とにした、しかし診療所とアクセサリーが一緒の場所にあるのはど  
うも違和感があり、すぐに部屋を区切り別々にすることにした。

それぞれの部屋が狭くなってしまったが仕方無い。

診療所は男女関係なく好評で、アクセサリー類についても女性から  
ものすごく好評でどちらか一つにすると言うことがまったく考えら  
れないほどだったのだ。

アクセサリーの常連客にはガウスレバス家のセフォリア嬢やシャウ  
リ婦人も居たのは当然である。

## エリアスの回想 in 湖の邸宅

私たちの艦隊が謎の空間湾曲に飲み込まれ、地球圏から約2億光年離れたこの宙域に飛ばされた。

幸いにも地球圏とは通信ができたが、その通信で戻ることは不可能だと確認しただけだった。

その後生存可能な惑星を見つけ来たわけだが、そこには人が存在していた。

数十億分の一の確率で幸運に恵まれ、司令と私たちの艦隊はこの星に定住することにし、調査を開始した。

調査を進めれば進めるほど、この星は地球圏とはかなり違うことがわかった。

人とは違う種族がいるのもわかった、炭素系生物だけではなく珪素系生物まで確認できた。

中には特殊能力者も確認された、ここではそれを使う人を魔導士と呼んでいることもわかった。

生活水準は太古の地球の15世紀ころと告示している、そして特殊能力者がところどころ快適な生活を送るために力を役立てているようだ。

我々は北半球の最西端に位置する地域に拠点を作り、接触を開始した。

暦いよみについても調査が完了した、この星の自転周期と公転周期は地球のそれと近く、自転周期が地球時間で24時間05分03秒、公転周期が360・003日だった。

月日の呼び方も簡素なもので、春の初めの月で春初の月（地球の北半球で3月頃）、春の盛りの月で春盛りの月（4月頃）、春の終わりの月で春終の月（5月頃）と言った感じだ。

夏や秋、冬も同じような呼び方のようだ、それぞれの月はつき30日、一つの月として1、年は12ヶ月としている。

実際には昔からの生活や習慣と密接に関係し呼び方ができたようだったが我々は解りやすいよう便宜的にこう理解した。

ちなみに我々がこの星に来たのは冬終の月（2月頃）の終わりのころだったようだ。今は夏盛りの月（7月頃）になっている。

経済活動も思った以上に活発で、貨幣での取引が一般化されていた。貨幣の流通があるという事は貨幣の価値を維持する権力者層も存在しており、太古の地球にあった王政の形式をとっていた。

王政と共に貴族階級も存在しており、いくつかの事象を経てタスク

司令は貴族の一つ、ガウスレバス家に仕えることとなった。

しかも治癒魔導士としてだ。

仕えると言っても、タスク司令がここで動く際にしつかりした肩書きがあつたほうがいいだろうと言うことで決まつたことで、簡単に言うと『見栄えのいい肩書きが欲しかった』ということ。

ガウスレバス家当主のガルバジさんにはとても話せないことだ。

ガウスレバス家に仕えることになり、村に滞在する家もち、そこで診療所を始め、いくつかの小物の販売もはじめそれなりに充実した生活が始まつたのではないだろうか。

そういえば忘れていたことが一つ！私たちがこの宙域にやってきた恒星系の方角から謎の宇宙生物が近づいてきた。

最終的には敵対行動と敵対意思が確認されたため破壊（生物ですが破壊と表現します）し、残骸を回収、地球圏との連携でその生物の調査をしている。

いくつか解つたことはあるが、それでも確定情報としてはまだまだで確度の高い現時点での推論にとどまつている。

今のタスク司令は1ヶ月のうち20日以上は村に滞在し、そのほかの日は湖の邸宅やロプスに行ったりしている、行き来しているのは主に宇宙生物について確認したり地球圏とのやり取りのためだ。

なんにしろ、忙しいような、それでいて無責任な生活を送っている。



## 20話目 仕官（後書き）

読んでいて、話の展開が会話形式による進行が大部分だとわかるか  
と思います。

以前読んだ本で、情景描写に力を入れすぎると逆に読みにくくなる  
と感じたことがあったからです。

会話形式主体で読んでみたいと思っていたのですが、思ったよりそ  
ういった物を見つけれませんでした。

そういったわけで、自分で書く機会があればそういった形で書こう  
と思っていたわけです。

それに文才が無いので情景描写ができないのもこういった書き方に  
なった経緯です。

なんとなくあとがきを書き始めたらこんな話になってしまいました。

ちょっと説明、

月の呼び方をなぜ作ったかは、地域によって月に対する意識の違い  
があるためです。

例えば日本では月の呼び方を順番に数字で当てはめて呼んでいます、  
1月、2月、3月といった感じです。

しかし英語では1月をJanuary、2月をFebruary、3月をMarchと言い、

決してThe first monthやsecond month、third monthとは言いません。

だからといって解りにくい設定を作ると混乱するので、季節を基準に考えました。

普段の会話でも「秋になってきたね〜」とか「冬ももう終わりだね」なんて季節の変わり目にはすると思います。

そんなところから考えました。

通貨については、それほど大きく取り上げて話を進めようとは思わないので触れません。

出てきたとしても〇〇ゴールドとか〇〇ペニー（これはあるオークションの単位でしたね）で、「1ゴールド=10円」などの具体的な通過価値は考えてません。

今後変わることがあったらすみません）ー（ニヤリッ

21話目 依頼（前書き）

本日2回目の投稿です。

## 21 話目 依頼

カベルinnガウスレバス家別荘屋敷内

今は主のガルバジ様とタスク殿の調査について話をしている。

「私のほうでもタスク殿について調査いたしました。結果は何も出てきませんでした」

「そうか、わしのほうでもここに来る前に家令頭に調査を依頼してきたが同じだ、何も出てこない」

「大丈夫なのでしょうが、そのようなものを引き入れて」主に対して非礼な言葉かもしれないが、これも本心から心配しているから出てきた言葉です。

「何も出てこないということは、少なくとも後ろめたいことはないのではないか？」

「はい、悪い話はすぐ広まるといえるのはあるでしょうから、しかしこんなに何も出てこないというのはおかしいかと」

「ふむ、そうだな、何にしろあれだけの腕前でどこにも召抱えられていないとなればぜひとも欲しいと思うのは仕方がないではないか、それにタスク殿の存在を隠すつもりもないので何かあるならいずれ何か出てくると思うのだ」

「わかりました、主の言うことももっともだと考えます、では私は今後どうすれば」

「タスク殿の存在を隠すつもりは無い、腕も認めている、しかしどこから何が出てくるかわからん、その対応を頼む」

なるほど、何か出てきた場合は逐一調べて報告し、臨機応変に対応せよということと理解した。

## タスクin村の診療所兼自宅

タスクの家は村の中央から少し西に位置し、裏は雑木林になってい  
る。雑木林を奥に奥にいくと湖の邸宅に着く、数十キロの距離だが。

以前は家族4人が住んでいたのだろう、それなりの広さはある。

しかし、一番大きな部屋を診療所とアクセサリーなどの販売所で2  
つに分けているのでどうしても手狭に感じてしまう。

そんなふうに使っているので他の部屋に中2階をつくったりして、  
少しでも使いやすいよう工夫をしている。

いつかは小さな小屋でも作りそこに診療所なり小物売り場などを移  
したほうがいいな、そんなことを考えている。

そしてそんなところにガウスレバス家の使いのものだと名乗る人がやってきた、広い部屋が今はないので一番広い診療所で話を聞いている。

「主から依頼があり、それをお伝えにきました」そういつて親書を持ってきたのだった。

文字についても調査は出来ていてすでに圧縮記憶注入はすんでいる。

手紙を読み終わり使いの人に話しかけた。

「私に、ガウスレバス領内の村を定期的に回って欲しいと？」

「はい、そうです、治癒のできる魔導士であちこちを回ってくれる方がいないもので、治癒魔導士が仕官された場合は必ず打診される慣例のようなものです」

「そうなのですか、しかし魔導士の場合はかなり自分の思い通りにできる待遇とお聞きしましたが、これだと自分の時間がとれないほどになってしまつのでは？」

「たしかにそうですが、実はそうでもないのです。先ほども言ったようにこれは慣例のようなものと。しかも打診されるものだと、ぶつちやけて言うのですね断る人が多いのです」

「ぶつちやけましたね」いきなり言葉遣いが変わった感じだ、しかし当の本人はあまりそうは思っていない。

使者としては新米なのだろうか、丁寧な言葉とそうでもない言葉、乱暴な言葉の使い分けがまだまだだ。

「仕えている魔導士の方々でも基本的にかなりの自由があります。断る自由もです。すべてを断ることはできませんが、例えば今回のような依頼の場合行くことはできないが住んでいるところで診療をし、遠くから来た者は格安で診察すると言った感じですよ」

「なるほどね」

「しかし、離れた村に治癒魔導士が不足しているのも事実です。しかもガウスレバス領はもともと治癒魔導士が不足しているんですよ」

「と言うと？」

「5年ほど前、治癒魔導士が亡くなられて、そこで学んでいた若い治癒魔導士も霧散してしまい、今はガウスレバス様のガウスレバス市に数人居るだけなのです」

「その人たちはなぜ村を回ったりしないので？断られたんですか？」

「以前は行っていたですよ、数十年前は」

「数十年前？」

「はい、高齢で移動するのがつらくなってきてるんです、かなりの高齢ですから、たしか皆70台だったかと、あ！最高で80台の方もいたはずですよ」

「それはまた、タイヘンだ」

「どうですか、回ってもらえないですかね」行って欲しいと思って

いるのだろうが期待が大きいとも感じられない、他の領地では依頼があつたら代案を出してほとんど断ることが多いのだろう。

「わかりました、回りましたよ。」

「やはりそうですか、わかりました…え？回ると言いましたか？」

「はい」

「ほんとにですか？」

「はい、いいですよ。人助けになるのでしたら定期的に回りますよ。」

「そうですか！助かります！他の村の人も助かります！」

「スケジュールについてはのちほど連絡します、そしてお願いなのですがそれぞれの村の人数や男女比、年齢の分布などがありましたら教えてください」

「そんなものが要るんで？」

「はい、診療に回るわけですから最低限の資料は必要です」

「そうでしたか、今までそんなものが必要だとは聞いたことも無かつたものですか」

「そうでしたか、私は他の治癒魔導士の方とちょっと違いますからね。やり方も違つかもしれないです」

「いえ、こちらも回っていただける方が5年ぶりですので資料が残

つていなかったただけかもしれない、ともかく依頼のものについては出来るだけ急いで用意します」

「お願いします、そういえば回って欲しい村の数はどれほどあるのです？」

「そうですね、全部で5箇所です、あ！この村が外れますので4箇所です」

「わかりました、それではこちらにも準備できましたら出発しますので資料のほうお願いします」

その後はこの場で解る範囲で各村の状況を聞き、話は終わった。



## 21話目 依頼（後書き）

どうにかこうにか投稿しましたが、今回も読み直しが1回です。

どうなんだろうか、こんなんで。

今回は今日中に投稿できればいいのですが、日が変わった直後にでもできればいいな、できるかな

ともかく！明日の朝までにもう一回投稿目標です！

その次はたぶん1〜3日ごとの投稿になるだろうな……

おかしなところがあれば教えてください、誤字も今まで以上にあるかと思えます。

## 22話目 ガウスレバース市（前書き）

とりあえず投稿です。

急いなのですが話はあまり進んでいません。

## 22話目 ガウスレバス市

タスクインガウスレバス家お膝元、ガウスレバス市 \*\*夏終の月  
後半\*\*

それぞれの村を回るには一度ガウスレバス市を経由しないと行けな  
いらしい、村から村へ直接繋がる道はあるのだが危険が大きいと言  
う。

護衛がしっかりしていないと通って行く者はいないとのこと。

地理的にはガウスレバス家のお膝元の市しを中心に放射状に配置されている。

今までの村はコバタ村と呼ばれていてガウスレバス市から西に位置している、それぞれの村へは中心の市から1日ほどのところだ。

タスクは資料が送られてくる前にガウスレバス市へ向かった。届くのを待っているよりこちらから出向いたほうが少しでも早く村を回れると考えたからだ。

ガウスレバス家は市の中央に近いところに屋敷をかまえ回りと比べても一回りも二回りも大きさが違うのがわかる。

領地の中心の市だけあってかなり町は大きく、事前の調査で2万人以上いることがわかっている。

そして今はそんな中心地でガウスレバス家の屋敷にタスクが来たことを家令が伝えに行き、待たされているところだ。

少しして人がやってきた。

「お待たせしました、どうぞ中にお入り下さい」案内に出てきたのはカベルだった。

「これは久しぶりですね、カベルさん」

「そうですね、どござい」

屋敷の中は一流と言っていいのだろう、いくつかの装飾品が飾られていたが思ったよりその数は少なくどちらかと言うと質素と言っていい感じだった。

正門から歩くこと1〜2分、廊下はまだまだ続いている、そんなところで急に立ち止まりカベルは一つのドアの前でとまりノックした。

目的地に着いたようだ。

「タスク殿をお連れしました」

「はいれ」中からガルバジの声が聞こえてきた。

中に入るとガルバジとセフォリア、それと見知らぬ人が2人いた。応接室なのだろう思った以上に広くゆったりしたソファアが置かれている、ソファアと言っても地球圏で見るそれとはどうしても見劣りしてしまうが。

「よく来られたタスク殿、まさかこんなに早く来るとは思わなかった」

「はい、早く出ればそれだけそれぞれの村に行くのが早くできると思いやってきました」

「それは助かる、何年も村を回ってくれる治癒者が居なく困っていたものでな」

「お久しぶりですタスク様」セフォリアが声をかけてきた。

「お久しぶりです、と言っても前回から10日ほどしか経ってませんよ」

「そうでしたか？」

「はい」

「タスク殿、紹介する、こちらがガウスレバス家筆頭魔導士マウジリアと家令頭のセバスだ」

ガルバジが見知らぬ2人を紹介してくれた。

「筆頭魔導士マウジリアと申す、主に攻撃系をあつかっている」自己紹介してくれたマウジリアは身長170センチ以上、痩せ型で金髪、歳は20台半ばくらい、ぱっと見美男子とを感じるが人を見下しそうな感じがする。

話し方も『俺のほうが優秀な魔導士だぞ』と意思表示している感じがする、魔導士と言う触れ込みで俺は来ているので対抗心があるんだろう。高圧的な感じがする。

「家令頭のセバスといいます」続けてセバスが自己紹介してきた、歳は50前後だろうか背は160センチほどで少し白髪が混じっている。体体型は中肉中背でがっちりしてはいないが太っている感じもしない。

「タスクと言います、よろしく願います」

自己紹介をすませ早速本題に入っていた。

「村を回る際に必要な資料をお願いしていましたが、いかがでしょうか？」

「あのような資料が必要だとは聞いたことがない」マウジリアが声をはさんだ。

「たしかに私も聞いたことはありませんが、それだけタスク殿が特殊な魔導士と言うことではありませんか」家令頭のセバスが言うてくる。

「そんなものが必要だとは、タスク殿はどんな治癒を行うのです？」マウジリアが突っかかってくるようなことを聞いてくる。

「まあ待て、タスク殿にはセフォリアの病を治してもらった。他にもコバタ村での村人数十人の病気も一晩で治してしまった。腕は確かだ、恩のあるタスク殿にあまり失礼なことは言わぬように」

「…わかりました、出すぎたことを言いました」

言葉は謝罪の言葉だが、態度は謝っているように感じない。

しかしガルバジは年の功だろう、それ以上は深く追求しなかった。

「ふむ、解ってくれてうれしく思うぞ。それでタスク殿、あれらの資料なのだがもう1日待って欲しい、今家臣等にまとめさせているところなのだ」

「わかりました、それでしたら今日のところは宿でもとって明日またお伺いします」

「ん？宿など取らずともよいぞ、今夜は当家に泊まっていけばよい」

「そうしてくださいタスク様」セフォリアも賛成してくる。

「よろしいのですか？」

「当然だろう、タスク殿は我が家臣で普段は他の村にいるに過ぎない。ガウスレバス家のお膝元に来た際、家臣は当主のところ滞りするのは普通のことだ。特別な理由が無い限りは遠慮する必要はない」

「そうなのですか、わかりましたそれでは今夜はここに」

「そうしてくれ、セフォリア、タスク殿を部屋に案内してくれ、お前も何か話したいことがあるのだから？」

「はい、お父様、ありがとうございます」我々はセフォリア嬢に案内され部屋を出て行った。



## 22話目 ガウスレバス市（後書き）

近々戦闘らしきものを出したいと思っています。

どんな戦闘になるか、もう考えていますがあまり楽しくは無いです。

1〜3話以内にだそうと思っています。

### 23話目 セバスの心境（前書き）

書き貯めが少しずつできてます。

もう少しできればいいのですが、ここしばらく連休がとれないので今は我慢のとき。

## 23話目 セバスの心境

### セバスイnガウスレバス邸

今日旦那様がコバタ村でスカウトした治癒魔導士が来ると言っていた。

ガルバジ様みずか自ら仕官を勧めることがあるとは思ってもいなかった。

しかしセフォリアお嬢様の病気を治されたというのだから、腕は確

かなのだらう。

あれほどの年数治すことができなかつた病気を、たったの3日で治したのだから。

「タスク殿をお連れしました」カベル殿の声だ。

「はいれ」ガルバジ様が声をかける。

タスク殿と使用人の女性だらうか、2人だった。

「よく来られたタスク殿、まさかこんなに早く来るとは思わなかつた」ガルバジ様が話しかける。

「はい、早く出ればそれだけそれぞれの村に行くのが早くできると思ひやってきました」

「それは助かる、何年も村を回ってくれる治癒者が居なく困つていたものでな」

「お久しぶりですタスク様」セフォリアお嬢様もタスク殿に挨拶を交わす、別荘から帰ってきてからタスク殿の話は何度も聞かされたので、お嬢様はタスク殿がお気に入りなのだらう。病気も治しても

らったので当然といえば当然ともいえる。

「お久しぶりです、と言っても前回から10日ほどしか経ってませんよ」

「そうでしたか？」 ずいぶん親しげに聞こえる。

「はい」

「タスク殿、紹介する、こちらがガウスレバス家筆頭魔導士マウジリアと家令頭のセバスだ」

私とマウジリア殿を紹介してくれた、ガルバジ様自らしていただけるとはタスク殿をそれだけ買っているのだろう。

「筆頭魔導士マウジリアと申す、主に攻撃系をあつかっている」マウジリア殿は少し尊大な感じがする、同じ魔導士として対抗意識があるのだろう。

こういった性格じゃなければもう少し人気も出るのに、もったいない。

「家令頭のセバスといいます」続けて私が挨拶をした。

「タスクと言います、よろしくお願いします」特に印象のある方ではないなタスク殿は、どちらかと言うと魔導士には見えない。なんと言つか良く言って手を抜いている軍人、もしくは鍛えている文民の印象を受ける。

「村を回る際に必要な資料をお願いしていましたが、いかがでしょう

うか？」さっそく本題に入った、実質主義なのだろうか。

「あのような資料が必要だとは聞いたことがない」マウジリア殿が声をはさんだ。私も同じくそう思った、しかしその口調はあまり良くないと思うぞ、しかもガルバジ様の前なのだからもっと遠慮するべきだ。

「たしかに私も聞いたことはありませんが、それだけタスク殿が特殊な魔導士と言うことではありませんか」マウジリア殿をここで少し牽制しないといいけないだろう。あまり好き勝手に言わせるとどうなるかわかったものではない。

「そんなものが必要だとは、タスク殿はどんな治癒を行うのです？」マウジリア殿がさらに言ってくる、いい加減に遠慮してほしい、特殊な魔導士と言うことで引き下がってほしかったのに。

「まあ待て、タスク殿にはセフォリアの病を治してもらった、他にもコバタ村での村人数十人の病気も一晩で治してしまった。腕は確かだ、恩のあるタスク殿にあまり失礼なことは言わぬように」

「…わかりました、出すぎたことを言いました」結局ガルバジ様が直接たしなめるようなことを言うことになってしまった。

「ふむ、解ってくれてうれしく思うぞ、それでタスク殿あれらの資料なのだがもう1日待って欲しい、今家臣等にまとめさせているところなのだ」

「わかりました、それでしたら今日のところは宿でもとって明日またお伺いします」

「ん？宿など取らずともよいぞ、今夜は当屋敷に泊まっていけばよい」

「そうしてくださいタスク様」セフォリアさまは嬉しそうだ、それにタスク殿は思った以上に遠慮深い人のようだ。

「よろしいのですか？」

「当然だろう、タスク殿は我が家臣で普段は他の村にいるに過ぎない、ガウスレバス家のお膝元に来た際、家臣は当主のところ滞在するのは普通のことだ、特別な理由が無い限りは遠慮する必要はない」

「そうなのですが、わかりましたそれでは今夜はここに」勧められたことの返事にも適度な遠慮と感謝の気持ちが感じられる。

「そうしてくれ、セフォリア、タスク殿を部屋に案内してくれ、お前も何か話したいことがあるのだから？」

「はい、お父様、ありがとうございます」セフォリア様は機嫌よく部屋を出て行った。

残された私たちはそこでそれぞれの感想を話しはじめた。

ガルバジ様はタスク殿を好意的に思っているのは間違いない、ご自分で仕官を勧めたほどなのだから。

「マウジリアはどう感じた、タスク殿を」

「私は身元が調べきれないと言うのがどうにもひっかります。それ

に本当に腕がたつのか、お嬢様を治せたのはたまたま偶然だったのではありませんか？」

対抗意識がありありとわかる、旦那様も感じてはいるのだろうかそれを窺<sup>たしな</sup>めることはしない。

もともとこのガウスレバス領には魔導士が少ないため、旦那様から魔導士が他の領地に行きたいと思わせるようなことを言わないようにしているのだ。

マウジリア殿自身は旦那様がそこまで考えているとは思わず、聞かれたことに自分の思っていることを正直に言っているようだ。

頭はいいのだが、人の気持ちというものを察するのがどうにもできないのだ。

ガウスレバス家は中央の権力闘争から離れて30年以上になると言うことは傍目にみると低迷している領地に感じられる、魔導士もそんな貴族のところには仕官しようと思う者は少ない。

マウジリア殿は先代の旦那様の知り合いのご子息と言うことで、5年前に亡くなった治癒魔導士として活躍していた筆頭魔導士の後釜になったのだ。

20代前半で筆頭魔導士となった。筆頭魔導士になるにはかなり早いと言える、自分自身では優秀な魔導士と思っ込んでいるようだ。

他の魔導士がマウジリア殿より若いか、もしくはかなりの高齢で、筆頭魔導士になるのを辞退したからお鉢が回ってきただけなのだが。

確かに若手の中で腕前は一番だろうが、性格に問題があるのが困ったものだ。

「セバスはどうだ？」

「はい、悪い印象はありません、どちらかと言うと好印象を持っています。若干作法がまだのところはありますが慣れていないためでしょうから。それに憤み深さもあるようですね」

最後の憤み深さについては、マウジリア殿へ聞かせたいと思って付け加えた言葉だ。

「そうか、わしも悪くは思っていない、娘を治してもらったのだから恩義すら感じている。それに巡回してくれる治癒魔導士なのだから大事にしたいとも思っている」

マウジリアは不満そうな顔をしているが、私は旦那様の意見に賛成だ。

恩を感じているのなら、恩で報いるのは当然なのだから。

「もっともだと思います、旦那様」

「うむ、しかしまったく身元がわからないと言うのも事実、カベルには何かあった場合の対応を申し付けている、カベルとの連絡を忘れぬよう」

「わかりました」「最後の指示についてはマウジリア殿と私の声がトーンは違うが同じ返事だった。」



### 23話目 セバスの心境（後書き）

パソコンが一台壊れてしまいました。

他にもあるので大丈夫なのですが、考えてみると今書き貯めしているものが消えたらどうしよう？

どこかにバックアップとっておかないとダメだな。

USBメモリでもいいかな？

24話目 自衛(前書き)

少し早く帰ってこれたので投稿です。

ご都合主義あります！すみません

## 24話目 自衛

セフォリア in ガウスレバス邸客間までの廊下

タスク様が来ました。

いつも一緒にいるエリアスと言う方と共に。

いつも一緒にいるけどどういう人なんでしょうか？

それより、以前からタスク様に頼んでました特別製のイヤリングは持ってきていただけたのでしょうか。

「タスク様、ここまでお疲れではないですか？」

「大丈夫ですよ、それよりセフォリアお嬢様の気になっているのはご依頼のものではありませんか？」

「そんなことは……」

「わかりますよ、持ってきてますので後ほどお渡しします。特注品

ですので他にはありません」

「そうですね、楽しみです」自分でも顔がほころぶのが解る。

タスク様もそんな私をみて少し笑ってる、ちょっと恥ずかしい。

タスクinnガウスレバス邸から出発

翌日の朝村の状況を示した資料をもらい出発した。

もらった資料は羊皮紙のようなものに書かれていた、ここでは本来羊皮紙は高価で簡単に渡してくれるものではない。

しかし今回ガルバジは奮発したようだ、惜しげもなく渡してくれた。タスクもありがたく受け取った、何かお礼しないとダメだな。

タスクのほうが悪を売っていて返す必要などないのにそんなことを考えてしまう。

村へ行くにあたり案内役も兼ねて護衛の衛士がついてきている。

それはタスクのところの手紙を持ってきた若者だった、名前はポラスと言う。なんだかわいらしい名前だが20歳ですでに成人だ（ここでは成人は15歳とされているとのこと）。

結婚もしており子供もいるそうだ。

「それにしてもタスクさんはすごい治癒士だそうですけど、どの方面が得意なんで？」

目的地に着くまで、雑談しながら徒歩での移動なのでポラスは色々聞いてくる。

我々、タスクとエリアス、それに護衛兼荷物持ちで連れてきている部下の全部で3名はひっきりなしの質問攻めにだんだん辟易してきていた。

今ではエリアスがおもに対応している。

「方面と言つと?」 エリアスが意味がよく解らず聞き返している。

「怪我とか病気とか、そんなようなことですけど」

「なるほど、そうですね特にどちらが得意と言つわけでもなくなんでもできますよ」

「そうですか、それは頼もしいですね。町にいる治癒士なんて怪我が得意のと病気専門なので、もし間違つて反対のところに行こうものなら逆にひどくなることもあるんですよ」

「そうなんですか」

ここまで話していて護衛に着いてきている部下が声をかけてきた、

「司令、少し先に生き物の反応があります、攻撃性が感知できます」  
小さな声だ。

「なんだ? 敵か?」

「はい、魔獣と呼ばれるものかと思います」この地域には魔獣と呼ばれる人を襲う生き物がいるらしい、しかも村へ続く道でも出るらしい。

ガウスレバス市から村に続く道では、それでもかなり少ないが出る  
ことがあるらしい。

だから護衛をつけると言っていたのだな。

「エリアス、魔獣らしい」

「魔獣ですか？どこにいます！」話が聞こえたのだろうポラスが聞いてくる。

「道の右側、50メートルほど先の茂みにいるようです」護衛の部下が話す。

「あんなに離れているのにわかるのか？」ポラスが聞いてくる。

「伊達にタスク様の護衛はしていない」

「たしかにそうだな、ここは私にまかせて、後ろに下がっていてください」

「大丈夫か？」俺が心配になり聞いてみた。

「大丈夫です、何度も経験がありますから」

「そうですか、わかりました。まかせます」

ポラスが単独で前進し魔獣のいると思われる茂みに近づいていった。我々はその場にとどまっている。

一瞬だった、茂みから思った以上に大きな生き物が2匹出てきた、熊に似ているが少し小さい、体長1メートルほど、頭には牛のようなツノが生えている。

魔獣がポラスの右側から腕を振り回し殴りかかってくる、大きな爪もあるのだとすると一撃でやられるだろう、しかしポラスはうまく左にかわし剣で切りかかる。

魔獣の皮は思った以上に分厚いのだろう、まったく切れる感じがしない、切るのをあきらめ突き刺すことに変えた。

ポラスは振り回される腕を避けながらスキをつけて剣で突きをいれている。

2匹からは連携などと言うものは感じられない、やたらめったらに襲ってるように見える、ポラスも苦戦はしているがやられるような感じもしない。

魔獣は出血しているがなかなか致命傷にならない、魔獣が大きく吼えた、それが合図だったのだろう倒せないと思ったポラスに背を向け2匹とも標的を変えこちらに向かってきた。

「タスクさん、思った以上に強敵です、逃げてください」ポラスが逃がすまいと追ってきているが野性の生き物に足の速さになうわけがない。大声で逃げるよう言ってくるが間に合わない。

さすがは魔獣！すぐに目の前にやってきた、エリアスも護衛の部下も魔獣と対峙している、魔獣は鉤爪を俺に向け振り下ろしてきた。

ガン！魔獣の爪は見えない壁にでもぶつかったように空中で止まってしまった、魔獣は意味もわからず何度も爪を振り下ろすがまったく届かない。

「Gyaaaaa!」大きく吼える。

防護シールドが完璧に作動している、ロプスからの全面バックアップとエネルギー供給があるので物理的な力だけでは、それこそ小惑星を破壊するほどの力でもない限りびくともしない。

ポラスが来てしまう前に片付けてしまわないとだめだ、近くでレーザーの発射を見られるのは避けたい。

「<sup>撃</sup>shot！」俺が小さく言うと四方の空中に配置してあった極小型浮遊レーザーが魔獣を切断した。細切れである。

魔獣は何が起きたのかわからなかっただろう、一瞬だった。

エリアスも護衛の部下ももう一匹の魔獣を小型ブラスターとレーザーブレードを使い倒してしまった。

吼えようとしたのだろうが、空気を吐き出すことすらできず絶命した。

地面には俺が倒した魔獣の肉片とエリアスたちが真つ二つにした魔獣が地面に転がっている。

走ってやってきたポラスが呆然としていた。

一瞬の間があった。

「何をやったんです？」

脳波に連動している装置が過剰に反応し、魔獣は原型がまったくわからない状態にまでなっている。

科学技術による防御を説明してもわからないだろうから、この場は

適当に誤魔化すことにした。

「一瞬のことだったので加減ができませんでした」

「すごい！あの魔獣を一瞬で倒してしまうなんて、こんな見た目とない！」

「そうですか？」

「あの魔獣はバウベアと言ってこのあたりではかなり強いんです」

「そうなのですか」

「それにしてもすごい！タスクさんもすごいがエリアスさんも、それに使用人の方も信じられないほど強いですね」

「まあ、今までに森の奥で生活していたこともあるので、それなりに自衛はできますよ」

「そうなんですか」

「はい」

そこまで話すとポラスは倒した魔獣を調べている。

一匹はそれはもう綺麗なくらい細切れになっていてまったく原型をとどめていない、もう一匹は体の真ん中辺りで横に真っ二つになっていたのので容易に調べることができた。

「それにしても、こんなに見事に粉々になっているなんて……」

「………それにしてもなんでこんなのがこんなところにいたんだ？」ポラスがぼつりともらす。

「は？バウベアでしたっけ、普段はこのあたりにいないのですか？」普通に疑問を聞いた。

「ええ、バウベアは本来こんな街道あたりに居るはずはないんです、森の奥とか洞窟にいるのが普通で……こんなに人のいる近くで出るなんてどうしたんだろう」

「そうなんですか、なんにしてもここで考えていてもどうにもならないので村に急ぎましょう、村で何か情報が聞けるかもしれない」

「そうですね、では少し待ってください、魔獣の亡骸なきがらを道の真ん中に置いておくわけにもいかないんで片付けます」

そうやってポラスは亡骸を街道から少し外れたところに穴を掘り埋めだした。

我々も少し手伝った、魔獣を倒した場合、街道などの人が通る場所だったら道から少し離れて穴を掘って埋めたり、焼いてしまうのが暗黙の決まりなのだそうだ。

その際、倒した魔獣の特定の部位を取って持って行くと、領地によつては換金できたりするようだ。

その後は順調に村まで行くことができた、その際ポラスは先ほどの『魔術』について聞いてきたが適当にごまかしておいた。

一つお願いしたのは、『あちこちで話して欲しくない』と。マウジリア殿や他の古参の家臣達と対立するようなことはしたくないので攻撃魔術を使えるのは内密にして欲しいと。

ポラスも人間関係が大事なものは解ってるようで、他言しないと約束してくれた。

今回は思いもよらず、魔獣が襲ってきたので一瞬で倒してしまったが失敗だった、アポロからかなり獰猛なものも居るとは聞いていたが思っていた以上だ。

幸いポラスしか見ていなかった、他言しないと申言ってくれたのがせめてもの救いだ。

## 24話目 自衛(後書き)

今のところ1・5話分くらいは書き溜めできました。

早く帰ってこれたのでもう少し書くぞ！

でも眠いのもあるのでどこまでできるか！

## 25話目 村長の話(前書き)

仕事が休みです。

2連休なのでこの機会に書き貯め、投稿をしたいと思ってます。

それにしてもつくづく名前のアイデアが無いです。

村の名前何かありませんかね？

あればご意見とか欲しいです。

## 25話目 村長の話

タスクインガウスレバス北西村

昼前には北西にある村、コシロ村に着くことができた。

村の中央に近い見た目は普通の家で、何件か並んでいる家の一件の前でポラスはドアをノックしている。

出迎えてくれたのは、この村の村長にあたる一番高齢の男性だった。

「ポラス殿、よく来てくださいました！」60歳くらいになってい  
るだろう、今まで出合った人の中では一番高齢に見える。

医療技術が思った以上に発達していないのと、医療を簡単に受ける  
のがまだまだ特権階級に限られているので平均寿命が思った以上に  
低いのだろう。

「ハウジさん、お久しぶり、どうしたんですか？今回来たのは定期  
的に回ってくれる治癒魔導士を案内してきたのですが」

「治癒士殿ですか、それはありがたい！」

「はじめまして、タスクと言います、よろしく願います」

「これは、ありがとうございます、治癒士殿が来て頂けるなどもう何年もなかったので助かります」

「そうですね、これからは定期的に来たいと思いますので何かありましたらなんでも言ってください、出来るだけ力になりますから」

「ありがとうございます、さっそく見ていただきたい者がいるのですが、それにしても治癒士殿はずいぶん腰の低い方ですね」

「そうですね？」

「はい、魔術を使う方で庶民にそんなに丁寧な言葉で話されるなんて初めてです」

魔導士は横柄なものだという認識が定着しているんだろうか、まあ筆頭魔導士のマウジリアを見ていると解らないでもないけど。

「それにしてもどうしたのですか、いつもと違うようだが」ポラスが村に入ってから気になっていたことを聞く。

村に入ってから何件かの家が壊れていたり、一部が焼けてしまっている家が目に付くのだ。

「じつは、2日前なのですが普段は森の奥にいるはずの魔獣が村まで来て人を襲ったのです」

「！」

「今までこんなことがなかったものでどうにもできませんでした」

「人を襲ったんですか？けが人は？」

「はい、何人かいますので見てやってください、案内しますので  
そういつて村長は村で一番大きな建物に案内してくれた。

感覚的には公民館のようだ、広い広間がありそこには20人ほどの人がいた。一時的な避難所のようだ。

「魔獣に家を壊された者たちです」村長が言った。壊された家になると危険なのでここに避難しているそうだ。

「思った以上に被害があるようですね、なんですぐに領主様に訴えなかったのです？！」

「昨日訴えに行こうとしたのですが、向かった者が村から少し行っ  
たところで魔獣に襲われ逃げ帰ってきたのです」

「それでは孤立状態じゃないですか」

「ハイ、それでどうしようか思案していたのですが、そこへあなた  
達が来て下さったわけです」

村長は細かく説明してれた、2日前の夜に森からいきなり魔獣が大  
量に出てきて村を襲ったのだそうだ。確認できただけで4種類以上、  
合計20匹以上の魔獣だった。

まったく警戒していなかったので怪我をした者や家を壊された者が  
出たが、その夜はそれでもどうにか男たちを集めて、明け方頃には  
魔獣を森に追い返すことができた。

もともと戦闘に不慣れな、普通の平民なのでかなりの苦戦だったよ  
うだ。

朝になり領主に知らせようと2人の男がガウスレバス市に向かった  
のだが、村から離れること500メートルほど行ったところで魔獣  
に襲われたのだ。

その魔獣は明け方まで撃退していたものの一匹だった、怪我を負わ  
せた箇所を村の男が覚えていたのだ。

魔獣が待ち伏せをしていたのか？待ち伏せと言うより包囲されてい  
ると考えたほうがいいかもしれない。

どういうことだ？魔獣が積極的に人を襲うなんて。

ポラスの話ではガウスレバス領内には確かに凶暴な魔獣もいるが手  
を出さなければまず襲ってくることは無い魔獣ばかりだそうだ。

「とりあえず、けが人の治療をしましょう」そういつてけが人を見  
ていった。思ったよりケガ人は少ないがそれでも10人ほどいるよ  
うだ。

我々の治療は実際には魔術ではないので一瞬で治るようなことはな  
い。魔術だったら一瞬で治るのかは知らないが。

しかし極短時間で治すことはできる、ある程度の怪我までだとナノ

マシンの補助による細胞再生を行うシップのようなものを患部に貼り付けて治す。

ほとんどの怪我だったら5〜6時間でどこに怪我をしていたかわからないくらいになる。

同時に急速に怪我を治すために必要な補助剤も服用してもらおう、あまりにも急激なため体のなかのエネルギーを急速に消費してしまうためだ。

怪我は治ったが疲れて立つこともできない、なんてことになりかねない。

重症の者も1人いた、骨折だ。

骨折のような治療は地球圏では治療装置に入って治すのだが、ここには持ってきていなかった。

仕方が無いのでナノマシンと細胞活性剤のみで治療することにする。

この二つの併用だけでもかなり早く治るはずだ。治療装置だったら18時間で治るのだが。

夜には骨折以外の患者は治り、今後の対策について話をする事になった。

「治癒士殿のおかげで皆も元気になりました、ありがとうございます」

「いえいえ、治ってよかった」

「それにしても治癒士殿は怪我を治すのが得意なのですか？怪我のあとも残っていないなんて今まで無かったもので皆も驚いています」  
それはそうだろう、ナノマシンが細胞の遺伝子を読み取り、活性化した細胞に働きかけて治すのだ、その際に回りの細胞との調整も行うので跡なんてほとんど残らない。

「怪我のあとは残らないにかぎりますからね」

「たしかにそうですね」

「それでどうしますか、魔獣の対策を」ポラスが言ってくる。

「怪我が治ったものもいますので、男手が40人ほど確保できます」

「そういえば村にくる途中でバウベアがいましたね、もしかしてあれもここを襲った魔獣の仲間なのでは？」疑問に思っていたことを俺が言う。

「そうだと思う、あんなところにいるはずがないからな」

「来る途中にもいたのですか、魔獣が作戦を立てているので？」村長が信じられないような顔をしている。

「そんなことは無いと思う、理由はわからないがまとまっているのは確かだと思うが作戦を立てるようなことはないはずだ」ポラスが考えを言う。

「そうですね、ここに来る途中で出会った魔獣は獲物を狩ろうとし

ていただけのようですから」「エリアスが状況を思い出し話す。

「それではなぜ魔獣があんなにまとまって行動を？」

「それがわからん、一体なんなんだ？」

「なにか束ねるものがあるのかもしれない」俺がポツリと言う。

「……」「……」「……」「……」「ポラスと村長が、そんなものが居るのは考えたくないという感じで黙り込んでしまった。

「ともかく、領主さまに援軍を送ってもらいましょう」

「それでしたら私が行きます」ポラスが名乗り出た。

「ポラス様が居てくれると村の守りに自信がもてるのですが……」村長の率直な意見だ。

「そうそれはそうなのでしようが……、タスク殿、村を守っていただけないのでしょうか？」

「ポラス様、治癒士殿にそんなことをお願いするのは無理なのではありませんか？」

「普通ならそうでしょうが、タスク殿に限っては違います、同じよそこらの魔導士と一緒にしてはいけません、いかがでしょうか  
タスク殿」

「わかりました、これも人助けですから、村の守りは任せてください」

「お願いします、明日の朝早くに出ます、急いで行きますので遅くても明後日の昼には来れると思います」

「わかりました、それまでは任せてください」

その夜は村人が交代で見張りについた、魔獣が出てくることもあったが数も少なく大きさも小さなものだったので村人2〜3人で簡単に撃退できた。

実際には我々が麻痺フィールドに指向性を持たせて村の外に広がる森に照射した。

魔獣の大きさや性質により効き目は違うが、それでも人の5〜6倍くらいの生き物までなら動きが緩慢になってしまいくらいの威力だ。小さなものなら身動き一つとれないだろう。

麻痺フィールドなどの装置を持っているのだから、そのまま退治してしまえばいいのだがあえてそうしないのは、ここに住む人々の問題なのでできるだけこの人達で解決して欲しいと思ったからだ。

手助けは求められればするし、目の前で人が傷つけば治してあげようとも思うがそれ以上はできるだけ手を出さない。

それがここでできるだけ長く交流できる方法だとタスクは考えていた。

## 25話目 村長の話（後書き）

以前の話の中でタスクが生き物を殺すにあたり、なんの抵抗も示さなかったのですが、そもそもタスクは軍人ですのでそれなりの訓練は受けています。

もし訓練でもそういった抵抗がぬぐえないのならそもそも外回りの部隊には配属になりません。

宇宙海賊との戦闘が砲撃だけで終わればいいですが、白兵戦になる可能性もあります。

もしそうなれば出来る出来ないなんて言ってる間に命を奪われるわけです。

それに圧縮記憶注入を催眠的に利用したりして抵抗感を抑えたり出来るのでほぼ100%殺傷にためらいはおきません。

だからといって道德感を無くしては意味がないのでそのあたりのアフターフォローも軍では万全だったのです。

26 話目 準備（前書き）

さっさまで寝てました。

## 26話目 準備

翌日は朝からけが人の状況の確認、主に治療効果の確認だが、それと病気の診療もした。

子供の中には数人栄養失調気味の子が幾人かいたが、それ以外は病气らしい病気は見当たらなかった。

持ってきていた総合栄養剤を飲ませたりした。

ガウスレバス市でも気になっていたのだが、俗に言う浮浪児と呼ばれる子供がこの村でも幾人が見られる。

一応そんな子供達には村で小さな小屋のようなものがあてがわれていたり、そのつど簡単な仕事をさせて小遣いを与えているようだが、それ以上のことをしようとは考えていないようだった。

社会福祉に対する考えがほとんど無い。

衛生に関する知識や関心も低い、医療に関する知識も市から離れると民間療法が主になっている。

根本からどうにかしないとダメなんじゃないだろうか？そんなことを考える。

ガウスレバス市に戻ったらガルバジさんに相談してみよう。

ちんみにポラスは今朝早く応援を求めて出発している。

「タスクさん、ありがとうございます」村長が声をかけてくる。

「いえいえ、治癒士として来ているのですから当然です」

「それにしてもです」

「そういえばポラスさんはそろそろ着きましたかね？」

「もうしばらくだと思います、明日の昼には応援を連れてきてくれればいいのですが……」

「大丈夫ですよ、信じましょう」

しかしその予想は裏切られた。

しかも良いほうでだ。

翌日では無く、その日の夕方には応援が到着したのだ。

ポラスinnガウスレバス邸、村を発ったその日の午後

時間は少し前、ポラスはガウスレバス市に急いで戻った。

幸い魔獣に遭遇することも無かった、午後2時過ぎには着いたのだ。

魔獣の襲撃を報告し、明日には向こうに戻らなくては！

「ポラスです、危急の件があり戻りました」ガウスレバス邸敷地内にある衛兵待機所に戻り声をかけた。

そこにはガウスレバス家近衛隊隊長のガウバウセレス様が居た。身長は170センチにちよつと届かない程度なのだが、腕の太さがすごい。

身長に対してかなりがっちりした体格に見える。見栄えも悪くなく丁寧な物腰でいれば幾人かの女性はすぐにその気になってしまうだろう。

ガウバウセレス様ははガウスレバス家の長男で、中央で一通りの訓練を受けてきた軍人だ。今は家を継ぐのと地元での実績を積むために1年の半分ほど自領に戻り近衛隊隊長をしているのだ。

つい先ほど中央から戻ってきて待機所で雑談をしていたようだ。

「どつしたんだ？」

「はい、タスク殿をコシロ村に案内したのですが、村が数日前から魔獣に襲われており孤立状態になっています、至急魔獣討伐の応援

をお願いします」

「タスク殿というとセフォリアの病気を治してくれた治癒士か？」

「はい、そうです。ですので急ぎお願いします」

「わかった、恩のある方だ。父……当主様に報告しすぐに行く、皆は準備してくれ。それと非常時と言うことで家に戻っている者にも伝えてくれ」

衛士にしても近衛にしても領主宅に住んでいるわけではない、普段は家族のいるものは町の家で、独身者もどこかの下宿や長屋のようなどころに住んでいる。

それらの者にも連絡を入れ、討伐に出てるあいだの市中の治安維持を指示するためだ。

ある意味、衛士や近衛は軍隊としての役割とともに警察のような治安維持や捜査なども行うことがあるのだ。

ガウバウセレス様は報告に行くと言ってその場を離れた、我々は討伐の準備だ。

準備しているあいだにカベル殿がやってきて色々と聞かれた。

「ポラス、魔獣はどれくらいでどんなのだ？」カベル殿が指揮をとられるのか？

「はい、バウベアはいるようです、他には私は見ていないのですが村人の話では他に3種類ほど、全部で20匹ほどいたようです」

「バウベアまでいるのか、それはなかなか手ごわいかもしれないな」

「カベル殿が指揮を執られるのですか？」

「いや、今回はセレス様が指揮を執られる。私は残って治安維持と他の村の状況も確認しないといけない、今まで魔獣が種類を越えて群れを作るなどなかったからな、念のため見に行かせないといけない」カベル殿はガウバウセレス様を親しみを込めてセレス様と言っている。2人は中央で一時期一緒に訓練を受けていた時期があるらしい。

その後は準備を進め明日の朝一には出発できる準備を整えた。

が、しかしガウバウセレス様が戻られ開口一番、「今日のうちに出発する。領主様よりバサラで行くことを勧められた、すぐに出れば夕方には着ける筈だ、急ぐぞ！」

今日のうちに出発するとは思っていなかったのでそれからは大忙しだった。

しかしバサラに乗っていけば2時間もかからずに着けるだろう、今日中に着けるのなら急がないと！

## 26話目 準備（後書き）

まだまだ書きたいことがありますが、文才が無いのと遅筆なのでなかなか進みません。

何度も言っているかもしれませんが、ほんと遅いです。

はあ…、もう少し文才と早書きが欲しい。

## 27話目 遭遇（前書き）

今回は今後も出てくるキャラクターの登場です。

正直なところ今まで登場人物は多いかと思っ  
ていますが、それでも今回出てくるキャラは  
大きなウエイトを占めていると思っ  
ていま

## 27話目 遭遇

タスクイン北西村、夕方、村の中央広場

応援の部隊は翌日では無くその日の夕方には到着した。

予想は嬉しい方に裏切られた。

馬に似た生き物に騎乗してきたのだ。

以前我々が簡易治療装置を運んだときに使っていた生き物よりは少し小さい感じがする。

足の太さもぜんぜん細い。

「ガウスレバス家のガウバウセレスと言います、以後お見知りおきを。今回の討伐の指揮を執っております」ずいぶん大仰な挨拶をしてきた。

村の中央の広場には隊長と思われるその人と、護衛についてきている2人と全部で3人が来ている、それ以外の部隊員は村の回りにすでに散らばって警備に当たっている。

交代要員も引き連れてそちらは村のすぐ外に野営している状態だ。総勢30人以上いるだろう、しかも完全武装の訓練を受けた兵士達だ。

素人の村人と比べると兵士1人が村人2〜4人くらいの戦力がある。

「ガウスレバス家の次期当主です」小さな声でポラスが教えてくれる。

ガルバジさんのご子息か、そう言われれば雰囲気似ているな。

「村長をしておりますハウジです、それにしてもこんなに早くに来ていただけるとは思ってもいませんでした」

「領民が危機にさらされているのですから当然です」

「タスクと言います、早い到着で助かります」自己紹介と素直に感想を言う。

「あなたがタスク殿ですか、話は聞いております。妹の病気を治していたいただきありがとうございます。あれの病気は家族でも半ば諦めていたものですから感謝に絶えません」

「タスク殿はセフォリア様の病気も治されたのですか？そんな腕のたつ方とは知りませんでした、ほんとうにすごい」

「そんなことはありませんよ」実際我々の技術力ではそうでもないからな。

「「ご謙遜を」」

「それより魔獣討伐についてはどうするのですか？」

「ははは、大丈夫ですよ、我々が来たからには明日の昼には解決です」

「それは頼もしい」村長が討伐隊を賛美する。

「魔獣の討伐は心配していません、ガウバウセレス様たちの実力を疑ってはいません」

「そうだろそうだろ」ウンウンと頷いている。

「心配しているのは今後のことなのです」

「なるほど、タスク殿の言いたいことはわかった、この魔獣どもどこか統率されたような動きをどう見て、それをどう対処するのかということではないか？」

「はい、そうです」

「まずは今後の流れについて説明する」

そう言って話してくれた。

中身としては、まず今夜から討伐隊が警備にあたるという事、村人は今夜から心配せずに眠ってくれと言ったことだった。

そして明日の朝から本格的に討伐隊を森に入れて魔獣を倒していく、その際にも警備のために10人ほどは村に残しておくということだ。

そして討伐が終わった後、魔獣が今回のようにまた徒党を組んで襲ってくるかもしれないということに対しては、根本的な解決策は今のところ無いそうだ。

しかし何もしないわけにはいかないなので、対応策として衛士達を今後は常時5人ほど配置することだった。

今までこのようなことが無く、これから調べないと原因がわからないのだそうだ。

なので今回の討伐がすんだ後に、中央から魔獣の研究者などを呼び寄せ調べてもらおうということになっている。

魔獣が徒党を組んで襲ってくると言うのは、経済活動の上ではかなり痛手になる。

ガウスレバス家はただでさえ政治的には低迷している、その上魔獣が街道でも襲ってくるなど話があるなどと話が定着するとガウスレバス領内の経済活動が一気に動かなくなってしまう。

そのため領主のガルバジは、思った以上に今回の魔獣の行動を気にしているのだ。

翌日は朝から討伐隊が森の中に入っていき、順調に魔獣を倒してい

る。

昼頃にはあらかた終わったようで森に入っていた約半数は戻ってきていた。

残りの半数は魔獣を掃討するためにもう少し頑張っている。

ガウバウセレスと村長、それに俺は討伐隊が村から森に入るところに作っている簡単な野営地で話をしている。

ガウバウセレスが状況を話してくる「魔獣討伐も順調に進んでいます、この調子ですと明日の朝にはこの村を発てると思います」

「そうですか、衛士達殿にも怪我が無くてよかったです」村長が言っている。

「その際にはタスク殿も一緒にいかがか？、村での治療や診療も終わってるようなので我々と共に移動するのが効率も良いと思うのだが」

「そうですね、そうさせてもらいます」

「あいわかった、では部下にもその旨伝えておく！」

「隊長、大物です、来てください」森に残っていた衛士が走って戻ってきた、重い鎧も着ているのにたいした体力だと感心する。

「どうしたんだ？」

「ドラゴンです！」

「なんだと?! わかった行く、案内しろ」

「はい」

「村長とタスク殿はここに居てください」

そういつてガウバウセレスは森の中に入っていった。

ガウバウセレスin森

ドラゴンが出るなどと信じられない、そもそもこの領内に居るなん

て聞いたことが無い。

それにしてもドラゴンとは…

「隊長こつちです」部下は先ほどからずっと走りっぱなしで案内してる。

森の中は木こりなどが通っている細い道があるが、それでも走りにくいことこの上ない、しかもかれこれ20分以上走っている。

木々の中を抜けていくと、小さな沼に出た、沼の周りはわずかばかりだが開けている。

空の青さがまぶしいくらいだ。

沼の周りには討伐隊の面々が全員集まっていた、後ろからは後を追ってきたのだろう部下達が追ってきている。

「あそこです」案内していた部下が沼の向こう岸の少し左側を指す、ドラゴンか？飛龍にも見えるが？

「ドラゴンと言えば中には知能の高いものも居ると聞く、近づいて話してみよう」

飛龍だったお構い無しに襲ってくるだろうからかなり危険だが、部下に行けと命じるのでは隊長として部下からの信頼を得られない。

それに騎士として学んできたのだから、ここでこそ騎士道精神を発揮するべきだ。

「お前達はここで待て、危険だと感じたらすぐに引くのぞ」  
部下達は納得しかねるような顔をしているが、それでも言い聞かせドラゴンのもとに近づいていった。

近づいてい見るとそれはかなり大きい、高さだけでも5メートルほどあるのではないだろうか。

尻尾は体を半周りして体全体は丸めているように見える。全長は丸まっているので良く分からないがそれでも数十メートルあるだろうとは予測がつく。

顔と思われる箇所に向かって話しかける。

「ドラゴンよ、聞こえるか？」

「…何かまぶたが動いたようだ。」

「ドラゴンよ」

「…むう、なんだ人の子」返事が返ってきた、飛龍ではなく間違はなくドラゴンだ、それに知能も高いようだ。

咽喉の形状が違うので聞きにくいだが、それでも人語だと理解できる。

「なぜこんなところに居るのかお聞きしたい」

「ん？こんなところだと？」

「はい」

「こんなところとは、ここはどこなのだ？」

「ここはガウスレバス領内コシロ村の森の奥に入ったところですよ」

少し考えているようだ、そもそも人間の地域名でわかるのだろうか？

「なるほど、人の子よお前が言うように確かに『こんなところ』だな」

「ガウスレバス領内にドラゴンが居るなどと聞いたことがないので、あなた様はどこからいらしたのですか？」

「なるほど、確かにそなた達は知らないであろうが、我はそなたら人の言うガウスレバス領とやらにはるか昔から住んでおる」

「？そんなことは聞いたことがありませんが」

「そうかもしれないな、そなたら人間が言うガウスレバス領だが、西に向かつてのびているだろう、その行き着く先は三角形のような陸地になっているが、その先端までそなたら人間は足を踏み入れたことは無いであろう？」

「たしかにそうです」

「我はその先端に近い湖の近くにはるか昔から住んでおる」

「先端に近いところに湖があるのですか？」

「そうだ、我はその湖から少し離れた山腹に住んでおる」

「しかし、ではなぜこんなところに居るので？」

「ふむ、思い当たることがある…、少し聞きたいのだが、そなたらの中に『しれい』と呼ばれている者はいるか？」

「いえ、そのような者はいませんが」

「いや、居るはずだ、そなたにはその『しれい』と呼ばれるものと同じ臭いがかすかに残っている」

「そうは言われても私にはわかりません」

「そうだな、そなたは嘘は言っていないようだ、これでもドラゴンなのでな人間が嘘を言っているかどうかくらいは分かるのだ」

「そうなのですか、それよりドラゴン様にお聞きしたいことがあるのですが」

「ん？なんだ？」

「はい、実は最近魔獣どもが徒党を組んで人間の村を襲っているのです、それでドラゴン様にはその原因はわかりませんか？」

「なるほど、それはたしかに人間にとっては一大事であろう」

「そうなのです」

「多分それは私の存在が影響していると思う、我が多分あれが原因だと思うが、前後不覚になりここに来た為に周辺の魔獣が我を避け

るために、それでも住み慣れたこの地を離れきれないため近くにいた人間にその不満のようなものをぶつけてしまったのではないだろうかな。我を避けるためその一点で魔獣どもが徒党を組むことがあるからな、それほどまでに魔獣にとってのドラゴンとは脅威なのだろう」

「そのようなことがあるので？」

「うむ、何にしる我的存在は魔獣にとってはプレッシャーになることは確かだ。あれに当てられることが無ければそのようなことも無かったのだろうがな」

「『あれ』とか言っていますですがそれはなんなのですか？」

「ああ、そうだな、あの者らのことを話してもいいかもしれない、あの者らは人間のようだが、その実かなりの力を持った者たちだ」

「ドラゴンのあなたがそのようなことを」

「そうなのだ、あの者らは『しれい』と呼ばれる者を筆頭に秩序だった動きをしている、危害を加えない限りあの者等から攻撃して行くことは無いが、ひとたび危害が加えられるとその反撃の苛烈さは信じられないほどだ。そしてあの者等が何か大きなことをするたびに我は、そうだな人間が酒に酔うような感じになるのだ」

「そのような者が？もしかしてその酔ってしまってこのような場所に？」

「そうだ、しかしその酔ってしまってというのは正確ではない、我は何かを飲んだり食べたりしたわけではないのだから」

「そうですね」

「そして、そなたからはあの者等の『しれい』と呼ばれる者と同じ臭いがするのだ」

「そこところはわかりません、私の知る限り『しれい』と呼ばれる者はおりません」

その後、話は好意的に進んだ。

ドラゴンは回りに『ドラゴンの祝福』を与え、魔獣が予想外にドラゴンを恐れないようにした。

しかし回りの魔獣は、すでにだいたいの討伐されてしまっただけでほとんど数は居ないのだが。

それにしても、魔獣の行動がドラゴンの影響によるものだとは思わなかった。

念のため、数日間は村に衛士を配備したほうが良いだろうが、ドラゴン殿の言うのがまず間違いないだろう。

最後にドラゴンから、『しれい』と呼ばれる者がいたら話したいと伝えて欲しいとの伝言を受けた。

『しれい』なんて人は知らないのだが、それでも私からその人の臭いがするのだから周りに居るはずだと言うのだ。

分からないことだが、その人がいたら必ず伝えると約束をした。

そして、ドラゴンも今夜のうちにここを離れると言ってくれた。

## 27話目 遭遇（後書き）

キャラを整理したものを載せようと思いますので、気が向いたら見てください。

今まではそんなの載せるの考えてもいなかったのですが、自分自身のキャラ整理をここで載せてもいいかなと思ってです。

## 27・5話目 本編じゃないです、登場人物紹介です(前書き)

題名にあるとおり登場人物の紹介です。

あまりこういったものを出すつもりは無かったです、出てくる人物が多くなるとわけがわかんなくなることがり、どちらかと言うと作者自身の確認のために作ったと言えます。

性格もある程度考えていたので、それにあった話し方意見の出し方を考えていました。

あれ？性格設定と合わないなと感じたら教えてください。

念のため、今後出そうと思っているキャラもいますので、もしそのあたりを知りたくないとお思いなら見ないほうがいいです。

それにあくまでもこれは作者の確認事項に近いものですから、あしからず。

## 27・5話目 本編じゃないです、登場人物紹介です

タスク (29歳)

地球圏より飛ばされてきた。

艦隊の司令であり、その艦隊の戦力は恒星をも破壊することができる。

普段は自分のことを『俺』と言っているが、人前やちょっとした場所では『私』と言っている。

今は宇宙生物との戦闘があるかもと言うことで戦力の増強に勤めている。

惑星(ブルーマーブル星)上に邸宅を持ち、そこに惑星防衛システムを作ろうとしている。

地下に小型破動(波動)エンジンを設置してエネルギー確保している。

266

エリアス

タスクの部下アンドロイド、人工的にアルティシファリクリエイト造られた者である。副官であり、指揮官でもある。時には部隊の指揮もとるが基本的には副官&事務方アンドロイドである

戦闘もできるが一戦級のものと比べると格段に落ちてしまう。

人工的に  
造られた者  
アルティシファリクリエイト

アポロ

タスクの部下アンドロイド、人工的に  
造られた者  
アルティシファリクリエイト  
である。

エリアスが副官・事務方と言うのであれば、こちらは前戦実戦指揮官である。

現場での指揮や実戦に向いている。

戦闘力もかなりあるが、最高性能と言うわけではない。  
指揮に力を発揮するので、戦線思考回路に入っているタイプ  
である。

ロプス（ろぷす）

タスクの旗艦。

惑星改造も行えるほどの巨大艦で、その戦力も恒星を破壊できる  
ほどである。

控えめな性格で、あまり口を挟むことが無い。

今は第三衛星、ムーンプラ上で戦力の増強に努めている。  
ブルーマーブル星からは見えないようにしている。

呼び名は艦名を言うときには『ロプス』で、自立思考を呼ぶときは『ろぷす』としている。

便宜的なもので必ずと言うわけではない。

スキウエル大将

地球圏にいる大将。

飛ばされた人々担当なのだが、基本的に何もできないので話を辛抱強く聞いてやると言うことしかできない。

タスクの場合は資材やその製造もできるので話を聞く以外にも新技術の提供なども行っている。

またタスクからの新しい生命体の情報を送ってもらうことによつて、地球圏での研究開発に役立てている。

ガルバジ・フォン・ガウスレバス（49歳）

ガウスレバス家現当主。

ガルバジ・フォン・ガウスレバス男爵がフルネームになる。

善政をしているわけではないが、悪政では無い。

公平な方だと言うことで領民からの支持はかなりある。

堅実な領地運営を行っているが、中央の政治から遠ざかっているため数十年前に比べると経済は低迷している。

それでも領民の生活が苦しいということも無く、問題が起きれば適切な対処もしている。

悪いうわさも無く、しいて言えば可も無く不可も無いという領主である。

領主らしい話し方、部下を使うといった話し方だが高圧的な感じはしない。

シャウリ・フォン・ガウスレバス（45歳）

ガウスレバス家の婦人。

物静かで良識的な人。

領内の出来事には疎いが、家族への愛情は人一倍。

セフォリアの病気を治してくれたタスクには人一倍感謝している。年齢からはかなり若く見られ、よく20代後半に間違われている。若い男性が親しげに話しかけてくることもあり、夫からはよくやきもちをやかれている。

丁寧な話し方で、高貴な婦人といった話し方をする。

ガウバウセレス・フォン・ガウスレバス（26歳）（略称セレス）

3人兄妹の1番目。

ガウスレバス家の次期当主。

2人の妹を大事に思っている。

中央で軍務についていたこともありカベルとは戦友。

カベルをガウスレバス家にスカウトした本人。

まだ軍事よりの考えを先行させてしまう傾向はあるが、全体を見渡せる目を持つとうと精進中。

父のガルバジを公の席では領主様と言っているが私的などころでは父とか父上と呼んでいる。

言葉遣いは、ところどころ固苦しいところがある。

セフォリア・フォン・ガウスレバス 長女 23歳

3人兄妹の2番目。

ガウスレバス家の長女。

10歳になる前に皮膚病が発症。

それ以後、外にはほとんど出なくなった。

しかしその綺麗な容姿はガウスレバス家を訪れた者から広まっている。

婚礼の話も今までにいくつも来たが、皮膚病を知られるとすべて破談になってしまった。

つらい思いもしてきたはずだが、それでも性格が捻くれることは無かった。回りの家族や家臣の暖かさがそうさせたのだろう。

この地域でははっきり言って行き遅れになってしまった。

女性らしいものが好きで政治などに特に感心は無い。

丁寧な言葉遣いをする。

シェフェイールア・フォン・ガウスレバス (15歳)

3人兄妹の末っ子。

ガウスレバス家の2女、茶髪のかわいい感じの子。スタイルはもう少し胸が欲しいと感じているが、その可愛さがそれを補ってあまりある。

胸は自分でも少しコンプレックスに感じている。

コイバナ大好き少女、淑女になろうとしているがボロが出てしまう話し方をする。

姉が結婚できないだろうと思っていたので、自分がガウスレバス家のためになる結婚をしないといけないと思っていた。

アウシュレバン（略称、アウシュ）（34歳）  
ガウスレバス家で家令をしている。

3人いる家令のうちの1人。  
セバスの部下で、領内の経済的なものの管理監督もしている。

基本的に使用人言葉、丁寧な対応と話し方をする。

護衛カベル（27歳）

ガウスレバス家近衛の2番手。

それなりにやり手である。

ガウスレバス家に忠誠を誓っている、普通の騎士だったら主に忠誠を誓うのが普通なので彼が特別と言っわけではない。

基本的にガウスレバス家に害をなす相手にはかなり警戒している。時には実力行使もするが基本的に穏健で良識派。

中央で軍に在籍していたときもあり、ガウバウセレスとはそのとき知り合った。

他国との小競合いで一緒に戦ったこともあり、戦友とも言える。

そこで知り合い、ガウスレバス家に誘われた。

騎士らしい話し方をするが、かなり砕けた感じもする。

マシユリー（45歳）

タスクが初めて訪れた村の住人。

村の中では村長夫婦に次いで年長者。

旦那は普段は農業をやっているが、他に大工作業もやっている。

マシユリーは世話好きなどところもあり、村の中ではお節介だが頼りになると言われている。

その夫も物静かだが知らぬ間に村の中では欠くことのできない存在になっており、普段は何も言わないが何か口にしたとき、村人はその意見にはほぼ無条件に従うほど信頼のある人である。

一見マシユリーの力カア天下にみえるところもあるが、その実態は普段はマシユリーの天下で非常時には夫が一番の権力者と言った感じだ。

なんにしろ、マシユリーとその夫はある意味、すごくバランスの取れた夫婦と言える。

村のおばちゃんの話し方をする。

セバス（51歳）

ガウスレバス家の家令頭、家令の役職にあるものは全部で3人、その取りまとめ役として頭かしらとついている。

ガウスレバス家の3役のうちの1人、主に家の中のことを取り仕切っているが、他に領内の予算の配分や事業の取りまとめも行っている。

見た目以上に年長者で、ガルバジからの相談も多い。堅実で常識的な考え方をする。

年長者らしい丁寧な話し方をする。

予算に関する運用は多岐にわたっているので、実際には他に数十人の者が部下についている。

すべてガウスレバス家の使用人である。

地球の政府で言うところの領主が大統領、セバスが総務財務厚生労働農林水産大臣、マウジリアが文部科学環境交通大臣、ガウバウセレスが防衛警察庁長官と言った感じだ。

他の役目については領主がそのつど任命するといった感じになっている。

## マウジリア（31歳）

ガウスレバス家の筆頭魔導士。

専門は攻撃系、特に火炎系が得意。登場時の年齢は31歳だが筆頭魔導士になったのは26歳のとき。既婚者子供無し。

他にも魔導士は領内、ガウスレバス市内に5人いる。うち若手が2人、高齢の者が3人。

若手2人は20代中ほど、高齢の者は70代の者が2人、80代の者が1人。

マウジリアが若手の中では一番の年長者。

ガウスレバス家の3役の1人、一応は筆頭魔導士なのでその役についている。

3役の役目としては、領内の教育や人材育成の任に着いている。

公共事業の取りまとめの監督者もしているが実際には名ばかりで、実務はガウスレバス家の使用人が行っている。

歳が若いせいも、選民意識や対抗意識が強いせいで成果らしいものが出ていない。

かえって昔より後退した感じがしていると感じている者もいる。

領内では博識と知られているが、他の者への配慮や公平性に疑問を感じているものも多い。

言葉遣いは丁寧だが、その話し方には対抗意識や不信感が感じられることが少なくない。



27・5話目 本編じゃないです、登場人物紹介です(後書き)

明日の朝までにまた投稿します！

感想や意見があればよろしく願います。

時間のある範囲で、直したり訂正したいと思いますので。

28話目 s i r e i ? (前書き)

本日3回目の投稿です。

まあ、2回目のは内容なんて無いですからね。

実質的には2回目です。

タスクin野営地

ガウバウセレスが戻ってきた、他の討伐隊の面々もだ。

ドラゴンと言っていたので危険なのではないかと思ったのだが、誰一人欠けることなく怪我をしている者もいなかった。

そして、ことの顛末を聞いた。

ドラゴンがこの地にやってきて、前後不覚になってしまっていた。

それが原因で魔獣が異常行動をしたのだと思われると、そして今夜のうちにドラゴンは離れるので魔獣の問題は解決するんじゃないかと言っことだ。

念のため、衛士を残していくがまずドラゴンの言っことで間違いないので10日ほど様子を見たら引き上げるといっことだった。

そして『しれい』と呼ばれる者について、出会うことあったら話が

したいと言つ伝言だ。

『しれい』と呼ばれる者って俺のことでは？それに湖の邸宅の近くにもドラゴンは居たはずだ。

最初はまったく解らなかつたのでかなり警戒していたが、基本的に温厚な生き物とわかつたのでその後は調査も何もしていなかつた。

確かにドラゴンが湖の対岸で水を飲んだりしているのを、見たことがあるとエリアスが言っていた。

今度戻ったときになんらかの接触をしよう、しかし話の感じだと酔つたような感じだと言っていたが大丈夫だろうか？

ともかく村長との今後の話もすませ、我々はガウバウセレスと一緒にこの村を離れることとなった。

村人からは治療のお礼と、これからも宜しくと声をかけられた。討伐隊も感謝の言葉をかけられ村人からは英雄のようなお見送りを受けた。

その後は順調にガウスレバス市に戻ることができた、ガルバジ殿と話をしドラゴンが原因だつたのではないかと話をした。

ガウスレバス領内にドラゴンがいるなどと始めて聞いたのでかなり驚いていた。

そしてドラゴンとは友好的な関係を築きたいので、機会があればゆつくり話がしたいとガルバジは言った。

しかしドラゴンと話をしたいと人間側から言っても、まず了承してくれることは無いそうだ。

古来ドラゴンとの友誼ゆうぎを結んだ者は莫大な利益を得たと言われている。

本来ドラゴンは人間とは関係を持たない、しかしもし関係を持つとその周辺の気候は安定し作物の生育に最適な地域になったり、魔導士の魔術の威力が個人差はあるが強くなったりする。

そしてその個人への恩恵はその地域を離れても数ヶ月は続くと言われている。

以前は戦争などで、ドラゴンの恩恵を受けている地域の魔導士はかなり重宝されたそうだ。

ガルバジはその『しれい』と呼ばれる者を探し出して、ドラゴンとの接点にしたいと考えたようだ。

どうにかならないものだろうか、そもそも自分達の力で豊かにならなければ意味はないのに。

まあ、地球圏の考えを言っても仕方がない、それにドラゴンの恩恵というのもこの自然の一部なのだから。

それにしても、『しれい』地球発音「しれい」って多分俺のことだから、さてどうしたものか…。

タスクインガウスレバス市、討伐隊帰還翌日

屋敷では他の村も魔獣に襲われていた場合に備えて派遣の準備をしていたのだが、結局他の村は何も問題もなく、それにコシロ村に行っていた部隊が帰ってきて原因らしきものも突き止めてきたので他には派遣は無いとわかり、ホットしていた。後片付けで忙しいが、走り回ってるのは小姓くらいだ。

ガルバジが主だった者呼び、話はじめた。

「今回の魔獣の件に関する原因がわかったので皆に知らせようと思  
う」

屋敷にはガウスレバス家の面々と近衛の2番手カベル、家令頭のセバス、筆頭魔導士のマウジリア、それに普段は町にいるお抱え魔導士4人、それに俺だ。

最高齢の魔導士は体長が優れず来ることができない。

「まず、今回の原因はドラゴンの影響によるものだと言ったことだ」  
ガルバジが早速結論を言う。

「ドラゴン？」「セバスとマウジリア、他の者も同じく声を上げる。」

「そうだ、しかも昔からガウスレバス領に住んでいたそうなのだ」

「そんな話は聞いたことがありません！」マウジリアが反論のように声を上げる。

「イヤ、そうとも言えないではありませんか、マウジリア殿」

「そうなのだ、実は我々も知らなくて当然なのだ、ドラゴンは我が領内の西の端にある湖の近くに住んでいるそうだ」

「西の端？」誰が言ったのか解らないが、みんなが疑問に思うことなのだろう、次の言葉を待っている。

「ここからはセレスが説明しよう、セレスよ頼む」

「わかりました、それでは僭越ながら私からご説明します」

回りを見回し、息を整えて話し始めた。

ドラゴンが『ある理由』により前後不覚になりいつもいる地域からはなれここまでできてしまったこと。

魔獣はドラゴンの影響で異常行動をしてしまったらしいということ。

そのドラゴンも今は住处に戻り村は平穏になったということ。

そして最後に、『地球発音しれい』と呼ばれる人を探していると言うことを。

「『地球発音で「しれい」しれい』ですか？」カベルが確認するように聞いている。

「そうだ、『地球発音で「しれい」しれい』だ」

その場にいる人は隣の者とザワザワと話をしている、今回の異常事態は解ったし、解決をしたのもわかるが最後の『地球発音で「しれい」しれい』という人を探していると言うのがどうにも解らないのだ。

「ドラゴン殿はその『地球発音で「しれい」しれい』と呼ばれる人と会って、話をしたいそうなのだ。そして我がガウスレバス家はその『地球発音で「しれい」しれい』と呼ばれる者を介してドラゴン殿と友誼を結べないかと考えている」

「確かにドラゴンと友誼を結ぶことができればこの上なく領地は栄えると思います、しかしその『地球発音で「しれい」しれい』なる者がどこに居るかはご存知なのですか？」この場に居る最年長の治癒魔導士が当然のことを聞いてきた。

ガルバジがここで口を挟んだ「そこなのだ、問題はその者がどこにいるかわからん、なので皆でその者を探してもらいたい」

「……」皆が一瞬沈黙する。当然だろっいきなりそう言われてもどう反応していいかわからない。

頭を横にブルブル振るって1人が言う「何か手がかりはあるのですか？」今度は20代の魔導士だ。

「無い！、『地球発音で「しれい」しれい』と呼ばれている以外はわからない」ガウバウセレスが言う。

「しかし、『地球発音で「しれい」しれい』と言う言い方は古代の言葉でもありません、部下が上司をそう呼んでいたと言う記録があります」「カベルが以前聞いたことがあるのだから言うことを言う。

これは驚いた、この星でも『地球発音で「しれい」しれい』と言う言葉があったなんて、しかも微妙に意味合いも似通っている。

「そうなのか？それは知らなかったが…、しかし今でもそんな呼び方をしているものなど居ないはずだ」

結局、『地球発音で「しれい」しれい』と呼ばれる者を探して欲しいと言う事で話は終わった。

近衛の者と衛士の者にも伝えられ、使用人の幾人にも知らされた。

その『地球発音で「しれい」しれい』なる者をさがして欲しいと。

28話目 s.i.r.e.i.? (後書き)

明日の朝までにもう一回投稿できるくらい書き進めるか挑戦です。

## 29 話目 繋ぎ（前書き）

思った以上に仕事で時間が取れなく、結局当初考えていた時間で一番遅い時間の投稿になりました。

ちなみに活動報告にも書きましたが、当初より進行を変えようか考えているというところですが、結局少し変えました。

どう変えたかは内緒です。

## 29 話目 繋ぎ

カベルinガウスレバス屋敷内ガルバジ執務室、 搜索依頼の話の夜の夜

「ガルバジ様、お時間を取って頂きありがとうございます」

「うむ、どうしたのだ？カベルが内密に話がしたいなどと今までなかったではないか」

「はい、実は『しれい』なる人物について、内密に話したいことがあります」

「！？なんだと！『しれい』地球発音で「しれい」を知っていると申すのか？！」

「いえ、その人なのかわかりませんが、しかし『しれい』と呼ばれていた人物を知っているのです」

「そうだな、たしかにその人かどうかは解らんが、それでも『しれい』を知っているとすれば手がかりになるやもしれん、してその人物とは誰だ？」

「はい、ガルバジ様も知っている方です」

「わしも知っている？」

「はい」

「誰だ？まったく思い当たらんが？」

「タスク殿です」

「？は？」 訳がわからないような顔をしている、私もあの場で話を聞いたときはどこかで聞いたことのある言葉だと思ったが、思い出してみればタスク殿がエリアス殿からそう呼ばれていたのである。

「タスク殿です、ガルバジ様」もう一度言う。

「なぜタスク殿なのだ？」

「わかりません、しかし確かにタスク殿の使用人のエリアス殿が『しれい』と呼んでいるのを聞いたことがあります」

「わかった、その件についてはわしに任せてくれ。なにかするときにはそなたにも声をかけるのでそのつもりでいてくれ」

「わかりました、それでは失礼します」

ガルバジ様は1人考えたいのだろう、何かあるかもしれないな。

翌日

タスクi nガウスレバス市、屋敷内より出発

「そでれでは他の村にも行ってきます、ポラスさん案内お願いします」

「わかりました、今回はこの前のようなことはないだろうから順調にいきますよ」

「そうですね」

村への診療は順調に進んだ、そして改めて感じたのは社会福祉に対する考え方の不足だ。

そして衛生面に関する認知度、項目を挙げていけば切が無いが、最低限のことはやってあげたいと思ってしまう。

村の状況を比べてみたいが、どこも似たような感じなのだろうか？

前はドラゴンのことでほとんど話せなかったが、村を一通り確認できたらそのあたりについて話をしたいと思っている。

タスクは、ガルバジの方から話があるなどと思ってもいなかったのだ。

タスクinガルバジ執務室

「ガルバジ様、タスクです入っても宜しいでしょうか」

「ああ、かまわんよ」中からガルバジの返事が返ってきた。

村々の診療を終え、ガウスレバス市に戻り、一息ついてから報告も兼ねてガルバジ殿に話をしに行ったのだ。

「巡回診療ご苦労であったな」部屋の中にはガルバジ様の他にカベル殿も居た。

この二人がそろって居るところってあまり見たこと無いな、そんなことを考えた。

「ありがとうございます、無事に終わることができました、それでガルバジ様にお話があるのですが」

「その前に、こちらからも話があるのだが、よいか？」

「そうですね、わかりました为什么呢ょうか？」

「うむ、実はカベルが以前にタスク殿がエリアス殿から『しれい』と呼ばれていたのを聞いたことがあるというのだが、いかがか？」

タスクの顔が一瞬強張った、こんな話をされるとは思ってもいなかったのだ。俳優でもないタスクが演技などさして出来るはずも無い。

「その顔だと覚えがあるようだな、タスク殿！タスク殿はドラゴンの言っていた『しれい』で良いのだな」

数秒の間。

「…はい、たぶんそうでしょう」

ここまできて俺は大きなため息を吐いた、ハアアアア〜

「多分、ドラゴンが言っていた『しれい』とは私のことです、そしてドラゴンはその私と話がしたいと言っている、機会があれば接触しようと思っていたのですが、さてどうしますか？私を処罰しますか？」

「そんなことは考えていない、タスク殿が教えてくれなかったのは残念だが、理由をお聞かせ願えないか？」本当は雇い主であり土官先の当主でもあるので控えめにしないといけない理由は無いのだが、それでも腰の低い聞き方をしてくる。

高圧的に聞いてきたのであればこちらの態度も決めやすいのだが。

「…なかなか言いにくいのですが…どうしても言わなければいけませんか？」

もしどうしても話さなければいけないのなら、仕えるのを辞めてもいいとタスクは考えていた。

ガルバジはしばらくのあいだ沈黙していた、タスクの顔をじっと見つめて。

「いや、本当は聞きたいのだが、あえて聞かないことにする。いつかタスク殿から話してくれることをお願いしたい。」

「いいのですかそれで?!」

「今回はよしとする、その代わりにドラゴンとの繋ぎをお願いしたい、どうだろうか?」

カベルもじつとタスクを見つめている、ここまで当主であるガルバジが抑えたのだからタスクがその要請を断るなど許さないといった感じだ。

数秒考えたタスクが返事をした。

「わかりました、出来る限りのことはします」

「そうか、助かる」

「でもドラゴンがガルバジ様の要望を聞いてくれるかはわかりませんよ。それでもいいですか?」

「それでもかまわん」

タスクとガルバジ、それにカベルはその後はいつ頃までにドラゴンに接触するかなどを話した。

ガルバジとカベルは、タスクが具体的にどうやってドラゴンと接触するのかを聞いてきたが、祖父からの秘術があるんだと適当にごまかした。

はつきりいつてかなり胡散臭つみたくせい話だが、「いつかは聞かせて欲しい」と言うガルバジの言葉でそれ以上は聞かれなかった。

タスクは、いつかは話さなければいけない時がくるかもしれないと感じていた。

ここまで自分の都合ばかり通して、それでもガルバジがタスクを信じて聞いてこないなど、かなり気が引けているのだ。

ガルバジはガルバジで、娘の病気を治してくれたり、こちらからの誘いで仕官してくれたり、治癒士として村を回ってくれるなどタスクには本人が思っている以上に感謝しているところもあるのだが。



## 29 話目 繋ぎ（後書き）

火曜日が休みなので2回以上投稿する予定です。

まあ、予定なので決定ではありませんけど。

あと、何かあればお知らせ下さい。

### 30話目 勢いに任せて(前書き)

活動報告より少し早めの投稿です。

今日中にもう一回投稿予定です。

詳しくは活動報告で。

### 30 話目 勢いに任せて

結局一月のうちにドラゴンと話をし、来てもらえるように頼んでみるとなった。

ちなみに今は夏終だいたい、9月頃の月に入ったばかりだ。今月のうちに接触はしないといけないな。

こちらからもお願いがあったので、ガルバジ殿と協議することになった。

お金がかかることでもあるので、家令頭のセバスも呼び交えての話だ。

まず浮浪児の対策だ、この地域では当たり前なのかもしれないがこれからの可能性がある子供を、あんな生活環境に置いておくことは出来ないと感じるのだ。

対策として資金を出せないだろうかと訴えたが、結局ダメだった。

来年から、少しはどうにかしようとは言ってくれたが、年内は無理なんだそうだ。

ちなみにここでは『年度変り』の習慣もあったが、春始3月頃の月が年度変わりねんと新年の始まりになるんだそうだ。

まだ半年以上ある、冬もある訳だし凍死することもあるかもしれない。聞いてみると実際年に10人近くが毎年凍死しているそうだ。

それではダメだ、「では私がすべてやりますので、いいですね！」  
最後は啖呵たんかを切ってしまった。俺が啖呵を切ってしまうまでにはかなり紆余曲折があったのだ。

正直なところ、俺にとってはどうなるかわからないドラゴンなんかより、目の前にいる明日も生きていけるかわからない子供のほうがずっと気になる。

ガルバジ家にとっても言い訳があるのもわかる。

領地内にいる大多数の人をまず最初に守らなければいけない、どうしても少数の路上生活児は後回しになってしまうのだ。

それでもここは、他の領地よりはまだいいそうだ。

ひどいところだと、子供だけでなく領民の大多数が生活苦に陥つてるところがあるのだそうだ。ごく一部の領地らしいが。

子供達の保護と衛生面での教育もするようになってしまった。

これも話の行き掛かり上なってしまった。

子供達はコバタ村にも数人いるが他の村に比べてかなり少ない、他の村には平均10人弱ほど居るようだ。

まずはその子供達を集めて西村に連れてこなければいけない。

中には来たがらない子がいるだろうが、そこはどうか説得して連

れてくるしか無いだろう。

それにこの地域にはあまり出ないが、人買いが数年に一度現れて子供を連れて行ってしまふのだそうだ。簡単に言えば奴隷商人だ。

連れて行かれた子供達は、運よくいい人に買われればいいが、大抵はろくでもない人間に買われる。

死ぬまで働かせられたり、かわいらしい女の子だと性のおもちゃにされることも少なくないらしい。

人買いや奴隷などの取引は基本的に中央からの通達で禁止されているが、それでも人を買おうような人間なのだから、まともなことを期待などできるはずもない。

子供の保護を尚更急がないとダメだ。

エリアスや他の部下も使って子供達を集めるとしよう。

タスクin夏終だいたい、9月頃の月、18日、コバタ村タスクの診療所、の隣に建てた木造偽装プレハブ住宅

結局月の終わり頃には全部で35人の子供が集められた。

タスクは簡易住宅を建て、子供達を住まわせるようした。

読み書き、算数の教育もしていく予定だ。当然ひもじい思いなどさせない。

エリアスもかなり協力的で、10日くらいで『お母さん』と呼ぶ子供まででてきた。見た目だけはかなり若く見えるけど子供には関係ないか。

そのたびに「お姉さんと呼びなさい」と子供達に言っている。

ガルバジとの約束も忘れていない、明日には湖の邸宅に行く。

### 30 話目 勢いに任せて（後書き）

もう少し話の展開を早くしたいと思っっているのですが、思うようにいきません。

文才無くすみません。

つじつまの合わないことや、おかしいんじゃないか？何か忘れてない？などがありましたら教えてください。

中には理由があっっている場合もありますが、本当に間違っっていたり忘れてしまっている場合があるかもしれません。  
よろしく願います。

それと感想なんてものもありませんが、そちらもよろしく願います。

### 31 話目 保護(前書き)

今日中に投稿できました。

書き貯めをしていたので投稿するのを忘れるところでした。

### 31 話目 保護

タスクin湖の邸宅、だいたい、9月頃夏終の月19日

湖の邸宅ではアポロ達が出迎えてくれた。

「久しぶり、アポロ」

「おかえりなさい、司令」

そのまままっすぐ応接室に入り、アポロと話し始めた。

「エリアスから聞いております、ドラゴンと接触をするので？」

「そうだ、どうしても話をしないといけない事情ができた」

「では、本当にドラゴンには知能があるのですね？」

「そのようだ、なんにしるバックアップを頼む」

「それは任せてください、しかし司令がわざわざ出向かれる必要があるのでは？部下に任せてもいいのでは？」

「そうはいかないようだ、ドラゴンの方で俺を指名してきている」

その後はドラゴンとの接触方法や、場所の選定、バックアップ体制

の確認をした。

結局ドラゴンとの接触はスピーカーを使っての大声で呼びかける接触になった。

だってしょうがないじゃないか、もともとドラゴンに接触する最適な方法なんて知らないんだから。

しかもかなり間抜けだ、「ドラゴンや〜い、いるかー！いたら返事してくれ〜」なんて真面目に大声で言ってるのだから。

しかし、予想に反して思ったより早くドラゴンが現れた。

「司令、湖の対岸の森の中から大きな生物がこちらに向かってます」

「だろうな、このあたりに住んでいると言っていたようだからな」

ドラゴンは湖の上を飛んでこちらに向かってくる。

見た目は4本の足があり、少し長さのある首、尻尾がそれなりに長い、胴の部分は体の大きさに合うようにかなり太い感じだ。

頭の前から尻尾の先までだったら30メートルを越えるだろう。

10数メートル先に着地をした。俺が話しかける。

「ドラゴンよ、俺を探していたようだが」

「さがしていた？」

「人に俺の搜索を依頼したのではないか？」

「ああ、ちよつと意味合いが違うな、この前村の近くで会った人の子の言葉をそう理解したのだな。ちよつと違うぞ、あの者にそなたの臭いが着いていたので回りに『きれい』と呼ばれる者がいたら話かしたいので教えてくれと言ったのだ。回りに居なければそれで良かったのだ。わざわざ探してまで教えてくれと言ったわけではない」

「そうなのか？俺と話したければ戻ったときに声をかければいいだけだからな」

「そうだ、たまたまあの場でそなたの臭いがしたので、あんなところにいるのだっいたらなぜ居るのか聞きたかっただけなのだ」

「そうか、わかった。何にしろドラゴンは俺に興味があるのは間違いないのだな？」

「そうだな、我がここに住んで数百年。いかなる者も我を恐れて大っぴらに住み着いたのが居なかったのに、いきなりそなたが現れて人間の建物を建て、生活を始めてしまった。興味を持つなど言うほうが難しい」

「たしかにそうだな」

「それにそなたは私の知らない力を持っている、我が警戒などするのは初めてだ。なのでここ最近になるまでじつくりとずっと観察させてもらっていたのだが…」

「何かあったのかな？」

「数日前から頭がフラフラしていてな、今は大丈夫だ。そなたらの仲間が何か大掛かりなものを運んでからだ」

「なるほど…、ん？そう言えばまだ自己紹介もまだだった。俺はタスクと言う、如月タスク」

「そうであったな、遠くからいつも見ていたのでなんとなく以前から知っているように思ってしまった、我はドラゴン族のウィーディハプストングロキニスバタムだ」

「う…、それはまた立派な名前だ」

「そう無理をするな、ウィーディと呼んでくれればいい」

「わかったそうする、それで先ほどの話だが」

「司令」後ろからエリアスが近づいてきた、ドラゴンと友好的に接触できたので近づいてきたようだ。

「ドラゴンから微弱ながら波動エネルギーを検知しています」

「ドラゴンの中から？」

「はい、それで多分なのですがドラゴンの中の波動エネルギーが、先日邸宅の地下に運び入れた小型波動エンジンのエネルギーに当てられたのではないでしょうか」

「なるほど、でも今は大丈夫なのはなんでだ？」

「それは設置完了後回りをシールドで囲みましたから。波動エンジンを地上で使うのですから安全対策は万全にしないとイケませんので」

「確かにそうだ、ウィーディよ今の話で解つただろうか？」

「いや、正直なところわからん。そなたらは私の知らないことを平然と話しそして通じあっている。そなたらはいったいなんなのだ？」

「まあそれについてはおいおいと、何にしるウィーディさんよ、あなたの酔い症状は今は出ないはずだ」

「そうか、それは良かった、また人の領域に行って迷惑をかけたことはないからな」

ドラゴンとの話は楽しいものになった、我々がここにやってきたときからドラゴンは興味をもって見ていた様だ。

我々もドラゴンを警戒していたがドラゴンも我々を警戒していて、お互いに同じことを思っていたこともわかった。

これからは近所ということで仲良くしましょうとなった。

そしてガウスレバス家の要望を伝えることとなったが、ドラゴン・ウィーディは難色をしめした。

もともとドラゴンは我々に興味があったのであって、それ以外の人には興味が無かったからだ。

しかし最終的には会ってくれなくなった、人に魔獣の件などで迷惑をかけたのは間違いがなかったからだ。

ドラゴンのウィーディは月が替わったらすぐに行く約束をしてくれた。

タスキnガウスレバス家のコバタ村別荘、秋始の月1日

ドラゴンとの会見はコバタ村で行われることになった。

ガウスレバス市では人が多くドラゴンの巨体が混乱を起こすと思われたからだ。

俺は午前中は村で診療をして（簡易診断装置で見て、エリアスに薬を処方してもらってるだけだが）、午後になり別荘に来た。

診療所の隣にある建物、そこにいる小さな子供達が一緒に行きたいと言って来たが、連れてはいけないと言い聞かせるのに苦労した。

小さな子供達は、俺やエリアスがどこかに行こうとするとどこへでも付いていきたいと言う。

特にエリアスが出かけるとなると泣き出す子供までいる。

ドラゴンは別荘に午後を少し回ったころに来ると言っていた。

関係者、ガルバジとガウバウセレス、カベル、それにセバスが庭に出て待っていた。

そこへ俺が到着した。

セフォリア嬢も別荘にきているらしいが、ここには居ない。ガルバジから控えるよう言われたそうだ。

「そろそろ来ますかね？」

「そろそだと思えます」挨拶もそこそこにカベルが言ってくる、俺が返事を返した。

エリアスが西の方角を見ながら「来たようです」ドラゴンの来訪を伝える。

みな黙ったままだ。

どンドンドラゴンは近づいてくる、西の空に小さく見える影が大きくなってくる。

芝生で覆われた庭に木々を避けて降りてきた。

「ドラゴン族のウィーディだ、先日の魔獣の一件では迷惑をかけたようだ。ドラゴンが人に迷惑をかけるなどここ数百年なかったこ

とだ。正式に謝罪をする」

「ガウスレバス家当主のガルバジと申します、ドラゴン様。先日的事件はどうかお気にされませぬよう、何か事情があったことですし我が領民には犠牲者もありませんでした」

「そう言ってもらえれば助かる」

回りの人々はかなり萎縮している、ガルバジもかなり緊張しているのがわかる。よく今の会話で突っかかりが無かったものだ。

俺はガルバジからの依頼をどうにか果たすことができたので、これ以降はあまり深入りするのは控えようと考えている。

前にも言ったように、ドラゴンと接点を作るだけでそのあとのことは責任は持てないと言っていたのだから。

「ドラゴン様、此度はタスク殿を通じてわざわざ来ていただいたわけですが、単刀直入に言います。我が領地と友誼を結んでいただけないでしょうか」

「なるほど、人から会見したいと聞いたときからそのようなことを言われるのではないかと思っていた。

しかし我がガウスレバス領であったか、そなたらに加護を与えることとはないであろう」

「そこをなんとかお願いできませんか」

ドラゴンは一瞬考えたようだ。

「そうだな、我が個人的に気になっているのはタスクのみなのだ、そのタスクが其の方らと友好関係にある限りは加護ではなく保護を与えよう」

「保護ですか？申し訳ありません、『保護』とは聞いたことが無いのですがお教え願えますか？」

「知らぬか、保護とは其の方らの住まう地域を大きな災害から守るという物だ」

「それは加護ではないのですか？」

「いや違う、人は加護と保護を混同しているようだな、魔道的靈的に見れば二つは違うものなのだ」

「そうでしたか」

「それでいかがか？我の保護を受け入れるか」

「はい、我々に拒む理由などありません」

「わかった」そう言うとドラゴンは真上に向かって一声吼えた。

薄い青い幕のようなものが空に広がっていった。

「しかし本来であればタスクの力を持ってすれば我の保護など必要ないやもしれぬな」

「…それは？」

「いや、私の独り言だ気にするな」

ドラゴンとの話はそこで終わった、最後にタスクに向かって、「今度静かに話をしよう、静かなところで」と言って飛び立って行った。

31 話目 保護（後書き）

感想などがあればお願いします。

32話目 緊急(前書き)

宇宙生物再び登場

でも少しだけ、しかも迫力も無い。

ガルバジン別荘内 ドラゴン会見後

以前に入ったこともある応接室でタスク殿に話しかけた。

「先ほど、ドラゴン殿が言ったことはどういうことであるのか？」

「どづいづことと言いますと？」

「タスク殿の力を持ってすればと言っくだりじゃ」

「さあ、私にはよくわかりません」

タスク殿は確かに何かを隠している、しかし娘の件について恩もある、それにドラゴン殿が言っていた「タスク殿と友好関係にある限りは保護を与えよう」という言葉、あまりタスク殿を問い詰めるのは適切ではないであろう。

「タスク殿が言いたくないのであれば今は詮索をしないでおこう」

「それで良いのですか？」セバスがやわらかい言葉で確認してくる。

「それでよい」

「ありがとうございます、機会が来ましたらすべて話させていただきますので、失礼します」そう言ってタスク殿は部屋を出て行った。

「いったいタスク殿はどういった方なのでしょう？」カベルが聞いてくる。

「わしにもわからんが、少なくともタスク殿が我々の不利益になることは何もしていない、それどころか我々の力にもなってくれている」

「確かにそうです」カベルが少し小さな声で返事をした。

「それにタスク殿はいつかは話してくれると言っている、今は詮索はしないようにしようではないか」

タスク殿については今は詮索をするのを止めておこう、ともかくドラゴンから『保護』を貰ったのだから素直に喜ぶとしよう。

タスクi n別荘宅内

部屋を出てすぐにエリアスが声をかけてきた。

「司令、ロプスより緊急通信です」

「どうした？」

「宇宙生物が例の恒星系にワープアウトしてきました」

「わかった、すぐに行こう」

そこにセフォリア嬢が声をかけてきた。

「タスク様、お疲れ様です。ドラゴン様との会見いかがでしたか？」

「これはお嬢様、すみません急用ができて行かなければいけません。これはお土産です」

持ってきたブレスレットを渡してすぐに別荘を出て行った。

急いで村にある家に行き、子供達に少しの間出なければいけないと伝え、部下に子供達の面倒を見るように指示した。

家の地下には湖の邸宅に繋がる高速チューブが引いてある、高速チューブとは地下鉄のように地下に筒状の通路を作りそこを高速で行き来できるものである。

チューブを使えば湖まで10分とかからない。

湖の邸宅につくとすぐに転送装置でロプスに移動した。

「ロプス、状況説明！」

「はい、現在宇宙生物は1匹、大きさは前回のものの4分の1、2

0メートルほどです。観測体勢を整えていなければ補足できるぎりぎりの大きさでした」

「ということは前回のさらに下に位置しているものなのかな？」

「その可能性がありますが、いかがしますか？」

「生け捕りにしよう、できるか？」

「はい、前回と違い体制を整えていますので大丈夫です」

「たのむ、念のため恒星系外周近辺まで移動たのむ」

「わかりました」

恒星系外周につくころには戦闘が始まっていた。

宇宙生物が現れた恒星系は現在の恒星系から97光年離れている、監視のために艦を以前から配置していた。

そして戦闘は基本的にはこちらから指示を出して自立思考戦闘艇が戦うわけだ。

「司令、指揮駆逐艦より入電、捕獲に成功。こちらの損害は軽微、計測するほど無いようです」エネルギーシールドを宇宙生物の回りに正方形の形で覆っている映像が映し出された。

「わかった、嚴重に注意しろ、それと地球圏との連絡を密に、調査協力にこき使ってやれ」

「そうですね、こちらからも地球圏では考えられないブルーマープル星の情報を送ってるわけですからね」

「たしかにそうだな」

2隻の駆逐艦は観測交代の艦艇が到着と同時にこちらに向かって発進した。

こちらから交代の艦艇が21時間かけて向かう、向こうの艦艇が観測データの引継ぎをして戻るのがに約21時間、合計で42時間ほどかかる。

「エリアス、ちょっと疲れたあとを頼む」

「わかりました司令」

そのあとロプス艦内の俺の部屋で睡眠についた。

セフォリアイン別荘宅内

タスク様があわてて出て行ってしまった。

どうしたのでしょうか？

「お嬢様、どうしましたか？」廊下で立っているとカベルが声をかけてくる。

「タスク様があわてて出て行ってしまったのですが、何かあったのですか？」

「いえ、特に思いあたりませんが」

「どうしたんでしょうか、かなり急いでいました」

「私にもわかりません」

私は心配になりタスク様の家を訪ねることにした。

村から来ている女中に案内してもらった。

「お嬢様がタスクさんをそんなに気にかけているなんて知りません

でした」

「そう?」

「まあ、タスクさんは村でも人気者ですからね。小物売りとしてですけど」

そんな会話をしながら向かった。

タスク様の家は村の西にある、診療所兼住宅と言つことだ。隣には子供達が住んでいる家が建てられている。

村人の話では、タスクさんがすぐに組み立てられる資材を持ってきて、村人の協力で3日で建てることができたそうだ。

あんなに簡単に、丈夫な建物ができるなんて!とみんな驚いていたそうだ。

そして、そこに住んでいるのはタスク様が『社会福祉』の一環として集められた子供達だ。

聞いたことの無い言葉で意味が今ひとつ理解できない。

「タスク様が急がれていましたが何かあったのですか?」

隣に建っている建物にいる子供達に聞いてみた、一番年長の女の子が返事をしてくれた。

「私たちにも『急用ができたのでしばらく留守にする』と言って居なくなってしまうんです」

「そうなの…」

「これはセフォリアお嬢様、どうしたんですか？」

タスク様の使用人だ、何か知っているかもしれない。

しかし使用人は結局詳しくは教えてくれなかった。

3〜4日で戻られるはずだとだけ教えてくれた。

使用人の言葉を信じて待つとしよう。



### 32話目 緊急（後書き）

次話かその次あたりでタスクの今後の決意が出てきます。

ここを離れない理由、自分で蒔いてしまった一番大きな種。

さてどうなるか。

一応考えてはいますが、少しは予告みたいなことも書きませんとね！

### 33話目 決意（前書き）

本当はもう少し日数が欲しかったです。

仕事が忙しすぎて思ったように書けません&時間もとれません。

しかし、活動報告にも投稿を書いたので守ります！

どこかで妥協すると、たえず妥協しそうですからです。

### 33 話目 決意

ドラフレベロ帝国、中央領、中央学校内 秋始の月1日

ドラフレベロ帝国は隣国の中ではもつとも軍事力のある国である。

東西にのびる大陸の面積のうち、西の3分の1をしめる。

経済活動も活発で『帝国の中央で買えなければ、他に行くだけ無駄だ』と言われるほど手に入らないものは無いと言われている。

経済の中心、そして帝国の政治的中心、さらに学問の中心にもなっている。

中央学校には魔術科や経済科、政治科、哲学に神学、文学、美術などがあり、ほかにも多くの科が存在し、主に貴族や有力商人の子等が通っている。

そしてそこにガウスレバス家の2女、3人兄妹の末っ子が通っていた。

名前はシエフェイルア・フォン・ガウスレバスと言う。

家族や友達からはシエフェと呼ばれている。

「シエフェは今度の連休どうするの?」

シェフェの同室の子が聞いてくる。この学校は基本的には全寮制だ。

「一回領地に帰ろうと思ってるの」

「どうしたの？今まであんまり領地に帰るなんてこと無かったじゃない」

そうなのだ、シェフェはめったに領地に帰らない。学校に入って2年と半、帰ったのは1回きりだ。

たいていの子は最低でも1年のうちに2回は帰っている。

「お姉さまの病気が治ったって知らせがきたの、会ってお祝いを言いたいよ」

「お姉さまって、あの皮膚がただれた…ゴメン、失礼だったわね」

「ううん、たしかにお姉さまの皮膚はただれてひどかったですもの。この国の貴族で知らない人なんていないもの」

「ごめんね」

「いいわよ、でもね、そのお姉さまの病気が綺麗に治ったって知らせが少し前にきたのよ。それでお姉さまに会いたい」

「そうなんだ、じゃあ今度の連休は1人で寂しく過ごすわね」

「ごめんね、お土産持ってくるから」

シェフェは久しぶりに領地に帰る準備をし始めた。

タスクインムーンス上のロプス艦内、秋始の月3日

今回は生きたまま捕獲することがきた。

調査もかなり確度の高い推論を出せるだろう。

生きているということもあり、地球圏とのやり取りでも思った以上に早く返事が帰ってきた。

そしてわかったことは、自分にとっては衝撃的だった。

宇宙生物の目的がほぼ確定した。

エネルギーだ、ワープをも行う生物なのだからエネルギーは欠かせない。

そんなときに俺の艦隊のエネルギーを察知したのだ。

そしてそのエネルギーを追ってこの恒星系に来たらしい。

そしていつも出現する恒星系だが、あそこの恒星が宇宙生物の一つの中継恒星になっているようなのだ。

たしかにあそこの恒星は他の恒星と比べても若干違う、その違いが宇宙生物の中継点足りえるのだろうか。

であれば、恒星を破壊すれば問題は解決するのかと考えれば、それもいかない、このブルーマール星から近すぎるのだ。

この宙域はある意味恒星系の密集宙域だ、下手に恒星を破壊すると連鎖反応でこの星にまで影響が出かねない。

では我々の艦隊がこの星を離れるとどうだろうか、結論から言えばそれもダメだ。

宇宙生物はこの恒星系を目標地点として認識してしまったので、我々が居なくなってもエネルギーを捜し求めてこの星を蹂躪するだけだ。

結局、俺があれにこの星を目標にさせてしまったのだ。

そしてこの報告の中にはもう一つ、捕獲した宇宙生物は仲間に通信を送っているので通信遮断を講じるべきだと。

すぐにそうしたが、すでに遅いだろう。

少なくともこの星が、俺のせいで蹂躪されるのを黙ってみていることはできない。

自分で蒔いてしまった種なのだから、宇宙生物からこの星とそこに住む人を守らないといけない。

俺が責任を持って対処しよう。

傍目にはそれほど固い決意は感じられないが、タスクは自分の心の中で誓っていた。



### 33 話目 決意（後書き）

今回は、自分で知らないうちに蒔いてしまった一番大きな種でした。

それに妹も出てきました、最初のうちはそれほど活躍しませんがそれなりに活躍させたいとは思っています。

それに、初めて国も名前も出てきました。

他にもいくつか国がありますし、人以外の国もあります。

今回はここまでというところで。

次回の投稿は活動報告で。

### 34 話目 カシャエリア（前書き）

無理やり投稿のところがあります。

それなりに今後の話に関わるのですが、繋ぎの話のような感じですが、次回もこんなような感じになると思われますが、早く事象が起きてどうするか状態にしたいと思っています。

それと、この3連休、想像以上に忙しく書くことと思っていた3分の1も書けませんでした。

疲れが溜まってるのが自分でわかります。

### 34話目 カシャエリア

タスクin湖の邸宅、秋始の月3日

ドラゴンが来た、何かあわただしくしているのが気になって来たのだらう。

「タスクよ、どうしたのだ」

俺はつい先ほど地上に降りてきた。

外からの声に返事をするために出た。

「ドラゴン・ウィーディ、問題が発生して今まで出ていた」

「そうなのか、そなたの気配が一瞬で消え、そして一瞬で現れた、

どういうことなのかと興味をもつてしまいがちだったが

「今はこれから戻らないといけないので、この次話しますよ」

今度ドラゴンと話をしよう、ゆっくりと。

今はともかく引き取ってきた子供達が心配だ、エリアスも心配そう  
だ。

村にある簡易住宅、村人には普通の木で出来た家に見えるが、の子  
供達はおおむね元気だった。

おおむねと言うのは、子供の中には俺やエリアスが急に居なくなっ  
て不安になってしまった子がいたのだ。

特に小さな子に多い。

エリアスの顔を見るなり、抱きついて泣き出した子供までいた。

少し大きな子は、俺に「おかえりなさい」と声をかけてくれた。

一番の年長者、カシヤエリア（13歳）だ。

「ただいま、何かあったかな？」

留守中のことについて尋ねた。

「特になかったです、ソウルさんも良くしてくれましたから」

ソウルとは昔からの使用人と言うことにしている部下で、護衛兼子供達の面倒見役といったところだ。

「そうか」

「それよりタスクさん、急にどうしたんですか？」

子供にしてはしっかりした口調だ。両親が健全なときには読み書きも少し習っていたこともあり、それなりに裕福な家の子だったらしい。

両親の死と同時に回りのハイエナ達にすべての財産をむしりとられて、まったくの無一文になってしまい、追われるように住んでいた町を出てきたらしい。

そしてついこの前まで住んでいた村に流れ着いたと。

ガウスレバス領内の村々は、基本的に孤児達に寛容だ。

とりわけ助けるようなことはしないが、孤児が増えたりしても受け入れて雑用をさせて小遣いを与えたりしている。

「急に急用ができてしまっただけ」

「タスクさん、急な用事を急用と言うのであって、急な急用っておかしいですよ」

「……たしかにそうだ、そんな指摘を受けるなんて思ってたなかった。」

しっかりと勉強しているんだな」

「ごまかさないで下さい、そんなこと誰でもおかしいって思います。それに勉強をしなさいって言うてるのはタスクさんじゃないですか」  
そうなのだ、俺は子供たちに勉強をさせている。

以前から考えていたように、しっかりとした道德観念をもった人に育つてくれて、そしてどこに出しても恥ずかしくない教育を受けさせたいと思っている。

なんか道德観念とか教育とか、はっきり言って俺の柄じゃないがそれでもこれからの可能性を秘めている子供達には、できるだけ選択の幅が持てるようになって欲しいとは思っている。

地球圏ではそれが当たり前なのだから。

ここは違うと言われても、俺にはそれをどうにかする知識も、力もあるのだから出来る範囲では子供達の力になってあげたい。

「そうだったな、すまない。しかしなぜなのかは今はまだ話せない、時期がきたら話すよ」

カシャエリアは不満そうな顔をするが、「わかりました」そう言うてくれる。

顔はむくれ顔だ。

「カシャエリア、大丈夫だった？」

エリアスは子供達をなだめ終わったのだろう、俺の横に立ち声をかける。

「はい、エリアスさん」

その後は居ない間どうだったかの話になった。

たった2日だが、それは激しい2日だったようだ。

### 34 話目 カシャエリア（後書き）

24日休みなので、いつものように投稿します！

必ず！

もししなければ何か事故にあったらと思ってください。

それ以外では投稿します！

詳しくは活動報告で。

### 35 話目 平穩（前書き）

投稿が思ったより遅れてます。

活動報告の通り24日中ではありませんが、自分の中での予定より6時間以上遅いです。

休みの日から翌日の出勤までにできれば3回投稿したいと思っていたのですが、2回になってしまいかもかもしれません。

なんにしても出来る限りのことはしたいと思っています。

タスクin村の診療所兼自宅、秋始の月4日、昼

セフォリアお嬢様 came。

宇宙そらに上がったときにも来たらしいが、どうしたんだ？

「タスク様が戻られたと聞いて来たのですが」子供達の家の前で話している。

「どうしたんですか？」

俺の返事にセフォリアさんはちょっと戸惑った顔をしたあとに急に怒り出した。

「『どうしたんですか』はないじゃないですか、急に居なくなってしまうって何かあったのか心配していたと言っのに」

「はあ、そうだったのですか、それはすみません」

「！」なんとも言えない表情をして、プイって後ろを向いて帰っていった。

エリアスが近づいてきて言うてくる。

「司令、とりあえずセフォリアさんを追って謝ってきてください」

「？なんで？」ちょっと子供みたいな聞き方をしてしまった。

「はあ…、少しは『男』として女性を扱ってください、ともかくお嬢様を追って謝って、別荘まで送ってさしあげてください。はやく」

最後のほうは強い口調で言われてしまった。

「わかったよ、そうする」

そう言って俺はセフォリアお嬢様のあとを追いかけた。

そして別荘まで送って診療所兼自宅に帰った。

今は診療所で寝泊りはしていない。

診療所兼自宅としている家の部屋の狭さもあるが、隣に作った子供達用の住宅のほうが使い勝手がよく、今はそちらに部屋をとって寝泊りをしている。

仮設住宅とは言ってもそれなりに大きなものを作って良かったなと後になって思ったものだ。

少し建物について説明すると。

まず2階建てで、広さは幅約20メートル、長さ30メートルほど。

部屋が1階に8部屋、2階に10部屋、細長い形をしている。

1階にある部屋の一つを俺が自分用として使い、そこには湖の邸宅と連絡をとるための設備などを設置している。

他の部屋は基本的に子供達の部屋になっている。ひと部屋だいたい5人ほどだ。

1階の部屋数が少ないのは3つの部屋をぶち抜いて広くし食堂にしているからだ。

はっきり言って、この村の建物にしては結構大きい。

そして、この建物には村には無いものも取り入れている。

まずは電気だ。

明かりだが、見た目はランプ仕立てにしているが、よく見ると火を灯していないのがわかる。

子供達も最初は普通のランプと思っていたようだが、思ったより熱くないとわかり火ではないと理解している。

そして例に漏れず‘魔術’なんだと思っているようだ。

他にも電気を利用した家電をいくつか使っている。

他には水道だ、見た目は井戸にしてある。

人間が生きていく上で水は欠かせない、そして水はきれいであるにこしたことは無い。

今までは水を汲みに川まで行かなければならなかったのが、家の庭にある井戸で済むというのはかなり楽になったと喜んでいた。

そしてこの井戸は水道を使っているとは知られなかった。見た目も使い勝手もこの村に違和感が無かったからだ。

水道と言えば上水道だけではなく、下水道も作った。

排水設備を整えて、簡易浄化装置を地下に埋設して川に流した。

これも艦隊の得意分野の一つだ、排水と言ってもほぼ無害といえるレベルまでキレイになっている。

もともと長期宇宙航行にも使われるもの、宇宙では排水も循環させて使っているくらいなので当然飲むこともできる。

他にもいくつか生活を便利にするためのものがあるが、基本的に現地のものに偽装してある。

子供達も、聞いたこともないような便利なものを最初は不思議がっていたが10日もすると違和感なく使うようになっていた。

そしてそんな家にガウスレバス家の家令、アウシュが訪れた。

「タスク様はおいでですか」

玄関で声をかけた。

「はい、お待ち下さい、今呼んで来ます」対応に出たカシャエリアが家の奥に入り呼びに行く。

建物の奥からは子供達の声が聞こえる。

「お待たせしました、どうしましたか？」

「突然すみません、明後日なのですがガウスレバス市まで来ていた  
だけないでしょうか？」

「突然どうしたんです？」

「はい、明日シエフェイール様が久しぶりに戻られると言う事で、  
小さなパーティーを開くのですが、セフォリア様の病気を治して頂  
いたタスク様にもぜひ出て欲しいと言われて来たのです」

「シエフェイールア？それは？」

「ガウスレバス家の末のお子様です」

「そうでしたか、わかりました。では明日こちらを出発すればよろ  
しいですね」

「はい、セフォリア様も明日こちらを出ますので一緒にいかがで  
すか？」

「わかりました、そうさせてもらいます」

明日から出かけると子供達に言うとおかないとな、前もって言うて  
おかないとこの前みたいになりかねない。



35 話目 平穩（後書き）

誤字脱字などありましたらお知らせ下さい。

それと感想なんかありましたらそちらも宜しくお願いします。

### 36話目 パーティー（前書き）

前回投稿から4時間半です。

今回は末の妹が出てきます。

次話以降はそれなりに出てきます。

性格付けがわりとはつきりしているので書いていて楽しいです。

### 36話目 パーティー

シエフエールルアインガウスレバス邸自室、秋始の月6日、昼

昨日領地に帰ってきた。

お姉さまの病気が治ったと聞いたが、本当は見るまで半信半疑だった。

でも、実際に会ってみると綺麗に治っていた。ビックリだ。

今までお姉さまの肌はただれて、家族以外には見せていなかったのに、それが綺麗になってしかも私よりも肌理きめが細かいみたいだ。

ちょっと嫉妬。

でもお姉さまの病気が治ったが嬉しいのは確かだ。

「これでお姉さまにも求婚者が押しかけるわね、お姉様ってそもそも綺麗なんですから病気が治ったら引く手あまたです」

「え？結婚？私はそんなこと考えてもいなかったわ。でもそういうこともあるのかしら？」

「当然です、お父様にとってお姉さまと私はどこかと縁続きになる一つの駒と考えるのも当然ですわ。愛して下さいているのも間違いないでしょうけど」

「でも、結婚なんて今は考えられない…」

お姉さまに縁談の話をし始めてから、それまでとはちょっと違う雰  
囲気になった。

どうしたのかしら？

「もしかしてお姉さま、誰か好きな人でも？」

「好きな人？」

でもこれはおかしい、お姉様は今までほとんど人目に触れていないので、男性の知合いなんてまず出来るはずがない。

お姉さまはちよつと思議そつな顔をして「特には思い当たらないですけど…」そんな言葉が帰ってくる。

そうかしら？私の知らないところで何かあったのかも。

お姉さまの様子を観察しませんと！

私の得意な『人間ウォッチング』です！

あるパーティー出席者innガウスレバス市、ガウスレバス邸、秋始  
の月6日、夜、パーティー会場内

パーティーが始まって少し時間が経つ、そして思ったより多くの人  
が来ていた。

東隣の領のサシャシエル伯爵とその息子。

ガウスレバス領から南東、サシャシエル領の南にあるトバリオ侯爵  
家の息子。

他にも爵位は無いが、下級貴族と呼ばれる人たち、そして魔導士と  
呼ばれる人たち、有力商人も、全部で数十人に上るだろう。

もともとガウスレバス家はパーティーなどはあまり行わない、しか  
し今回はセフォリアの病気が治ったことと、末の娘シエフェイル  
アが少しばかり帰ってくると言う事でこの機会に全快祝いとそれを  
公表するためにパーティーを開くことになったのだ。

そして、めったにパーティーなど開くことのないガウスレバス家と  
言う事で、近隣の侯爵家や伯爵家では珍しいと言うこともあって出  
席してきた。

それに多くの人は、全快祝いと言うことはあの『タダレ皮膚のセフ  
オリア』の病気が治ったということ。あの病気を治した治癒士をぜ  
ひとも見てみたいということもあったのだ。

「これはこれはコルレニウム様、ご無沙汰しております」サシャシ  
エル伯爵だ、隣の領地を治めているがあまり良い噂を聞かない。

「これは丁寧にありがとうございます」たしかに私の家は侯爵家で  
サシャシエル家より格上だが、私自身が爵位を持っているわけでは

ない。

なので私自身は爵位を持たないただの若造と言ってもいいだろう。

しかしサシャシエル氏は私の心象を良くしようとする必要以上に丁寧なのだろう。

私自身は『年長者らしい堂々とした態度』を見せて欲しかった。

「コレレニウム様が来られるとは知りませんでした。もしかして治癒士が気になったので？」

「そうですね、私もどんな治癒士なのか気にはなりますが、セフォリア嬢の病気が治ってよかったと言う気持ちが大きいですよ」

これは事実だ、以前からセフォリア嬢は綺麗だとの評判だ。病気でタダレ皮膚になっているが、治ったとなれば一目会いたいと思うのが男のサガだ。

「そうですね、いや、私も病気が治ったことは喜ばしいと思います」

「コレレニウム殿、サシャシエル卿、よくおいでくださいました、ガウスレバス家一同歓迎いたします」ガルバジ殿が声をかけてきた。後ろから来たので気がつかなかった。

「丁寧な言葉ありがとうございます」「ありがとうございます」「私の声のあとにサシャシエル殿も返事を返す。

「それにしても、セフォリア嬢の病気が治ったと聞きましたが、そろそろお見えになられるのですか？」

私が見当たらないセフォリア嬢について聞いてみた。

「はい、そろそろ来るはずです」

そう言った直後にセフォリア嬢がドアを開けてパーティー会場に入ってきた。

話には聞いていたが綺麗な方だ、背中の肌が大胆に見えるドレスを着ている。思わず見とれてしまう。

そしてまっすぐこちらに向かってくる。

「お父様、遅れまして申し訳ありません」

「セフォリア、コルレニウム殿とサシャシエル卿にご挨拶を」

こちらに視線を向けると一層綺麗に見える。

「はじめまして、セフォリアと言います、よろしく願いいたします」

いままでこのような席には出たことが無いと聞いていたが、少しはにかんだ感じでなんとも見目麗しく感じる。

「これは綺麗なお嬢様ですな、はじめましてホリス・フォン・サシヤシエルと言います、以後お見知りおきを」

「コルレニウム・トバリオと言います。よろしく申し上げます」

その後はとりとめも無い話で盛り上がり、ガルバジ殿とサシャシエ

ル卿は途中で用事があると言って離れていった。

「こんばんわ」見たことの無い男性に声をかけられた。

私より少し年上だろうか、あまり歳は変わらないだろう。

「タスク様、どこに行ってらしたのですか」セフォリア嬢が少し強めに言っているが咎めているようにも聞こえない。

「すみません、慣れない席で気後れしていました」

「そうだったんですか」

この男性は誰だ？セフォリア嬢に丁寧に接しているところから見ても使用人だろうか、しかしそれでは会場に入ってこれないはずだ。

使用人で入ってこれるのは、給仕役に限られるはずだ。

もしくは警護の者だけで、この男性は警護にしては少々体格が心もとない。小さくは無いが屈強には見えない。

まあ、人は見かけによらないが。

「セフォリア嬢、こちらの男性はどなたで？」

「申し訳ありません、紹介が遅れました。こちらは私の病気の治療をしていたいただいたタスク様です」

「タスクと言います」男性が頭を下げて挨拶してきた。

「そうでしたか、これは思った以上に若い方で驚きました」

多分、今の私の顔は驚いているのがすぐにわかるだろう、自分の顔の筋肉が強張るのがわかる。

思った以上に若い感じだ。

確かに治癒士なら、特にセフォリア嬢を治療した者なら会場に普通に居ても不思議はないな。

それから治癒士にどういった治療をしたか聞いてみたが、詳しくは教えてくれなかった。

教えてくれなかったと言うのは正確ではないかもしれない、もしかしたら私の理解力が追いついていないのかもしれない。

私も一応は中央の学院で学んだのだが、魔術については一般教養程度だ。

それでも学院の一般教養なので、そんじょそこらの学校に比べればかなりレベルは高いはずだ。

なんと言うか、『遺伝子がどうの』とか『調整槽がどう』とかよくわからなかったのだ。

その後は、『今度我が領地にも遊びに来てください』と社交辞令のような会話で締めくくった。



### 36話目 パーティー（後書き）

次話投稿はもう少し書き溜めできてから投稿しようと思っています。

今のところ1話分しかないのでから。

次話投稿予定ですが、活動報告に書いておきます。

最近の近況も。まあ近況は自分の仕事や私生活のことなので活動ってこともないのでしょうけど。

それでは感想などがあればよろしくお願いします。

それにしても、読み返してみても村や町の名前をどうにかしたいとつくづく思っています。

### 37話目 ガルバジの思惑（前書き）

どうか投稿です。

話としてはそれほど進展していません。  
それでも少しずつ進めていきます。

37 話目 ガルバジの思惑

ガルバジ in ガウスレバス邸、パーティー会場内

ガルバジはセフォリアとコルレニウムの様子を窺っていた。

セフォリアははつきり言っ行って行き遅れだ。

そんなセフォリアに年齢的に釣り合いがとれ、しかも政治的にもプラスになると考えればコルレニウム様がちょうど良い。

トバリオ侯爵様にも話をして、今日のパーティーに来ていただいたのだ。

トバリオ侯爵様にしてみればガウスレバス家と縁続きになってもさして得るものは無い。

ではどこと繋がれば得るものがあるかと言うと、かなり限られる。

それほどにトバリオ家の政治的権勢は絶大だ。

そして確実に得るものがある相手と言うと皇帝に繋がる者が考えられる。

しかし皇帝に連なる方々はほとんどが男子、女子は居ることはいるのだがまだ5歳になったばかりだ。

ということ、コルレニウム様と縁談を考えることができない。

そうなると自然、爵位持ちの娘に目が行くことになる。

コルレニウム様は中央で軍に在籍していたために、結婚もしておらず若干年齢が高い。

コルレニウムの年齢は26、この国で爵位持ちの家の長男で結婚してないのは珍しい。

しかし今回はこれを利用して、年齢もつりあう、領地も近く経済での協力ができるかもしれない、皇帝陛下に対しても不利になる家でもない、まあ名前も憶えて頂いているか疑問だが。

そうだった理由でセフォリアとコルレニウム様の縁談をトバリオ家に持ちかけた。

トバリオ侯爵様は『コルレニウムに任せる、あれが気に入れば縁談の話を進めてもよい』と言ってくれた。

今日のパーティーの感じだと、双方共に嫌っているようには見えな  
い。

トバリオ家に話を進めたいと報告しよう、そして一気にセフォリアの縁談を決めてしまいたい。

セフォリアも自分が結婚できるとは思ってもしなかったら、  
喜ぶだろう。

しかもその相手が、コルレニウム様となればなおさらだ。

我ながらなんと良い縁談を考えたのだろうか。

ガルバジは自分の考えに満足していた。

そしてパーティーの翌日にはセフォリアの病気が治ったと知れ渡っ  
ていった、それと同時にその美しさも広がっていった。

それにコルレニウムと親しげに話をして、なかなかいい雰囲気だったと…。

シェフエールアインガウスレバス邸自室、秋始の月7日

昨日のパーティーでお姉さまを気をつけて見ていたが、途中で変化があった。

病気を治療してくれたタスク様に声をかけられてからだ。

もしかしてお姉さま、タスク様が好きなのでは？

たしかに病気を治してくれた治癒士に、好意を持つというのは聞いたことがある。

実際治癒士の結婚相手は、もと患者が一番多いと聞いたことがある。

騎士団員の結婚相手は仕え先の侍女、一般的な魔術師の相手は師匠の娘もしくは幼馴染、鍛冶師は武器屋の娘、全部が全部ではないがそれでもその組み合わせが多いのは確からしい。

お姉さまも、病気を治してくれた治癒士に恋をしてしまったのかも  
しれない！

でも…、

お姉さまがいくらタスク様を好きになっても一緒になることはまず  
無いと思う。

タスク様がいくら優れた治癒士であっても、一介の治癒魔導士に過  
ぎないのだから。

もしかしたらお姉さまもそれを知っていて、私に好きな人は思い当  
たら無いと言ったのかもしれない。

もしくは自分でも好きになってるのを気がついていないか…。

もうどうしよう！お姉さまを応援したいけど、でもハッピーエンド

は考えられないし、どうしよう？

コイバナ大好きシェフエイルアは、話だけではあきたらず姉の恋を成就させる方法を考えはじめた。

まだそうだとも限らないのに。

### 37話目 ガルバジの思惑（後書き）

思った以上に仕事が忙しい。

27日夜と28日夜はそれなりに書けましたが、それでも思っていたの半分くらい。

次の休みにはもっと書きます！

次話投稿については活動報告で。

そして感想等ありましたらよろしくお願いします。

38話目 シェフエイルアの観察(前書き)

どうか投稿です。

いつも『どうか』って感じで申し訳ないです。

今のところもう1〜2話くらい書き溜めできました。

手直しや展開をもう少し考えて投稿します。

38話目 シェフエイルアの観察

シェフエイルア in 西村、ガウスレバス家別荘内、秋始の月9日

タスク様が村に帰ると言って、お姉さまも村にある別荘に行くと言  
い出した。

回りの者に聞くと、病気が治っても以前からよく滞在していた西村の別荘に居ることを好んでいるそうだ。

お姉さまは病気になってからは肌を見られるのを嫌って、人目につかないところに滞在するのが多くなっていた。

西村はお姉さまが一番好きな滞在地だ。

だからなのだろうか、お姉さま付きの侍女はあまり気にもしていないようだ。

しかし、私の『人間ウォッチング』を舐めてもらっては困る。

お姉さまはタスク様に特別な感情を持っているとみた！

そうならんで、私もお姉さまに付いて西村の別荘に来た。

そういえば、お姉さま付きの侍女って今は場所によって現地で奉公してくれる人があたっていたんです。

だからかな、お姉さまの気持ちに気づく人がいないのは。

以前付いていた人が今でもいてくれれば良かったんですけど。

彼女が年齢を理由に辞去してしまったのが悔やまれます。

彼女だったらお姉さまの気持ちを解ってくれて、そして相談もできたでしょうに。

でも居ないものは仕方が無い、私が代わりに骨を折ってあげます。

まずはお姉様だけが好意を持っていても仕方ないですから、タスク様の気持ちも確認しましょう。

そうしましょう！

学院の休みもあと6日しかありません、帰る時間も考えれば実質は3日ほどしか無い。

短いですけど、出来る限りのことを！

お姉さまがお出かけになる。

以前に比べて外出することが多くなったと家令から聞いていますが、驚きです。

しかも護衛も連れずに一人でなんて信じられない。

確かにこの村はのどかで領内でも特に平穏ですけど、それでもまったく何も無いわけではないはずですよ。

「お姉さま、お出かけですか？一緒にしてもいいですか？」

「いいですよ、でもついてきても面白く無いと思うけど、いいの？」

「はい、ところでどこへ？」

「タスク様が引きとられた子供達の家ですよ」

「引きとった？それはどういうことなんですか？」

「あら、知らなかったの？じゃあ歩きながら話すわね」

そう言ってお姉さまは歩き始めた。私は急いで後について歩き出した。

そしてその話を聞いて私は驚いた。

そんな聖人みたいなことをしているなんて、信じられなかった。

しかもその子供達に学問まで施しているなんて。

お姉さまはそんなタスク様のことを話しているときはすごく嬉しそうだった。

お姉さまとしばらく歩くとタスク様の住む家についた。

思ったより建物は大きかった、中からは子供達の声が聞こえてくる。

「こんにちは、セフォリアです」

少しすると中から私より少し年下に見える女の子が出てきた。

「セフォリアさん、こんにちは。タスクさんは中にいますのでどうぞ」

そういつて私たちを案内してくれた。

中は思った以上に綺麗で、飾りはほとんど無いがまっすぐにのびる廊下は窓が無いのに明るかった。

なにこれ？魔術？

「お姉さまは、なんか親しいようですけど？」

「そんなことないわよ、顔を知っているだけでまだそれほど親しいわけではないわよ」

そう言うがその言葉以上に親しく感じる。

あとになって知ったのだが、少し前にタスク様が急に不在になったときに何回かここに訪れ、先ほどの少女と話を数回していたのとだった。

少女の案内で一つのドアの前で立ち止まった。

「タスクさん、セフォリアさんをお連れしました」

「どうぞ」中から声が聞こえる。

部屋の中にはエリアスさんだったろうか、その人もいた。

よくこの人といるところを見るけどどういいう関係なの？

もしかしてお姉さまのライバル？そんなことを考えてしまう。

もしそうなら どうにかしないと！

「タスク様、ご依頼されていたものをお持ちしました」

そこでお姉さまが頼まれていた物を持ってくるために訪れたことを知った。

聞いていると、タスク様は領地内で行われている教育に関する資料のようだった。

他にも農地に関するものもあるようだったが、色々な資料がごちゃ混ぜになっているようにも感じた。

そのまま雑談へと流れていったが、その中でお姉さまがタスク様の活動をお手伝いしたいと申しでた。

最初はタスク様も遠慮されていたが、お姉さまの力説で最後には「お願いします」と返事を貰っていた。

話が終わったあとは子供達にも知らせようと使用人だろうか、案内されて部屋を出て行った。



### 38話目 シェフエイルアの観察（後書き）

今回書いている途中で間違って10行くらい消してしまっただ変な目にあいました。

自分のミスです。

大事な部分だと思っていたので思い出しながら書きました。

こまめに保存しておけばよかったと悔やまれます。

次回投稿は、活動報告にもあるとおり明日の朝までに1話は投稿します。

### 39話目 盗み聞き（前書き）

本日2回目の投稿です。

本当は明日の朝までに投稿と考えていたのですが、活動報告を読み直してみると30日中にもう一回と書いてしまっていました。

ともかく投稿します！

1日前とは少し違う展開にしようとして書き直していたらちょっと時間がたってしまいました。

展開を考えるのは良いとしても話が思った以上に進まない、でもそれでもいいかななんて勝手に思っています。

タスクin村の家

「司令、先ほどの話の続きですがよろしいですか？」

「ああ、そうだな、それでどうしたらいいと思っつ？」

セフォリアさんが来る前から話していたことの続きだ。

「最良の方法は無いと思います」

「それでも念のため考えておかないといけないな、自分のことしか考えてなかったから忘れていた……」

エリアスと話しているのは危機管理についてだ、そしてその危機とは簡単に言うと俺が死んだ場合どうするかと言うことだ。

例えば俺が不慮の事故、もしくは病気で死んだとする。

そうなるかどうか？

まず宇宙生物を防ぐことが出来なくなる。

艦隊が暴走する恐れがある。

どちらか一方だけでもこの星の生物は滅亡するかもしれない。

宇宙生物は当然だが、艦隊も問題だ。

そもそも原因は未だに不明なのだが、人工的にアルティシファリクリエイト造られた者達は命令系統の上に必ず人が居ないと徐々に暴走してしまう。

自立思考を持たせても、人間に危害を加えないプログラムを組み込んでも、徐々に暴走してしまう。

人工的にアルティシファリクリエイト造られた者のみの部隊や集団はかならずどこかでそうなるのだ。

なので、人が必ず指令元であるように部隊が組まれるようになった。だからアルティシファリクリエイト人工的に造られた者のみの部隊は存在しない。

「この星の慣例では、子や孫がその権利や義務を負うとなるでしょうが、今の段階で同じようにはいかないでしょう。そもそも司令には子供がいませんし。

しかし私たちとしては万が一の場合に備えていてほしいと考えます」  
タスクとしても自分が万が一居なくなった場合どうなるか心配している。

宇宙生物の問題は自分が生きている場合に解決できればいいが、どうも調査やシミュレーションの結果からそれは無理そうだ。

宇宙生物はかなりの広範囲、たぶん8万光年以上の宙域にわたって生息しており、その数も10億を下らないようだ。

順番に拠点を攻略していつても100年以上かかるだろう、しかも広さや数はあくまでも最低でもとのことだ、実際にはそれ以上、2倍や3倍ならまだいいが、10倍以上いるかもしれない。

生け捕りにした宇宙生物はかなりの下位種だったようで、上位については期待したほど知ることができなかったのだ。

それに仮に攻略に出かけたとして、その間のこの星の防備が手薄になる。

艦隊の戦力も今までの10倍や20倍の敵なら撃滅できるが、拠点

を落とすのだから以上の戦力があると考えられる。  
場合によっては艦隊の戦力では手に余る場合も容易に考えられるの  
だ。

「どついたらいいと思う?」

「一つの方法としては、やはり結婚して子供を作って、その子に引  
き継いではいかがですか?なんにしるいずれは指揮権を移譲しない  
といけないのですから」

「そうは言っても、生まれたばかりの子供に艦隊の指揮はできない  
ぞ」

「はい、ですから大きくなるまでの間は妻や義父に後見人になって  
いただいたらいかがでしょう。それとも赤の他人に指揮権を移譲し  
ますか?」

私たちとしてはこの先数百年、あるいは数千年稼動していくわけで  
すから、適切な指揮権移譲をお願いしたいのです」

そうなのだ、最終的には誰かに指揮権を移さなければいけない、あ  
の世で艦隊命令はできないのだから。

一応は延命処理などもするつもりだが、それでも140歳まで生き  
れば御の字だろう。

まったく関係の無い人に『宇宙生物がちょくちょく来ることがある  
から、艦隊預けるから死ぬまでこの星を守ってね』なんてあまりに  
も迷惑すぎる。

そう考えると子供を作って、『父の不始末の処理を頼む』と血縁者  
に言うほうがまだいいかもしれない。

基本的にはどちらもやりたくはないが。

「子に指揮権を移すと言うのは個人的には好きじゃない、将来を決めてしまうようなものだからな。しかし赤の他人に押し付けるのはさらに気が進まない。」

仮に子に受け継ぐとしても俺に相手はいないぞ？どうするんだ？」

「そこはこれからの司令次第ということで、なんにしても早いうちに命令系統の第2位を考えておいてください。」

万が一にも明日にも司令が不慮の事故に遭わないとも限らないのですから」

「は〜、まずは信用のおける人を見つけないとな、戦力を手に入れたも無闇に使わないような人を…」

「そうですね、お願いします」

シェフエイールアイン子供達の家、タスクの部屋の前

タスク様の部屋に忘れ物をしてしまい取りにきたのだが、中からタスク様とエリアスさんの真剣な話し声が聞こえてくる。

思わず聞き入ってしまう。話は途中からだからどうということなのか今ひとつわからない。

「この星の慣例では、子や孫がその権利や義務を負うようになるでしょうが、今の段階でそうもいかないでしょう。そもそも司令には子供がいけませんし。」

しかし私たちとしては万が一の場合に備えていてほしいと考えます」

エリアスさんの声だ、子供の話？

「どうしたらいいと思う？」

なんの話なんでしょうか？

「最良かどうかはわかりませんが、やはり結婚して子供を作って、その子に引き継いでいかげですか？なにしろいずれは指揮権を移譲しないといけないのですから」

タスク様の結婚の話？生まれた子供にシキケン？シキケンって軍の命令なんかをするあの指揮権？  
タスク様は軍勢とかお持ちなの？

「そうは言っても、生まれたばかりの子供に艦隊の指揮はできないぞ」

それはそうだ。

「はい、ですから大きくなるまでの間は妻や義父に後見人になっていただいたらいかがでしょう。それとも赤の他人に指揮権を移譲しますか？

私たちとしてはこの先数百年、あるいは数千年稼動していくわけですから、適切な指揮権移譲をお願いしたいのです」

ん？どういうこと？大きくなるまで待てないってことなのかしら？それに数百年？数千年？エリアスさんってなに？

「子に指揮権を移すと言うのは個人的には好きじゃない、将来を決めてしまうようなものだからな。しかし赤の他人に押し付けるのはさらに気が進まない。

仮に子に受け継ぐとしても俺に相手はいないぞ？どうするんだ？」

「そこはこれからの司令次第ということで、なんにしても早いうちに命令系統の第2位を考えておいてください」

「は〜、まずは信用のおける人を見つけないとな、戦力を手に入れたら無闇に使わないような人を…」

「そうですね、お願いします」

ドアの外で聞いているといくつも疑問が出てくる。

タスク様って何者？数百年以上も生きるエリアスさんて？生きるじやなくて稼働？

お姉様に幸せになって欲しいから、タスク様とくっつけようと思っただけど、疑問がたくさん出てきてどうしたらいいの？

「シェフェ、戻ってこないから呼びにきたわよ。どうしたの？」

「あ！お姉さま、すみません、今戻ります」

そういつて忘れ物を取らずに子供達のいるところに戻っていった。

シェフエイールア in 西村の別荘内、秋始の月11日

結局タスク様の話を考えていたがどうということなのかわからなかった。

聞くこともはばかられ、何もできずに戻ることになってしまった。

最後にお姉さまに、「タスク様に好意を持つのはいいけど、気を付けてね」と言った。

お姉さまは顔を赤らめて「そんなことないわよ」、そう返事を返してくれたが顔を見れば好意を持っているのが一目瞭然だった。



## 40話目 旅人（前書き）

生活をしていくと色々な人に出会い、そして関係を築いていきます。

人とのつながりや関係が物語の『もと』ではないでしょうか。

今回、新登場人物が出てきます。

この人からさらに今後色々な人と接触していくと思います。

## 40話目 旅人

旅人in西村、秋始の月22日

これだけ大陸の外れまで来たのは初めてだ。

多分この村が一番西にある村だろう。

俺はギフロ、冒険者をしている。年齢は20、  
、剣の腕には自信がある。

一部では「勇者」なんて呼んでいる人もいる。まあこれは自慢だけ  
ど。

「この村でいいんだよね？」

今声をかけてきたのは同じパーティーのサワサ（19歳、  
）だ、主に回復や防御の魔法を使って援護をしてくれている。

普通冒険者と言われる者は数人でパーティーを組んで行動をする。

「そのはずだ、高級果実ピコの産地は！」

そうなのだ、俺はその果実を食べたくてこの村まで来たのだ。

普段は同業者組合、別名冒険者ギルドの依頼で魔物の討伐に行ったり、護衛をやったりしているがこの前割のいい仕事をして懐にかな

り余裕ができた。

この機会に休息をかねて以前から腹いっぱい食べたいと思っていたピコの実の一大生産地に来たわけなのだ。

ギルドと言うと冒険者に関わりのあるものと勘違いしている人も多いが、そもそもギルドとは同業者の人たちで作った組合で冒険者ギルド、商人ギルドや手工業ギルドなど、さらに下部組織も入れると多種多様のギルドが存在する。

その中でわりと活動が活発で、多種多様な依頼を受けることが多い冒険者ギルドは3本の指に入る大きなギルドだ。

ギルドにはあまり大きな声では言えない非合法なものもある、有名なのが盗賊ギルドだ。

他にもアサシンギルドなんてものも聞いたことがあるが、本当にあるかどうかはわからない。

それより、今はピコの実だ。

俺は村での拠点を確保しようと宿屋を探したが見当たらなかった。

通りを歩いている人に声をかけていくつか聞いてみた

宿屋が無いと言うのは正確ではなかった、10日ごとにある市場に合わせて開くのだそうだ。

しかし今日は市が終わって2日、次に宿屋が開くのが6〜7日後だ。

酒場はあるようだが、昼間は他の仕事しているとのこと。

酒場も基本的に村の男衆が定期的にドンチャン騒ぎをすることで、2〜3日に一回しか開かないらしい。

困った、高級果実ピコの実の生産地と知られているところなので、少しは旅人用の施設があると思っていたのだが。

しかし考えてみれば、ここより西に人の住んでいるところは無いと言われている。

ここまで足をのばす人はかなり限られる、どこかへの中継地だった人通りも多くなりの施設があるだろうが、ここまではずれの地域だと無いのだろう。

旅人や商人などが来た場合は村長のところにやっかいになるか、場合によってはガウスレバス家の別荘にやっかいになるらしい。

しかし今回はある人を紹介してくれた、村一番のおせっかい、じゃなくて親切なマシュリーさんをだ。

「マシュリーさんに相談すればどうにかしてくれると思うよ」

そう言われて家を教えてくれた。

マシュリーさんと言う人は言われたとおり親切な人だった。

「ちょうど宿屋が閉まったあとだからね、どうしたもんかね」

少し考えて、「ついておいで」、そういって案内してくれた。

案内されたのは村の外れにあるそれなりに大きい建物だった。

見かけは飾り気の無い建物だが、その壁は信じられないくらい平たんで見たこともないほど四角だった。

「タスクさん、いるかい？」

この家の主はタスクと言うか、そんなことを思っていると中から女の子が顔を出した。

「マシユリーさん、こんにちは、どうしたんですか？」

「なに、旅人が来られてね、タスクさんのところで宿屋代わりがでないかと思ってね」

「宿屋代わりですか、ちょっと待ってください、呼んで来ます」

少し待っていると男性がやってきた、タスクと言う人だろう。

「こんにちはマシユリーさん、宿屋代わりとかって聞きましたがどうしたんですか？」

マシユリーさんは簡単に俺達のことを説明してくれて、少しのあいだこのタスクさんのところにやっかいになることになった。

「もうすぐ暗くなってきましたので中に入って休んでください。あ！こちらの建物には空き部屋がなかったな、隣の診療所のほうに少し狭いですけど2部屋あるのでそれぞれ使ってください」

俺は疑問になって聞いた、診療所？

診療所と言うことは治癒魔導士が居るのだろうか、こんな外れの村にいるなんて珍しい。

その診療所を勝手に使うことを決めれるなんて管理人かなんかなのかな？

「どうしました？」

少し顔に出ていたのだろう、俺は驚いた顔をしていたようだ。

「すみません、治癒士がいるなんて思いもよらなかったのよ」

「そうですか？そんなたいしたものじゃないですよ」

「いえいえ、治癒士として独り立ちしている方ですから、ご自分の主人を悪く言つてはだめですよ」

タスクさんはなんか怪訝な顔をしている。

「まあともかく中にどうぞ、寝る部屋は隣の家ですけど、食事はこちらに食堂がありますのでどうぞ」

そう言われて建物の奥に入っていた。

食堂には10数人の子供達がいた、なんでこんなに子供がいるんだ？

「この子供達はなんなんですか？」

「ああ、マシユリーさんは何も言っていなかったんですね、この子供達は簡単に言つと孤児です」

そのあと色々と子供達のいきさつを聞いた、ここの治癒士殿はかなりできたひとのようだ。

「なるほど、ずいぶん立派な考えを持っているんですね、しかも考えだけでなく実践もしているなんて」

「当たり前のことだと思つんですけどね」

「さつきからタスクさんは雇い主に対する敬意が感じられないみたいだけど、何かあるんですか？」

「あー、そのなんと言つか、もしかして何か勘違いされているように感じるのですが」

「勘違い？何がです？」俺と一緒にいるサワサが視線を合わせる。

そしてタスクさんに視線をもどしてもう一度言つ「何を？」

「あー、えー」どうにも歯切れが悪い。

「どうしたんですか？」

「えっと、雇い主って、私がここの主なのですが…」

へ？タスクさんがここの主？こんなに腰の低い人が？

「え？あるじ？」この？

タスクさんが頷く。

「……これは失礼しました！申し訳ありません」俺とサワサは二人そろって頭を垂れた。

「いいですよ、他にも『ずいぶん腰が低いですね』って言われてますから」

タスクさんはそう言って俺達を咎めなかった。

マシュリーさんとの会話を聞いていると、タスクさんが治癒士なんて思いもよらなかった。

魔導士への見方が変わってしまうんだ。

サワサも少しは治癒魔術が使えるが、診療所を構える人に比べれば微々たるものだ、それでもサワサは魔導士としての矜持があるようで冒険者に比べれば少し高飛車なところがある。

しかしタスクさんにはまったくそんなところが無い。信じられなかった。

41話目 ケガ人(前書き)

ともかく投稿です!

## 41 話目 ケガ人

その後食事を終わらせ、食堂でタスクさんと話をした。

「ピコの実を腹いっぱい食べたくて来たのですが、市いち以外の日は宿屋が開いてないなんて知らなかったです」

「そうでしたか、しかし市場以外で常時開いている店ってあまり無いですよ。それに開いている店も食料や雑貨みたいな生活必需品中

心なので果物みたいなものは市場以外ではほとんど出回っていませんよ。果実は市場の開く1〜2日前に取りに行つて大事に保管していますから」

「採りに行く？ここで栽培していないのですか？」

「そのようですね、私もここに越してきて日が浅いですけど村人の話ですとピコの実って栽培が非常に難しく、自然に自生しているものを採ってくる以外に手が無いそうです」

「そうなんですか、それで一部で『幻のピコの実』って呼ばれているんだ」

「そうなんですか、そこまで珍しいものだとは思っていませんでした。たまに子供達もとつてきて食べていますから」

え？今聞き捨てなら無いことが…。

「子供が採つてきているってどういふことですか？」

「言葉の通りですよ、森のぐくぐく入り口ですけど子供達がたまに自分で採つてきておやつ代わりに食べてますよ」

「簡単に採れるんですか！？」

「簡単ではないですよ、低いところになつている果実は少ないですし、もともと森の奥にあるものですから入り口近くにはあまりありませんから」

「奥に入ればけっこうある？」

「そうらしいですよ、これも話しに聞いたことですけど森の奥に30分くらい入ったあたりからピコの木が多くなってくるらしいです。でも魔物や魔獣が多くて結構危険みたいです。村の人も必ず2人以上で行ってるって聞いたことがあります」

「そうですか、でも大丈夫です。俺達は冒険者ですから魔物退治はお手のものです」

そういつて森のどういったところに実がなっているか詳しく聞いた。しかしタスクさんはそれほど詳しくはないようだ、最低限のことを聞いて明日行ってみよう。

「おはようございます」

水場で顔を洗っていると後ろから声をかけられた。振り返ると綺麗な女性が立っていた。

「あ、おはようございます」少し平たんな声で返事をしてしまった。

誰だこの人？ものすごく綺麗な人だけど昨日は見かけなかったぞ。

「サワサ、あの人は？」隣で同じく顔を洗っているサワサに聞いてみた。

「知らないわよ、私も今朝初めて会ったんだから」

「はじめまして、セフォリアと言います」

自己紹介をしてもらい、こちらも自己紹介、話を聞くとタスクさんのところに手伝いに来ている人とのこと。

こんなに綺麗な人が手伝いに来ているなんて、タスクさん思ったよリヤルナ！

そんなことを考えながら食堂に一緒に向かった。

聞くとセフォリアさんはガウスレバス家の方だと知って驚いた。

この村に居ることが多く、大抵はタスクさんが引き取っている子供達の世話の手伝いに来ているとのことだった。

朝から夕方近くまで、晩御飯の1時間くらい前まで来ているそうだ。

朝食をとりながらタスクさんにピコの実について聞いてみた。

今回は昨日と違い具体的にどのように手に入れられるか聞いてみた。

「村の人に案内してもらったらどうですかね」

タスクさんの意見で森に詳しい人に案内してもらうことにした。

その日の夕方、村人に案内してもらって手に入れたピコの実にかじりついていた。

これだよ、これが食べたかったんだ。

収穫の秋と言うことだが、時期は少し早い。

しかし10数個採ってくる事ができた。

「いやーウマイ！」

「そんなに食べると晩御飯が入らなくなるよ」サワサに言われても関係ない。

もともとこれを食べに来たんだから。

そう思っていると村人が走って来た。

日が沈むまでもう1時間くらいだ、セフォリアさんも帰る準備をしていた。

「タスクさん！けが人です！今連れてくるので準備してください！」建物の前まで来て男性が大声で叫んだ。

声を聞いて中からタスクさんが出てきた。

「怪我ですか！」

タスクさんはこの村の治癒士なのだから患者が運ばれてくるのは当然だろう。

しかしこんなに村人と、と言うより普通の人と接している魔術師なんて見たことも聞いたことも無い。

やはりタスクさんは心の広い人だとあらためて思ってしまった。

「どんな感じですか?!」

「材木が倒れてきて足がつぶれています！」

少しすると村人に運ばれて女性が運ばれてきた。マシュリーさんだ！

「マシュリーさんだったんですか！急いで中へ！」

隣にある診療所の建物に運ばれていった。

「治療しますので入ってこないで下さい」タスクさんが皆にそう言っ  
つて扉を閉めた。

足の具合を一瞬見たが、あれではもう使い物にならないだろう。

魔獣討伐のときにあれより軽い怪我をした冒険者を見たことがあるが、その後歩くことに不自由することになり結局冒険者を引退した。

腕の立つ先輩冒険者だったが残念だった。

「これで一安心だな」

「そうだね、明日の朝には治ってるだろうからこれで帰るとしようか」

村人が一安心したようにそんな話をしている。

あれだけの怪我だぞ！安心なんてまだ出来るはず無いだろ！

「おいおい、そんな簡単に言えるような怪我じゃないぞ！」

「ん？旅人さんかい？その格好は冒険者の人だね」俺の少し強い声に対して落ち着いた声だ。

「そうだよ、今日森にピコの実を採りに案内したよ」今日森を案内してくれた人が言ってくれた。

「治癒士さんを知らないのかい？治癒士さんにかかればあんな怪我明日の朝には治ってるよ」

運んでいた村人が言ってくるが、俺だって治癒士の治療を今まで何回も見てきた。

怪我の出血だけだったら確かに止めることは出来るだろう。

しかし明日の朝には治ってるなんて、そんなことができる治癒士なんて聞いたことが無い。

「いくら治癒士だってあれほどの怪我、明日までに治せるなんてそんな聞いたことがないぞ?!」

「あんたの知ってる治癒士さんはあんまり腕が良くなかったんじゃないか? タスクさんなら大丈夫だよ」

「あんたらは治癒士の力を過信しすぎだよ」

村人との話はなんとなく平行線のようにだ。

「はあはあ…、家内が運ばれたって聞いたがどうなんだ?」

村の方から走ってきた男が診療所前まできて言ってきた。

家内といってるところからマシュリーさんの旦那なのだろう、しかしあんな怪我をしたとなると今後は大変だろう。

「ハルト、やっと来たね。今診療所の中で治療をしているところだよ。明日の朝には治ってるよ」

だから、明日までには治らないって! そんな話聞いたことがないよ。冷たいようだがあの怪我ではかなりの後遺症が残るのは確実だ。

俺だって人の不幸を望んではないが、あの怪我では無理だ。

「そうか、よかった。じゃあ俺は一息するまで待たせてもらおうとするよ。エリアスさんがどんな感じが教えてくれるだろうから」ハルトと呼ばれたマシュリーさんの旦那は、そう言って隣の子供達がいる建物に入っていく。

村人は少し話をして帰っていく。

治療中はどこで待機しているかちゃんと決まっているようだ、ハルトさんは年長の子供に話をして中に入っていた。

あんなに村人から信頼されているなんてタスクさんはすごいな。

あんなに信頼されているんなら、マシユリーさんが今後片足が動かなくなっても仕方が無いと納得してくるだろう。

そう考えて俺も中に入ろうとする。

「タスクさんに任せておけば怪我は心配ないですから、私も帰りま  
すね。明日は少し早く来ます。カシヤ年長のカシヤエリアに伝えておいてください」そ  
うセフォリアさんが俺に言って帰っていった。

セフォリアさんは貴族なんだから、治癒士の力を知ってるはずなの  
になんであんなに達観できるんだろう？

それともあんまり教育を受けていないのかな？

明日の朝、村人の落胆する顔を見なければいいな。



## 41 話目 ケガ人（後書き）

明日の朝までに投稿したいと思いますがあくまでも希望です。

42話目 なんで？(前書き)

短いですが投稿です。

## 42話目 なんで？

翌日の朝はセフォリアさんに起こされた。

昨日は診療所の建物の空いている部屋で休んだのだが、診療室を使っているということで子供達の建物で休んだのだ。

部屋が埋まっていたので食堂を仕切ってベットを持ち込んだ。

「子供達が食事しに来るので早く起きてください。宿屋じゃなくてお客さんの扱いとは言えませんが仕方ないですよ」確かに、宿屋でもないタスクさんの家にやっかいになっているのだからあまり贅沢も言えない。

「おはようございます、今起きます」眠い目をこすって俺は起きだした。

隣で寝ているサワサにも声をかけて起こした。

昨夜はこの仕切った場所で、寝る前にサワサと話しこみずいぶん遅くまで起きていたのでなかなか起きない。

もともと冒険者は危険地帯や護衛などの依頼を受けることが多く、魔導士はどうしても攻撃系が得意なのが多い。

治癒系も使えるのだがあくまでも必要最低限と言つのがほとんどだ。

いくつか系統があるようだが俺はよくわからない。機会があれば聞いてみようとは思つが。

ともかく俺より魔術に詳しいサワサの意見でも、俺と同様にマッシュリーさんの怪我を治すのは不可能だと言っていた。

あの場では口を挟まなかったが、村人の心配を煽るあおようなことはしてはいけないと思つたらしい。

まがりなりにも魔導士であるサワサと俺の言葉では、魔術の力につ

いての説明の信頼度が違うのではないかと言うことだ。

「子供達も食事に来ますし、タスクさんが8時には診療所から出てくるそうなので早めに済ましてくださいね」

俺とサワサは急いで食事を済ませた。

外から村人の声が聞こえてきた。

「マシユリーさんはどうかね?」「家に帰るための荷車を持ってきたが必要かね?」

心配で来た村人が4〜5人ほどいるようだ。

セフォリアさんと一緒に診療所の前で待っていると、言っていた時間より10分ほど早くタスクさんが出てきた。

「みなさん、おはようございます。どうしたんですか?」

子供達も待つていたので、診療所の前では全部で15人ほどの人ばかりになっている。

「一応心配で皆さん来たんですよ」セフォリアさんが返した。

「そうだよ、マシユリーさんの怪我も心配だけど、それよりタスクさんだって徹夜で治療だろ?」

他にも幾人かが声を上げる。

村の人の話を聞いていると、マシユリーさんの怪我の具合はそれほど心配していないようだ。

来た理由はマシュリーさんが怪我をした材木の持ち主、責任を感じたのだろう。

それに帰るために何か必要かもしれないと思って駆けつけた人たちだった。

一番遅れてきたのがハルトさんマシュリーさんの旦那だったのだから、けが人本人を心配しているのは居ないように感じる。

そんなことを思っていると、エリアスさんに介助されながらマシュリーさんが出てきた。

「皆さん、おはようございます」「エリアスさんだ。

「おはようさん」マシュリーさんもあとから挨拶を言ってくる。一昨日会った時より元気は無いがすっかり自分の足で立って歩いている。

その後、村人は建物に入り「持ってきたから食事にしよう」と籠を持ち上げて皆に見えるように言った。

「うちにも朝ご飯あるからそんなのいらないよ」「子供達の声が聞こえてくる。

「こら、そんなことは言うもんじゃありません。皆さんの好意に失礼をしてはいけませんよ」「セフォリアさんが羨らしいことを言っている。

「いいよいよ、まだ子供なんだから」「ゴメンナサイ」中に入っていた人たちはそんなことを話していた。

しかし俺とサワサは呆然と立ち尽くしていた。

そして頭の中では、なんで立っているんだ？なんで歩けるんだ？あんな大怪我だったら翌日に歩けるなんてありえない！そもそも治るようなものじゃない！

そしてなんで誰も不思議がらないんだ？

となりのサワサに首を向けると俺以上に呆然とした顔をしていた。

「ギフロさーん、サワサさーん、どうしたんですかー？早く中に入ってくださいーい」子供達が呼ぶ。

俺とサワサは中に入っていったが、サワサが小さな声で「なんで？」と繰り返しているのが聞こえた。



## 42話目 なんぞ？（後書き）

外からやってきた人にタスクの力の一端を見せました。

ほんの一端です、これからもこういったことは出てきます。  
ちなみに医療に関することとは限りません。

次回投稿、今日中にします。

### 43話目 疑問は深まる(前書き)

本日2度目の投稿です。

#### 43話目 疑問は深まる

村人達は先ほど、みんな帰っていった。

マシユリーさんは、タスクさんの話では2〜3日は安静にして無理をしないように、最低でも2日おきに3回は診療をするので来るよ

うにと言われていた。

そして俺達はタスクさんに詰め寄った。

最初はサワサだった。

「なんで治るんですか?!」

「なんでって、治らないほうがよかったですか?」タスクさんが返事を返す。

「そんなことは言ってます!あれだけの怪我を、あともほとんどわからないくらいに治すなんてありえません!」

「サワサ、ちょっと落ち着けよ」俺が止めに入る。

「だって!」

「まあ待て」興奮を抑えるようたしなめる。

そして俺が冷静に聞いてみる、冷静と言っているが心の中ではかなりあせっている。

早く聞きたくて仕方が無い。

「タスクさん、俺達は冒険者をしているので色々なところに足を運びます。しかしあれだけの怪我を普通に歩けるようになるまで治療できる治癒士など見たことがありません。しかも一晩でなんて一層信じられません。しかし現実には俺の目の前で実際にあった!タスクさんあなたはどこで治癒魔術を学んだのですか?そしてどうやっ

て治したんですか？」

タスクさんは少し驚いた顔をしていた、となりに控えているエリアスさんに視線を向けて何か目配せしている。

そしてエリアスさんが答えてくれた。

「私たちにはよく解らないのですが、ああいった怪我は治癒魔術で治せないのですか？」

はあ？何を言っているんだ？

「治せるなんて見たことも聞いたことも無いですよ、宮廷治癒士や教会の導師治癒士でもできないと思います」

「そうなんですか、しかしタスク様の治療が実際に治しているのは認めてくれますね」

「それはこの目で見たんですから当然です」

ここでタスクさんが声を出した。

「ちょっと待ってください、すぐ戻りますから」そういつて席を立つて部屋を出て行った。

5分もしないでタスクさんは戻ってきて「私の治療法について、あなた達がわかる範囲でお話します。いいですか？」

「ありがとうございます」「俺とサワサが声をそろえた。

「私たちの治療と言うのは、やり方さえわかって手順を間違えず、精密な調整、素早い処置が出来れば誰にでも可能なんです」

そう前置きしてタスクさんは話し始めた。

タスクさんとエリアスさんの交互に話してくれたが、はっきり言って俺にはさっぱりだった。

サワサは途中まではわかっていたようだ。しかしあきらかに後半はサッパリわからないと言った表情をしていた。

そしてサワサが最後に確認したのは「タスクさんは、今までの話を魔道具を使って手順どおりに治療していったということですか？」

「簡単に言うとそうですね」

ここまで話を聞くのに30分以上経っている。

「細胞培養と遺伝子の連結、ナノマシンによる結合と調整、細菌の除去、感染症の排除、それらを短時間で行うのはかなりの技術が必要ですけどね」

また意味のわからないことを言っているが、タスクさんは魔道具を専門に扱う魔導士だろかと見当をつけた。

「ではその魔道具を使えば、私にも同じような治療ができるのですか？」サワサがさらに聞いている。

「そうですね、できるようになりますよ。でもサワサさんは人体の構造や、細菌やウイルスなんてわかりますか？もつと簡単なところでは細胞はわかりますか？」

「イエ、わかりません。それがわからないとその魔道具は使えないのですか？」

「使えなくはないですけど、治療の効果が限定的になります。簡単にいうと私がやるほどには治すことができないと言うことです。実際にはほかにも色々知っておかないといけないことがありますからね」

「そうなんですか…」

俺とサワサはいくつか聞いてみたが、結局話の半分も理解できず部屋を出た。

「どうしましたか？タスクさんとの話は？」

セフォリアさんが廊下で声をかけてきた。

「さっぱり解りませんでした」サワサが返事をする。

「そうですね、私の病気も治してくれたのですけど説明を聞いてもわかりませんでした。でも私の病気が治ったのは事実なのでからそれでよしとしています」

「セフォリアさんは病気を患っていたのですか？」

「ええ、聞いたことはないかしら？ 貴族で皮膚病にかかっていて、10年以上も治らないという話を」

聞いたことがある、国中の治癒士に見てもらったが一向に治る気配が無く、一生人目に触れることはないだろうと言われていた貴族の令嬢の話を。

「あの話がセフォリアさんのことなんですか？」

「そうですよ」「そういつてにっこりと微笑む。

「タスクさんって俺達が思っている以上の治癒士のような」

「あら、タスクさんは治癒以外にもかなりの攻撃魔術も使えるそうですね。私も衛士の1人に聞いただけなので詳しくは知りませんが、ど、すごいらしいです」得意げな表情をして自慢しているように見える。

セフォリアさんはタスクさんが高く評価されるのが嬉しいらしい。

「！！」

治癒士としての腕は一流で、攻撃魔術も使えるなんてすごすぎる！

その後、数日滞在をしピコの実も幾度も採りに行き『もういらな  
って言うほど食べた。』

ピコの実もうまかったが、タスクさんのところで出された料理も  
よかった。

特別豪華と言うわけではないが、味付けが今まで味わったこと  
ない深みのある複雑な味だった。

そしてこの村を離れるときにタスクさんがお土産をくれた。

「塗り薬です、怪我をしたときに塗ってください。解毒効果もあ  
りますからある程度のものだったら問題ないです。それと風邪薬で  
病気になったときに飲んでください。どちらも有効期限は1年  
です」

そうやって2種類の薬をもらった。

薬というものは治癒士にかかれない庶民の物だが、タスクさんが  
くれるものなのだからそれなりに効果があるのだろう。

俺とサワサはお礼を言ってこの村を離れていった。

その後、この薬が信じられないほどの効果があり、ギルドでその薬

を手に入れるため調査することになるのは別の話である。

タスクとエリアスが部屋を出て廊下で話している様子

「ある程度説明しよう、多分わからないだろうけど。それに少しでも医療技術を話すことによって彼らにとって今後の参考になるかもしれない。たとえ一晩でも一緒に過ごした人にまったく説明しないのと言うのもなんだか後味が悪いしな」

「そうですね、少しでも医療技術と言うものに目を向けてもらえる

ようになればいいですから」

俺はこの星に『医療技術』を最低限広めたいと思っている。

一部の特権階級しか治療士の治療を受けられないなんて、最低限度の生活が出来ているとは思えないからだ。

技術である医療は知識を正確にもてば誰でもある程度できるものだ、太古の地球でも医療技術が一般化するだけでずいぶん平均寿命が延びたそうだ。

「よし、じゃあ、説明してみよう!」どこまで理解できるか不安だが。

「私もフォローしますので」エリアスが言うてくれる。

「頼む!」

俺とエリアスは部屋に戻った。



### 43 話目 疑問は深まる（後書き）

どうでしょうか？

日常の活動が、まだまだここではオーバーテクノロジーなところがあります。

仮定や結果が魔法と同様に見えます。

考えてみれば今のテレビやエアコン、普通の電話なんてものは50年も昔の人が見たら完全に魔法と違ってしまっているのではないのでしょうか？

仮にそう思わなくても、未知のものであることは間違い無いと思います。

現在の私たちも、千年や1万年先の技術を見ることができたら技術の範疇を超えて魔法のように感じるかもしれませんね。

44話目 セフォリアの驚き(前書き)

短いです。

仕事の疲れが激しく、なかなか書き進めません。

44話目 セフォリアの驚き

セフォリアinni子供達の建物、秋盛の月5日

タスク様のところにいる子供達の世話にきだしてから少し経ちます。子供達に勉強を教えているのは以前から知っていたのですが、思った以上に難しいことを教えていると改めて驚いています。

大半の子供達は勉強なんてしたことのない子ばかりです。

計算が出来ないのは当然で、文字もまったく読めません。

そういった子が多いので基本的なことを勉強している子ばかりですが、中にはそれなりの教育を受けてきた子もいます。

カシャエリアがそうです。

彼女はここでは一番の年長で、両親が亡くなるまではそれなりに勉強してきたようです。

だからなのでしょうが、彼女には他の子より難しいことを教えているようです。

先日カシャエリアから声をかけられて驚きました。

そのときのことです、

「セフォリアさん、ちょっと教えて欲しいんですけどいいですか？」  
彼女が、勉強でわからないことがあったらしく私に聞いてきたのです。

私が貴族の出だと知っているので、他の方より学問に精通している  
と思ったのでしょうか。

「なんですか？」

「はい、これなんですけど」

そういつて見せられたものは、思った以上にレベルの高いものでし  
た。

つつかえながらも思い出しながら返答したのですが、これではしば  
らくすると答えられないものになってしまうのではないのでしょうか。

カシャエリアに勉強に使ってる本を見せてらいましたが、後ろの方  
に書いてある内容はさっぱりわかりません。

200ページくらいある本でしたが、タスク様は『教科書と言っ  
たんです』と教えてくれたものです。

しかも羊皮紙でも無い物でできていて、ビックリです。

その教科書という物を使って勉強しているんですけど、まだ5分の  
1も進んでいないで、あんなに難しい内容だなんて…。

しかしタスク様が言うには『順番に勉強していけば、教科書に書か  
れている内容は理解できますよ』と言ってくれた。

最初の内容を見た限り、後ろのほうの内容が理解できるようになる  
なんて信じられないですけど、タスク様が言うのだからたぶん間違  
いないのでしょう。

「ありがとうございます」そういつてカシャエリアは食堂の机に戻っていくが、教科書の後ろのほうの内容が理解できるようになるなんて、私も教えて欲しいと思うようになってきました。

後ほどタスク様をお願いしてみよう、私もタスク様から学びたいと。

#### 44話目 セフォリアの驚き(後書き)

次回の休みが決まりました。

なので次回投稿の予定もおのずと決まってきました。

活動報告に書いておきます。

## 45 話目 呼び方

セフォリア in 子供達の建物、秋盛の月6日

昨日タスク様に私にもここでの勉強を教えてくださいとお願いしましたら、にっこり笑って了承してくれました。

「では、セフォリアお嬢様がどこまで習ってきたのか確認したいと思いますので、この問題を解いていただけますか、よろしいでしょうか？」

しばらくたつのにタスク様は私のことをお嬢様と呼ぶ、もう少し親しく呼んで欲しいのに。

「タスク様、勉強とは関係ないのですがいいでしょうか？」

「はい、なんですか？」

「私を呼ぶのにお嬢様とかって呼ばないで、『セフォリア』って呼んでください。それにタスク様は私の先生になるのですからもつと呼び捨てでかまわないのでお願いします」

タスク様は驚いた顔をしている、でも私はもつと親しく話しかけて欲しいと思っています。

ちょっと間があつてから、「しかし、私はガウスレバス家に仕えている者です、その令嬢を呼び捨てで呼ぶことはできません」

「どうしてもだめですか？」私はちょっと悲しくなつてうつむききみになつてしまった。

「はあー、では回りに人が居ないときは『セフォリアさん』と呼ぶのはいかがですか？」

「それでもお嬢様って呼ばれるよりいいです」顔を上げてタスク様に勢いよく言った。

「では、セフォリアさんよろしく願いします」

「タスク様、名前だけじゃなくて2人のときはそんなに丁寧に話さないで下さい」

「では、私にも『様』は付けなくてももらってもいいですか？」

「え？でも…」

「じゃなければ私も『お嬢様』って呼び続けますよ」

「わかりました、えーっと、タスクさん？」

「はい、それでお願いします」タスク様も笑ってくれている。

口では『タスクさん』って呼んでいるけど、心の中では『タスク様』って思ってしまうのは内緒にしておきましょう。

「それでは、問題はいいですか？」

「はい、お願いします」

私はそのあと結構な量の問題に取り組んだ。

感想は、最初の4分の1くらいはわかったのですが、そのあとはほとんど解りませんでした。

私も貴族の娘なので、それなりに勉学にはいそしんできたのですが難しいと感じました。

そして、問題数は多いのですが魔術に関する問題は思った以上に少ないと感じました。

無いわけではないのですが、私が今まで家庭教師から出された問題と比べてその比率が随分低いなと感じたのです。

タスクとエリアス、セフォリアの問題について昨日の相談内容

「エリアス、セフォリアさんに出す問題だけど、どういったものかいいかな？」

「そうですね、一応のところはカシヤに解いてもらった問題でいいと思いますけど、セフォリアさんはカシヤより教育を受けてきているはずですからもう少し増やそうかと考えています。

それと子供達と話していると解ったのですが、特殊能力、ここでは魔術でしたね、それについての問題とかもあるようです」

「そうなのか？魔術って実地のみだけじゃないのか？」

「そのようです、この星では能力のある人の比率が高いですが、そ

れでも簡単に使えると言う訳ではないようです。  
能力とそれを効率よく使うための技術と言うものが少しあるよう  
です」

「しかし、魔術の問題なんてさっぱりわかんないけどな」

「そのあたりについても、地球圏の特殊能力と照らし合わせて問題  
を作ろうと思っています。そしてこれを機会に私たちも『魔術』に  
関して本格的に調べようと考えています」

「なるほど、地球圏の事象を織り交ぜて問題を出して、セフォリア  
さんにこの星での魔術への理解度を教えてもらおうということだな」

「そうです」

魔術への理解を深めるために、セフォリアさんに協力してもらおう  
ということだった。



## 45話目 呼び方(後書き)

一 応次話も書きあがってますけど、ちょっと修正してます。

46話目 プレイン・マシンのインターフェイス（BMI）

タスクin湖の邸宅、秋終の月22日

月に一度ガウスレバス領内の村を巡回して診療するのに合わせて、

湖の邸宅に来ていた。

庭にはドラゴンのウィーデーが来ていた。

「おかえり、タスクよ」

「ただいま」俺は普通に返した。

「タスクよ、我はそなたと色々話したいと思っていたし、そなたも我に話をしてくれると以前言っていた。しかしなかなかその機会を得ることができず、気配を感じて急ぎやってきたのだ。タスクよ時間はとれるか？」

「申し訳ない、それほど時間がとれないんだ」

「そうか、残念だ」ドラゴンが少し気落ちしたのが感じられた、思った以上に楽しみにしていたんだろう。

「そんなに落ち込まないでくれよ、ちょっと試したいことがあって準備させていたことがあるんだ。そこで待っていてくれないか？」

俺はドラゴンを見上げながら言った。

「それはかまわんが」

俺は中に入ってアポロに準備の状況を確認して、エリアスにも手伝わせて機材を外に出していった。

「何をしようとしているんだ？」ウィーデーは興味深そうに聞いてくる。

「ちょっと聞きたいんだが、ウィーデーは人間の町や村を歩いたことはあるかな？または歩いてみたいと思ったことはあるかな？」

ドラゴンはちょっと笑ったようだった。

「そんなことが出来るわけなからう。もしそんなことをする機会があるとしたら、我らドラゴンと人間が争いをしている以外にありえんだらう」

すなわち人間が居なくならなにかぎり、人の町を歩くことは無いということだ。かと言って人間を追い払ったりするつもりも、その理由も無いと言っている。

「しかし、人間の町を色々見て回りたいとは思っていたこともあるぞ」

「今はどうなんだ？」

「出来ないとすでに理解しているからな、歳若いドラゴンならともかくここまで歳を重ねると考えていないぞ」

「では、それが出来るとしたらどうする？」

「はっは！出来るものならやってみたいな」

「ではやってみようじゃないか」ドラゴンは驚いた顔をしている。

種族が違いすぎると表情が解らなくなりそうなものだが、それでも俺にはドラゴンが驚いた顔をしているのがわかった。

「できるのか？」好奇心満々で聞いてくる。

「正確にはちよつと違つがやってみたいことがあつてな、これは本来は体の不自由な人用ひとように開発されたものなんだが、今までウィーデイーからサンプルとして観測していた脳波から、これが使えらんじやないかと思つたんだよ」

「？我には今ひとつ解らないのだが、どういうことだ？」

「うーん、なんとつうか、自分の感覚を人型のものに移して自分の体であるかのように操作すると言つ事だな」

本来はベットから動くこともできないような人のために開発されたもので、人間の脳波を使ってコントロールして人型マシンを動かすと言つことだ。

そのさい、その人型マシンが見たり聞いたりしたことが脳波に変換されてベットに寝ている人間にフィードバックされるのだ。

これを使えば、寝たきりの人があたかも自分自身であちこちに行けるようになったと感ずることができるとだ。

ウィーデイーはまだ解らないようだ。

「もう少しこの流儀で言つと、自分の意識を人型のものに憑依させるようなものだね」

「なるほど、なんとなくわかつたぞ。それでそれを我に使つてみたいと言つことか？」

「そうなんだ、両耳の上の辺りと後頭部のあたりにこれを付ければいいはずだ。つけてもらえるか？」

「わかった、楽しそうだな。たのむ」

そういつてウィーデーは頭を地面に擦り付けるように楽な姿勢をとってくれた。

機材を取り付け早速装置を動かした。

「これは目をつぶっているとこの人形の見たものや触ったものを感じる事ができる、目を開けると自分の体に戻る。いいか？」

そういつて準備していた人型マシンを指差しながら説明し、部下に装置を付けさせていつた。

「わかった、試してみよう」そういつてウィーデーは目を閉じ数秒間待つた。

10秒ほどだろうか、人型の人形、この場合は端末といつていいだろうが立ち上がった。

「これはいい、人間の目線とは随分低いものなのだな。しかしこれはいいい！驚きだ！」人型人形の口から出た言葉はドラゴンの感想だ。

「自分の本体を見てみるといい」

そういつと人型に憑依したウィーデーは自分の本体に目線を向けた。

「いやー！自分自身を見上げることがあるなんて思いもよらなかった」

「じゃあ、本体の目を開けてくれ、数秒で戻れるはずだ」

ウィーデーは自分自身の目を開けていくと、人型人形は急に崩れ落ちた。

「おお！これはすごいぞ！」今の気持ちを本体でも言ってきた。

「本体に戻るときは人形のほうをどこかに座らせるなり、寝かせるなりしてからがいいな」

「そうだな、初めてのことなので気がつかなかった。それでわざわざこのような魔道具の準備をしてくれたのは、我にこれを使って人間の町を見せてくれると言うことなのか？」

「そうなんだ、ドラゴンってここでは人間から随分大事にされているようだけど、人間のこことってあんまり知らないんじゃないかと思ってるね。それで案内するから一緒に見て歩かないかと考えたんだ。どうだろうか？」

「ははははっ！それは嬉しい、今までに体験したことのないことだ。こちらからお願いしたいくらいだ。それにタスクと話をする時間も取れるしな」

その後ウィーデーにいくつか注意事項の話をして、巡回する村と一緒にについて来ることになった。

ついて来るといっても、本体はここにいるので目を開けると数瞬で意識はここに戻るのだけねど。

46 話目 プレイン・マシン・インターフェイス (BMI) (後書き)

感想よろしくお願いします。

## 47話目 依頼（前書き）

ちよつとだけ書き溜めしていたものを投稿します。

47 話目 依頼

タスクi n n子供達の家の前、  
秋終の月29日

湖の邸宅から直接街道に出られる道を作っておいたので、そこを通過してガウスレバス市に向かい、そのまま村々を回っていった。

湖へ直接繋がる道は、普段はカモフラージュしてあるので人が間違っただけ踏み込んでくることはまず無いだろう。

定期巡回診療は順調に済み、ドラゴンのウィーデーと一緒に村に戻ってきた。

村々を回っている間にウィーデーは、『タスクはかなり腕の立つ魔導士だ』と思うようになったようだ。

それと同時に『魔導士以上の力を持っているんじゃないか?』という疑問も持ったようだ。

ドラゴンにすべてを話すこともできず、正直なところ誤魔化すのに苦労した。

しかしそれ以上にウィーデーは、人間の町の中を歩いていると言ふことに興奮しっぱなしだった。

「いやはや、楽しいものだったな、人間の町と言ふのは」

ウィーデーは西村に帰ってきて感想を言っていた。

正確には湖のほとりに住んでいるので帰ってきたとは違っただが、生活圏に戻るとそっぴんという気になるのだろう。

子供達の建物の前で話しこんでいると中からカシャが出てきた。

「おかえりなさいタスクさん、エリアスさん」一番の年長だけあって落ち着いた感じで迎えてくれた。

「ただいま、何か変わったことはあったかな？」

「いえ、特にありません。タスクさんそちらの方は？」

ウィーディーに視線を向けて聞いてくる。

「ああ、こちらはウィーディーさんと言う。少し前に知り合っ一緒に村を回ってもらっていたんだよ」俺は簡単に紹介をした。

「そうですか、ウィーディーさん、カシャエリアと言います、よろしくお願ひします」

カシャはしっかりと挨拶をする。

「よろしく、ウィーディーです」ウィーディーも微笑みながら丁寧に返した。

「タスクさん、セフォリアさんと呼んできますね」

そういつて中に入っていた。

「しっかり挨拶のできる良い子だな」ウィーディーがカシャを褒めてくれる。

俺はにっこり微笑んで笑顔を返した。

巡回診療から帰ってきた日の夕方、マシュリーさんがやってきた。

「タスクさん、相談があるんだけどいいかい？」

いつもより真剣な感じが伝わってくる。

マシュリーさんを食堂に案内し、そこで話を聞くことにした。

「どうしたんですか？」

「相談なんだがね、実は……」そこまで言ったところでセフォリアさんとエリアスが部屋に入ってきた。

カシャが、2人にマシュリーさんが来たことを伝えたのだろう。

「「こんにちは、マシュリーさん」「2人がいつものように挨拶をする。」

「ああ、こんにちは」「マシュリーさんは、2人にも聞いてもらおうつもりだろう、「一緒に聞いてくれるかい？」と言ってくる。」

2人も席について話を聞くことになった。

「タスクさんはこの前まで行商人をしていただろ、そこで頼みがあるんだけどいいかい？」

頼みと言われても何をやったらいいのかわからないので返事のしようも無い。

「できることでしたら力になりますけど、ともかくどうしたんですか？」

「そうだよ、順番に話すとするよ」

そういつて順序だてて話してくれた。

話というのは、冬のあいだの食料についてだった。

西村は当然ながら農作物の生産を主とする農業の村だ。

他に狩猟などもあるが極わずかである。

そして今年の農作物のできればえなのだが、不作ではないが村人全員が冬を乗り切るには若干少ないだろうということだった。

税として納める分や、村に必要な共同物を購入するとどうやっても少し足りなさそうだ。

いつもは村人数人で買出しに出たり、村に来る行商人から足りない分を購入するのだが、どうも普通より高く売りつけられているんじゃないかと感じられるようだ。

そこで村人の一員になったタスクに、行商人をしていたときのつてを使って食料の仕入れをしてもらえないかと言うことだった。

タスクとしてもやってあげたいと思ったのだが、問題があった。

それは実際には『この地でのツテはまったく無い』と言うことだった。

行商人と称して最初は行動していたが、実際には宇宙艦隊の司令である。

「どうだろうか、お願いできないかね？」

力になってあげたいけどどうしたものか、艦隊の食料を少し供出し  
ようか、しかしこの食材と少し違うからダメだろうか？どうした  
ものだろう。

俺が難しい顔をしていると、

「やっぱりダメかい、ダメなら仕方ないね、無理にお願いしてもな  
んだから…」

「イヤ！大丈夫です、任せてください。どうにかしましょう」「マシ  
ユリーさんの困っている感じに思わず返事をしてしまった。

「そうかい！そう言ってもらえれば助かるよ。タスクさん頼むよ」

マシユリーさんは感謝の言葉を返してくれるが、とっさにしてしま  
った返事をどうしようか考えなければいけなくなってしまうた。



## 47話目 依頼（後書き）

話の展開をまた考え中。

どついう順番にしようかまた悩んでいます。

子供達中心の話も投稿したいと考えているけどさてどつしようか、  
それともセフォリアの話？エリアスの話？さてどつしましょうかね。

感想などありましたらよろしく願ひします。

## 48話目 試食会(前書き)

いろいろ考えることがあって、悩んでいます。がとりあえず投稿。

## 48話目 試食会

タスクi n n子供達の建物、食堂にて。 冬始の月5日。 夕方

困っていた言葉を聞いて、とっさに返事をしてしまった食べ物仕入れだが、  
どうしようか悩んだ結果、安く仕入れられる代わりにちょっと目にし

ない物になってしまったと言う少しばかり苦しい言い訳で艦隊の食料を少し供出することにした。

村人の中には、『目にしない食品』と言うことで不安になってしまった人もいて、それだったら試食会を開いてみようとすることになった。

多くの村人に食べてもらおうと言う事で、食堂と廊下にバイキング形式で用意をした。

名目上、仕入れてきた食材だけで料理したと言うことにしている。

「みなさん、用意しましたので自由に取って食べてください」

村人の5分の1ほどが来てくれたようだ、建物に入りきれない人もいるほどだ。

バイキング形式で用意した物には、から揚げ、パスタ、煮込みハンバーグ、グラタン、クロワッサン、ピラフ、ケーキ、コーンポタージュ等々、全部で15種類ほど。

全部地球圏の料理だ。

まさかこれほどの人数が来るとは思わなかったので、1人が食べられる量は思ったほど多くなさそうだ。

しかし口に入れた美味しさには、誰もかれも満足していた。

「こんな美味しいのは食べたことがない」「目にしないって言

っても、料理したらぜんぜんわからんな」「食材でどうやってつくるの?」「料理の仕方って?」「もつと無いの?」

意見は色々出たが全員に好評だった。

そしてその場に来ていた村人が他に感じたのが、タスクが引きとっている子供達が勉強をしているということだった。

しかも思っていた以上に難しそうなことをだ。

「タスクさん、ちょっといいかい?」マシュリーさんが声をかけてきた。

「どうですか?おいしいですか?」

「ああ、思ったた以上においしいよ。それより聞きたいんだけど、ここで教えている勉強って結構難しいことまでやってるんじゃないかい?」

少し驚いた顔と好奇心が感じられる表情だ。

タスクが勉強を教えているのは知っていたが、思った以上に難しそうだ。

「そうですか?そういえばそうかもかもしれませんね。このあたりではちょっと難しいところまで踏み込んでいるかもしれないね」

「そうかい…」

マシュリーさんは考え始めた。20秒ほど下を向き、急に黙り込んでどうしたのかと声をかけた。

「どうしたんですか？」

「タスクさん、村の子供達にも勉強を教えてもらえないかい!？」

「へ? ああ、別にいいですけど、急にどうしたんですか？」

「食堂かね、そこで壁に貼ってある物を見たら、中央でたまたま見たことのあるやつに似ていたんだよ。しかも確かかなりの年数が経つてから習う内容のものにしていたんだよ。そんな難しそうなことをこんな村で教えてくれる人がいるんだったらぜひとも村の子供達にも教えて欲しいんだよ。なに! 最初から難しいことを教えてやってくれなんて言わないよ、最初から順番に教えてくれて才能のありそうな子に難しいことを教えてくれればいいからさ」

あとになって聞いたのだが、もう100年近く前にこの村から中央の役人に出世した人が居て、この村のピコの実を帝国中に広めてくれた。

そしてそれから数年間はピコの実だけでなく普通の農作物も、ガウスレバスのコバタ村産という名でそれなりに高値で取引されるようになったということだ。

勉強ができるのが必ずしも出世に結びつかないことは知っているが、それでも出来ないよりは出来る方が有利であることをこの村の人々は理解していた。

「それに、ちょうどこれから冬になるからどうしても時間が余っちゃうんだよ。春まで畑仕事ができないからね」

そのあと、他の村人も色々なことを話をしていくつも提案を受けていった。

「雑貨や食料を扱う、毎日開いている店をやってくれないかね」「村の中央からここまでの道を綺麗にしないかい」「ここは中に入っても結構明るいけど、みんなの家にもできないかね?」「トイレがぜんぜん臭くないけど俺のところもできるかい?」e t c . . .

やっぱり皆感じるところがあつたのだろう、タスクのところの良さそうなところを『私(俺)の家にもできないだろうか』と一斉に言うてきたのだ。

タスクとしては衛生面や夜間の暗闇の危険など気になっていたので、みんなを前にして言った。

「今日は試食会に来てもらってありがとうございます。ずっと皆さんの話を聞いていましたが食材の仕入れについては問題無いようですね。では予定通り食料の仕入れを致します。それと他にも色々話を聞きました」

皆それぞれ希望の話をしたので『ウンウン』とうなずきながらタスクの言葉に耳を傾けている。

「この場ですべてに返事をすることはできませんが、皆さんの協力や理解があれば出来るだけのことはしたいと考えています。できればこの後何人が残っていたら詳しく話をしたいと思うんですけどどうですか?」

そう言つて村人にいくつかのグループに分かれてもらつて、その中から1人代表で来てもらつて話をしようと考えた。

村が小さいと言ってもすべての人が一箇所に集中しているわけでは無く、村の中央から西にあたるどころ、北にあたるどころ、南西にあたるどころと村の中でもいくつかの区域に分かれている。

それぞれの区画から代表者を選出してもらって、そうすればすべての人にお伺いを立てなくても効率よく色々決められる。

まあ、民主主義の初歩中の初歩と言ったところか。区域の代議員と  
言う感じだ。

結局西の区域、北の区域、南西の区域、村の中央、一番の年長者で  
村長役、それにタスクの全部で6人で協議をすることになった。

何回か協議を繰り返して、この冬の間、畑仕事ができない期間に村の  
整備をしていこうとなった。

最初の協議から5日がたっていた。



48話目 試食会（後書き）

なんかいろんなことがイヤになりつつあります。

#### 49 話目 討伐での…(前書き)

誤字脱字等につきましては転勤後時間を作って行います。

申し訳ありません。

49話目 討伐での…

ドマスケルニア帝国、帝都ドマスケルニア。冒険者ギルド総轄、冬  
始の月7日

俺はギフロ、少し前に冒険者ギルドの大きな依頼でゴブの野郎ども

の討伐に参加した。

やつらは個々ではたいして怖い存在ではないが、集団で群れるとそれなりに脅威になる。

身長は50〜60センチほどの2足歩行で、中にはどこで手に入れたかわからないショートソードで武装しているものもいる、大概是小さな木の棒（枝のレベルだな）を持って襲ってくる。

農村では害獣として扱われていて、数が多ければ農作物へも影響が出てくる。

単に農作物を荒らすだけでなく、その農作物に病気をうつすこともあるのだ。

多少の病気は植物を丈夫にするのに役立つが、度を越えると枯れてしまつて収穫ができなくなつてしまう。

そんな訳で、村の共同依頼と言つてことで討伐の依頼があつたわけだ。冒険者ギルドは基本方針として、農業関係の依頼は特段の事情が無い限り格安で受けるといふのがある。

昔、農村の依頼をおざなりにしたために、国全体が食料難に陥つたことがあつたとかなかつたとか。

なにせ昔のことなので真偽のほどは不明である。

ギルドとしても、依頼の多い郊外や村々の依頼は信頼を得るのに欠かせないものだ。

ゴブの討伐は慣れている者だったらそれほど難しくは無く、腕の立つのが3〜4人以上であたれば、ゆうに50匹以上を相手に出来るだろう。

ただ今回の厄介なところは、その数が半端無いほど大量だということだ。

確認されているだけで、1000匹を超えているだろう。

もうそれは数そのものが害になりかねない、それだけの数を維持するだけで回りにある食べられるものが根こそぎ無くなってしまう。

春までには一帯が植物の無い丸裸になっているだろう。

討伐は朝から始めて、夕方にはほぼ終わらせることができた。

それはそうだろう、全部で50人近い冒険者が参加したのだから。

まあ、腕の立つのもいれば初心者もいるけどな。

特に問題も無く終われるかと思ったのだが、そうはいかなかった。

けが人がでたのだ。

まだ新米冒険者でギルドに登録して1ヶ月もたっていないやつらだった。

終わり近くなり油断しているところを襲われ、どうにか撃退したが5人の者が切りつけられた。

油断大敵、5人のうち2人の怪我が深く、しかも毒があつた。

ゴブが毒を使うなど聞いたことが無い。

冒険者の中には治癒魔術を使える者もいたが、全員魔力が切れかけていて、おまけに毒についてはまったくのお手上げだったのだ。

毒に侵された奴等を見ていると徐々に弱っていくのがわかる。

経験上、あんな症状だともたないだろう。

小さな村なので治癒士など居るわけもなく、かといって中央まで連れていっても間に合わないだろう。

戻ってきた冒険者仲間達で悩んでいた。

隣にいるサワサも「魔力がほとんど無くてゴメンナサイ」と言っている。

「そういえば、タスクさんからもらった塗り薬ってどうしたの？毒にどれだけ効くかわからないけど気休めくらいにはならないかな？」

そういえばタスクさんから薬を貰ったんだっけ、あんなに強そうな

毒には効かないだろうけど少しでもラクにできないだろうか？

「荷物の中にあつたはずだから、探してくる」

そこまで話していると一緒に来ている冒険者から声をかけられた。

「どうしたんだ？何か治す手があるのか？」

「いやなに、以前毒にも効くって傷薬を貰ったんでな、少しでもやつらの苦しみを和らげられないかと思つてな」

「そうか、あんたらも解つてるか、やつらはもう明日の朝までもたんだろうつてことを。少しでも苦しみを和らげてやりたいもんな」

後ろからも声をかけられた、「あんな毒を治せるのなんて解毒魔術以外ないからな、その解毒魔術を使えるヤツが居ないんだからどうしようもないな…」

「そうだよな、どうしようも無い…、薬探してくるよ」

「薬か…、同じ冒険者として薬みたいな安っぽい物じゃなくて、しっかりした治療をしてあげたかったな」

俺は薬を探してきて、怪我をした奴等が寝かされている大型テントに向かった。

中ではまだ苦しみながらも2人は意識があつた、残りの3人も治療を受けて並んで寝かされていた。

「旅先で出会った腕の立つ治療士からもらった薬だ、きつと効くだろう」そう言って治療に当たっている人に渡した。

治療に当たっている人も『たぶん助からないだろう』と感じている。

そして渡された薬も『気休め程度だな』そう感じているだろう。

ギルドから派遣されている依頼見届け人は「わかりました、使わせてもらいます」

そう言って受け取った。

外に出ると討伐に出ていた最終組が帰ってきていて怪我をした奴等の話を聞いていた。

今夜は皆でしんみり酒を飲むことになるだろう。

誰でも最初は新人冒険者だ。

そしてその新人時代をどうにか生き残り今に至る、そして今夜その新人の2人が命を落とすだろう。

もしかしたら自分達がそうなっていたかもしれないのだ。

最終局面になり、「ここまで来れば古参のものに任せて先に戻って夕飯の仕度をしておいてくれ」「うまいのを用意してくれよ」「楽しみにしているぞ」そう言って新人を先に戻したのだ。

良かれと思ってしたことが、かえって仇になってしまった。

本当は責任など無いのだが、それでも『もしかしたら一緒に最後までいればこんなことにはならなかったかもしれない』と考えてしま  
う。

今夜は長い夜になりそうだ。

#### 49 話目 討伐での…(後書き)

感想等ありましたらお願いします。

誤字脱字等につきましては、転勤後一息ついたところでやりたいと思っておりますので、修正はご容赦ください。

## 50話目 回復そして取り調べ(前書き)

日にちはまたぎましたが、前回の投稿から6〜7時間しかたっていない  
ません。

気分的には連続投稿です。

前回短かったのは、連続投稿するために短かっただいえます。

まあ、自分の勝手な思い込みなんですけどね。

50話目 回復そして取り調べ

ドマスケルニア帝国、帝都ドマスケルニア。冒険者ギルド総轄、冬  
始の月8日

翌日の朝、時間は早い冒険者達はノロノロと起きだした。

そこに依頼見届け人が走ってきた。

そして全員に聞こえるように大声で言った。

「大変です！2人が大変です！」

寝ていた者も起きだした。

「そんなに大声を出さなくてもいいじゃないか、亡くなった者を静かに送ろうじゃないか」冒険者の中では年長にあたる男が言った。

「誰が死んだんです！」

「そりゃあ、昨日の2人が……勝手に殺さないで下さい！！回復しましたよ！」

そこまで聞いて寝ぼけていた者も一気に目が覚めたようだ。

「……そんなバカな！！！！」多くの声が重なった。

朝食時には昨日毒にやられた2人がやってきた。

ばらばらに食べているが、それなりに集まって摂っている。

「皆さん、心配をかけました。この通り元気になりました」「なりました」2人が同時に声を発した。

それぞればらばらに食べているところから、何人もが2人のところにやってきてもみくちやにされた。

「なんで治るんだよ!」「あんなに心配したのにもつたいねえ」「信じられない奴等だな」「死んだときの叫び声まで考えていたのに無駄になっちまったじゃないか」などと言い方はまちまちだが全員無事治ったことを喜んでいた。

「そんな風に言わなくてもいいじゃないですか」「もつと素直に喜んでくださいよ」2人は回りの先輩冒険者に返していた。

そして怪我の具合を見せてくれと言ったことから、さらに驚きの声が上がった。

「なんで傷跡がほとんどないんだ?」「おれの方が傷が残ってるじゃないか!」「どれどれ?こりゃあスゲエ!怪我のあとが綺麗じゃないか!」

「そうなんですよ、傷が綺麗に治っていて、まだちょっとひっぱる感じがあるけどほとんど痛みは無いんですよ」

「俺もそうなんですよ、俺なんか痛みもあんまり無いんだよ」

「なんだよ、そりゃ、2人ともようは同じってことじゃねえか」

「「そうか」「爆笑の渦に包まれた。」

そんな中、俺は依頼見届け人に「ちょっといいですか」と言われて大型テントについていった。

サワサも声をかけられ一緒だ。

中に入り依頼見届け人は昨日の彼らの様子を話し出した。

「昨日薬をもらってから、すぐに使ったんです。5時間くらいしてでしょうか患者から声が聞こえなくなり、いよいよ体力の限界になり、声も出なくなっただかと思っただんです」

それはそうだろう、俺もそんな状況を見たことがある。

「でもよく見てみると寝息が穏やかになったような感じなんです。助かるかもしれないと思って毒を受けた部分の包帯を交換しようとする」

「「すると?」「」

相手が頭を乗り出すような感じで話しかけてくるので、思わず俺達も顔を乗り出すような感じで頭を突き合わせた。

「怪我が治ってるんです」

「治ってる？」

「イヤ、ちよつと違いますね。隣で寝ていた毒を受けていない患者より怪我が治っていたと言えはいいでしょうか」

「イヤ、そんなことってありますか？」俺が疑問を素直にぶつける。

「普通ならありえませんが、そこで考えたんです。毒を受けた人とそうじゃ無い人との違いは何かって。そう考えるとギフロさん、あなたからもらった塗り薬を使ったか使わなかったかだけなんです」

「そうなの？」

「そうなんです、それ以外の治療の違いは何も無いんですよ」

そのあと、彼は俺からもらって残っている薬を、怪我を負ったただけの患者にも使ってみたそうだ。

そうすると、魔法を使ったときほど短時間ではないが、10センチほどの切り傷だったら2時間もしないで治ってしまったそうだ。

さらに小さな傷だったら、魔法の2〜3倍ほどの時間で傷が解らなくなるくらいに治ってしまった。

「あんなすごい薬は見たことも聞いたことがないんです！どこで手に入れたんですか？！腕の立つ治癒士って言ってましたけど誰ですか？！どうやって作るんですか？！」

依頼見届け人は俺達2人に詰め寄った。

「あの薬がもつとあれば、冒険者の活動が一変します。いや！それだけじゃありませんみんなの生活もずつと変わります！ぜひ教えてください」

あまりの力強さにサワサがおずおずと返事をする。

「あの〜、あれはもらい物でして、彼以外は作れないんじゃないかと…」

そこから依頼見届け人の俺達2人への詰め寄り方は半端なかった。

最後には「わかりました、今度紹介しますから」ということに落ち着いた。

サワサなんて途中で泣く一歩手前までいったらろう。

「絶対ですよ、総轄にあなた達のこと漏らさず報告しますので、逃げられると思わないで下さいね」

最後はそう言われてしまった。

といった訳で、今は『薬に関する約束』を果たすために冒険者ギルド総轄に来ている。

冒険者ギルド全体のトップ。頭領に会う為、あの子の依頼見届け人に案内された部屋だ。

「ザウバから聞いたのだが、信じられないほど効く薬をもっているらしいな」

頭領は依頼見届け人を見やりながらそう切り出してきた。依頼見届け人の名前はザウバと言うんだ。

頭領は50歳に届こうかと言う年齢に見える。昔は冒険者だったのだらう傷跡があちこちに見える。

年配らしい落ち着いた声だ。

「そうなんです、この前の討伐のときに使ったら信じられないほどの効きでした」

「ザウバには聞いてないぞ」

「申し訳ありません…」小さな声が返ってくる。

「で、どうなんだ？」

ちゃんとした報告がされているのだろう、隠すこともないので普通に話すことにした。

「あれは、ガウスレバス領のコバタ村で貰った物でして、そこにいる治癒士からもらいました」サワサが先に話し始めた。

「そうなんです！俺がピコの実を食べたくて行ったんですけど、そこでもらったんですよ」

「ピコの実は関係ないでしょ！」サワサに怒られた。

「それで、ガウスレバスにいる治癒士の名前はなんと言っているのかな？」

「はい、タスクさんと言う方で、ガウスレバス家に仕えているようです」

その後は知っている範囲で頭領に話をした。

「実際のところどれくらい効くんだろうか？」そう言って頭領はザ

ウバに目に見えない速さで切りつけた。

「「あ!」」

「頭領!何するんですか!」

「いやなに、どれくらい効くのか見てみたいと思ってな。薬を使ってみてくれ」

「それにしたって、結構血が出ちゃってるじゃないですかー」

そう言われて俺は薬を取り出してザウバに手渡した。

傷は2センチほどの切り傷で、血がドクドクと出ている。

傷は小さいがそれなりに出血がある。押さえておけば1時間ほどで止まるだろうという感じだ。

塗って数瞬の間があったが、そこから徐々に血が止まり傷口が塞がっていった。

治癒魔術に比べれば明らかに時間はかかっているが、それでも目の前で傷が治っていくのがわかる早さだ。

「これはすごいな、傷口が大きくても効果は変わらないのか?」

「そうですね、もう少し時間はかかるようですがそれでもかなりの効き目です」ザウバが以前の様子を説明する。

「治癒士にかからなくとも傷がこれほどの速さで治るとは信じられ

ないな」

「頭領！それだけじゃありません！毒にも効くんですよ」

「そうだったな、傷だけじゃなく毒にも効くなど尚更信じられんな」

そこから頭領は考え込みはじめた。

「頭領、どうしたんですか？」ザウバが声をかける。

「よし！そのタスクと言う治癒士のもとへは俺が行こう。これだけのものを他のギルドに取られたら重大な損失だ。なんとしても治癒士をこちらに引き入れなければいかん！」

冒険者ギルドの頭領みずからガウスレバス領へ出向くつもりのようにだ。

「早いほうがいいな、ザウバ！明日には発つぞ！ガウスレバス領までの行程を調べておくように、頼むぞ」

「わかりました、準備いたします」

話はここまですなつた。

あんなに効き目がいいなんて思いもしなかったけど、タスクさんてホントにすごい人なんだな。

あらためて感心してしまうギフロであった。



## 51話目 大気圏内での戦闘（前書き）

活動報告には間違つて50話と書いてしまっていました。  
申し訳ありません。

11日中に投稿できました。  
もっと早くしたかったのですが日中思った以上に忙しくこんな時間になりました。

誤字脱字等につきましては転勤後時間を作つてやります。  
ご指摘はどんどんしていただきたいと思います。  
修正にはしばらくかかること、申し訳ありません。

次話投稿につきましては、活動報告にできるだけ書きたいと思つて  
ます。

## 51話目 大気圏内での戦闘

ムーン3、内部空間、冬始の月9日早朝

ロプスは焦<sup>あせ</sup>っていた、以前捕獲したミニ宇宙生物が変化を<sup>あせ</sup>しだしたからだ。

今まで特に変化も無く、拘束するために必要なエネルギー量も正確にわかり余裕を持ってその3倍のエネルギー量で動きを封じていた。

しかし、早朝から宇宙生物が変化しだした。

今ではその変化も終わり、全長が4倍ほどの大きさに変化し、保持しているエネルギー量も格段に増えている。

最初に現れたものとはほぼ似たような大きさだ。

エネルギー拘束を力づくで外し、内部空間にある兵器工場を破壊しながら縦横無尽に飛び回っている。

変化が起きはじめてからすぐに司令には報告を入れ、『最悪の場合

は破壊してもかまわない』と命令を受けた。

出来ることなら再度拘束したいが、ムーン3内部に作った空洞内ではできそうも無い。

大掛かりなエネルギーを使つての捕獲作戦では、ムーン3の形がブルーマーブル星からもわかるほど変化してしまうからだ。

ちなみに現在ロプス自体は光学迷彩を併用しながら、ブルーマーブル星から死角になるようムーン3の影に隠れている。

内部での捕獲は無理と判断し、外に出てくるのを待つて捕獲することにしたロプスは出てくるであろう地点に艦艇を配置した。

待つこと10分、宇宙生物は予想に反した形で出てきた。

短距離ワープだ！

追い詰められた宇宙生物は普通では考えられない方法で出てきたのだ。

内部の空間にはワープするのに阻害するエネルギーもあり、場合によってはワープできずに自身の内部から破裂してしまう可能性があるからだ。

本能でそのあたりの危険性は感じていたはずだが、追い詰められイチかバチかの賭けに出たんじゃないだろうか。

内部から飛び出した宇宙生物は、ムーン3とブルーマーブル星の間にワープアウトした。

あいだには他の衛星が無く、ブルーマーブル星から丸見えの状態になっている。

地表は今昼になるところなのでムーン3は『昼間の月』と言った感じにしか見えない。

宇宙生物はまだ小さな点にも見えない状態だが、すぐに黒い点に見えるようになるだろう。

宇宙生物は一気に加速してブルーマーブル星に向かった。

タスキin湖の邸宅、冬始の月9日昼前

ロプスから宇宙生物に関する報告を受け、指示を出しそのあと緊急事態に備えるために湖の邸宅まで戻ってきた。

応接室にあるスクリーンに状況を表示しリアルタイムで見っていたが、こちらの予想に反した方法で宇宙生物が出てきた。

「まずい！」俺は思わず声を上げてしまった。

「ロプス！どういうことだ?!」急いで問いかけた。

「はい、イチかバチかの賭けに出たようです。運よく内部から破裂することなくワープアウトしました」

「なんてこった！」

俺は一瞬考えたが、『考えるより行動しないと今はダメだ、時間が無い。まずはロプスへ行こう』そう結論を出した。

「ロプス、そちらに行くから座標計算を至急頼む。宇宙空間に放り出さないよう頼むぞ」

5分後にはロプス艦内に転送した。

「司令、どうしますか？」

「まず、星に被害を与えずに宇宙生物のみを破壊できる攻撃方法はあるか？」

俺がロプスに確認をする。

「宇宙生物のみを破壊できる攻撃方法は現状ありません。破壊できる攻撃方法ですとブルーマール星にも確実に被害が及びます」

「湖の邸宅にある防御シールド発生装置で防ぐことはできないか？」

「はい、あれは宇宙生物から出るエネルギー砲に対処するための性格が強く宇宙生物の質量そのものについては、エネルギーが不足しています」

「そうか、では仕方ないな。宇宙生物は大気圏内での動きはどれほどになる？移動速度なんかだが」

「はい、大気中での速度は音速も出せないはずです」

「わかった、では大気圏内に降りたらこちららも艦艇を数隻緊急降下させてしとめよう」

「わかりました」

「包囲して確実に倒せ、それと惑星に被害が起きないように気をつけるよ」

「了解しました」

宇宙生物は大気圏突入のための計算をしているわけではないので、地表に降りることはできずに海上に降下した。

しかも、360度数数百キロにわたり海のと真ん中だ。

海面まで150メートルの高さまで降下し、回りを索敵し一番近い

陸地に向かって移動し始めた。

大海原の真ん中に浮かんでいる巨大生物は明らかに異様だ。

時折映画さながらの『怪獣の鳴き声』が聞こえてくる。

巨大生物の動きが止まった。そして上を見上げるような仕草をしたような気がした。

その直後、東西南北の4方に高さ100メートルに届くんじやないかという巨大な水しぶきが上がった。

巨大生物からは、一番近いところでも5キロ以上離れている。

「司令、包囲できました」大気圏外にいるロプス艦内で、俺はろぶすの報告を受けた。

「わかった、攻撃開始、質量兵器は使うなよ」

「了解」

海中まで一気に降下した艦艇から、宇宙生物に向けて高出力のエネルギー砲が発射された。

一瞬後斜め下から4本の光の線によって貫かれた。

遠目には一条の光といった感じだが、実際には直径3メートル以上にもなるエネルギー砲だ。

「G y a a a a a a a a -」怪獣そのものの鳴き声が響き渡ったが、

誰も聞くものは居なかった。

80メートルにも及ぶ巨体は徐々に加速しながら落ちていった、最後は海の中に轟音と共に没した。

「迎撃艦艇に残骸の回収を指示、漏らさず回収しろよ」俺は事後処理についての指示をいくつかだした。

## 52話目 光の線（前書き）

引越し準備のあいだをぬつての投稿です。

誤字などの修正は引越し後時間を作って行い予定です。

とりあえずは話の展開だけでもと言う投稿です。

52 話目 光の線

冬始の月9日昼前

ドマスケルニア帝国、一花乱栄永宮（皇帝の住い、読み方は各自に任せます）の庭園に出ていた皇帝が空に走る1本の光を見つけた。

そして視線を落とすともう1本の光が見えた。

「なんだあれは？」空を見上げながら小さな声で言った。

一緒に庭園にいる宰相も空を見上げた。

「？なんででしょうか？」

皇帝と宰相の行動を見て、警備に当たっている衛士も同じ方向を見上げた。

しかしそのときにはすでに光の線は消えていた。

シエフエイルア in 帝国中央、学院内の庭

シエフエイルアはそのとき、友達と中庭で少し早い昼食をとっていた。

少し大きな伸びをしようと上を見ると、1本の光り。

「なに？あれ？」

「ん？なに？」一緒にいる友達がシェフエイルアを見た後に視線を追って空を見上げる。

ほんの少しの時間差だったのだが、そのときにはすでに光は消えていた。

「なんかあつたの？」

「ん、今の見えなかった？」

「うん、なんだつたの？」

「光の線が見えたんだけど…」

その日は帝国のあちこちで光の線が見えた。

遮蔽物が無ければ帝国のほぼ半分の面積の地域で見ることが出来ただろう。

多くの人が光の線を目撃したが、大多数の人は気づくことはなかった。

ドマスケルニア帝国、帝都ドマスケルニア。冒険者ギルド頭領、冬  
始の月9日午後

「それではサウバ、あとを頼むぞ」

「わかりました頭領、あとは任せてください」

頭領は『本当に大丈夫かね?』とちょっと心配な感じのようだ。

しかし今の冒険者ギルドで一番信頼のある事務方である。

彼以外に頼める者もいなかった。

「では出発しようか、どうだ?」

ザウバとサワサがあとに着いていく。

「ギフロさん、サワサさん、あなた達は頭領の護衛なんですからし

「っかりしてくださいね」

後ろからザウバが、ある意味失礼なことを言ってくる。

「おいおい、俺がそんなに頼りないか？こいつらは案内人兼取次ぎ役だ」

「そうでした。頭領お気をつけて」

頭領とその案内人ギフロとサワサの3人はそう言ってガウスレバス領に向けて出発した。

ドマスケルニア帝国、秘密のところ

報告する下っ端「お頭、冒険者ギルドの頭領がどこかに行くようですぜ」

偉い人「なんだ？何かあったのか？」

下っ端「それが皆目わかりやせん」

偉い人「ん〜ん、ここ何年もあの頭領が出ることなど無かったのにな」

下っ端「そうですねえ」

偉い人「何かあるのかもしれんな」

下っ端「へい」

偉い人「よし！お前追いかける、そして調べてこい」

下っ端「へ？俺がですか？」

偉い人「他に誰がいる？俺たちやあ他にやらんきやいかんことごときたんだよ。一番のお偉いさんからの調べ物があつてな」

下っ端「……」

偉い人「いやなのか？」

下っ端「へいへい、わかりましたよ、行きやあいいんでしょ行きやあ！」

偉い人「そうだよ、行ってこい」

下っ端「へいへい」

下っ端は頭領たちのあとを追った。

## 53 話目 面談

ガルバジンガウスレバス市、ガウスレバス家の屋敷、冬始の月17日

冒険者ギルドの頭領が来ると家令から連絡を受けた。

冒険者ギルドの頭領は平民ではあるが、その影響力が大きく、騎士団や衛士などとの繋がりも強い。

基本的に政治には関わらないが、それでも無視できる存在ではない。商業的なこともやっており、主に冒険者に関わる物についてはまず無いものは無いというほど扱っている。

「しかし、なんでまた冒険者ギルドの頭領が来ることになったのだ？」

「いえ、わかりません。申し訳ありません」私の疑問に家令頭のセバスが答える。

「いやいや、お前の責任ではあるまい。セバスが解らなければ誰もわからないであろう」

そんな会話を交わしていた。

午後になり頭領が訪れた。事前にどういった用件で来るか何も無かった。

応接室に通し話を始めた。

「はじめまして、ガルバジ・フォン・ガウスレバスです」私の挨拶に頭領も返してくれる。

「冒険者ギルドの頭領をやっているドミンゴです」

見たとおりの貫禄のある声だ。

「冒険者ギルドの頭領がこんなところまで来るなんてどうしたのですか？」

「そうですね、私がまだ現役だった頃は何回か来た事はあるんですが」

そんな感じで頭領が現役だったころの話を交え、昔のガウスレバス領の話に花が咲いた。

「そうでしたか、貴方が巡回診療を先代に勧めてくれたのですか」

「昔のことです、あのときはそうでもしないと子供達が全員死んでしまうかもしれなかったですから」

「確かにそうですね、巡回診療のおかげであのあと助かった子供達が随分いたようです。いつとき治癒士不足で巡回が途絶えていましたが、腕のいい治癒士殿が来てくれたおかげでまた再開することができました」

「そうですね、治癒士不足だったのですか」

「そうだったんですよ」

「しかし良かったですね、治癒士殿が来てくれて」

「いやー、まったくその通りですな」

「治癒士と言えばタスクと言う方がこちらに居ると聞いたのですが」

「タスク殿ですか、彼の者が巡回している治癒士殿だが彼が何か？」

「ほう！そうだったのですか、実は今回こちらに来た理由と言うのがタスク殿のことなのです」



53話目 面談（後書き）

話は続きます。

短くて申し訳ありません。

外伝なのかな？ 数百年後のある日（前書き）

ものすごく久しぶりの投稿です。

長期間投稿無く申し訳ありません。

それでなんと言うか、本編とはちょっと違う話です。

ちょっとどころかかなり違います。

だいたい、2〜3話で終わらせて本編に戻ります。

外伝？の続きはすでに出来ているのですが、投稿する段になって『なんかこれじゃイヤだな、続きは変えよう！』と思い立ち修正作業しております。

ちょっとだけこのお話にお付き合い下さい。

外伝なのかな？

数百年後のある日

明るい日差しの中、背の高い細身の男が面白くなさそうに歩いている。

西に向かう街道だ。

野盗等が何処かに隠れて襲うのも出来そうに無いくらい開けている。

男の後ろから別の男2人が追いかけてくる。

「殿下！殿下！」

「待って下さい」

後ろの男たちが交互に言ってくる。

どうやら前に行く男と後ろの男たちは互いに知っているようだ。

「殿下はやめろ！」

追いついて来た男たちに細身の男が大きな声をあげる。

「やっと追い付きましたよ」

「殿下、朝起きたら居なくて驚きました」

2人が息を切らしながら言ってきた。

「だから、殿下はやめろと言っているだろ」

2人は納得しかねているようだが不承不承にも「わかりました、ジーク様」と返事を返す。

「そんなにお父上から言われたことが気に入らないですか？」

「そりゃあそつだろ、『検分を広めるために使いを頼まれてくれ』  
だなんて。俺だってもう18だ、十分に世の中のことを知っている  
さー！」

従者と思われる2人が『イヤイヤ、まだまだだろ』と心の中で思っ  
て目を合わせている。

「少しでも色々な経験をして欲しいと陛下は思われているんじゃないですか？」

「そうかもしれないけど、それだったらなんだったってこんな平穏なところに来させるんだ？しかも『使いをしつかりこなさないと後継者と認めない』だなんて、どう言う気なんだ？」

「まあまあ、そう腹を立てないで下さい。見方によってはこんな平穏な旅で後継者と認めてくれるわけですから」

「それにしたって、これじゃ検分を広めるなんてないぞ！もっと危ないところだったり、問題のある地域だったら色んな経験ができるのに」

「危ないところだったたらもっと大勢の人数を付けますよ、それにこんなお忍びみたいなことは無いかと思えます」

「そうかもしれないけど、これから行くところのガウスレバス市なんて學術の町って言われているだけで俺にとっては糞も面白く無い町だぞ。しかもさらに西に行くんだろ？あそこより西なんてそれこそ典型的な田舎じゃないか、キサラギ領だっけ？あんな小さなところに何かあるんだよ！」

3人の男たちは、主に1人の不平不満だが、その相手をしながら歩いて行った。



外伝なのかな？

数百年後のある日（後書き）

数百年後の話でした。

100年後なのか200年後なのか、それとももっと先の話なのか。

次回も読んでもらえれば嬉しく思います。

外伝なのかな？

数百年後のある日・2（前書き）

投稿ペースものすごく落ちてます。

申し訳ありません。

本伝のほうの続きの投稿も考えています。

外伝なのかな？

数百年後のある日 - 2

ガウスレバス市

ガウスレバス市は学術の町と呼ばれているだけあって若い学生や学者風の人間が数多くいる。

学院院と呼ばれる建物が市の中央付近にあり、そこを中心に街が広がってる。

人口もかなり多く、それにともなって色々な店や宿屋が軒のきを連ねている。

ジークは大通りを町の中心に向かって歩いていった。

「しかし、のどかなものだな。なにか刺激的なことはないのか？」

「ジーク様、無茶を言わないで下さい。ガウスレバス市は帝国内でも、もっとも治安の良い地域の一つです。平穏なのが一番いいでは

ないですか」

「そんな偽善言つなよ。夜盗とか盗賊なんかが出るほうが面白いだろっ」

御付きの二人は『そんなこと本気で思っているのか?』と顔を見合わせてしまった。

「おいお前ら、今日はどこに泊まるんだ?」

「はい、それについては前もって予約しているところがありますのでそこに向かいますよ」

物騒なことを大きな声で言い出しかねないジークをなだめながら三人は歩いていった。

翌日、食事をしながらジークが「ギルドに行ってみよう」と言い出した。

「ジーク様、なんです？」

「ギルドを知らんのか？」

「いえ、知ってますが、急にどうしたんですか？」

2人の御付兼護衛は顔を見合わせた。ここまでの道すがら何回顔を合わせたことだろう。

「ギルドに行ったら、この付近の情勢が旅の者にも簡単にわかるのではないか？面白そうな被害の駆除とかが出ているかもしれないだろう」

確かに前半についてはその通りだろう。

冒険者ギルドには色々な依頼が持ち込まれる。

庭掃除から、巨大ベヒモスや悪竜と呼ばれるものの討伐まで様々だ。

初めていった土地で、その情勢を知るためにギルドに行くのは旅なれた者にはある意味常識だ。

しかし後半の『面白そうな被害』と言うのはどうなんだろうか？

ジーク様にしてみれば市井の人々が受けている被害など『面白い』の一言に過ぎないのだろう。

大丈夫なのだろうか？このまま皇位を継ぐようなことになったら…。

「わかりました。特に反対する理由もありませんからこのあと行ってみましょう」

その後朝食を手早く済ませて冒険者ギルドに向かった。

ガウスレバス市にある冒険者ギルドはかなり大きい。

市の西側にある建物で一番大きいものだった。

高さはそれほど無いがかなりの面積を占めている。

建物の中は受付案内や依頼掲示板、各種手続き、食事もできるよう  
だ。

訓練所やそれに付随する施設まである。

入り口からロビーを見渡しながらジークは驚いた声をあげた。

「帝都にあるギルドより大きいじゃないか。なんでこんな田舎のギ  
ルドがこんなに大きいんだ？」

思ったより大きな声だ。

「ジーク様、そんなに大きな声を出さないで下さい」周りの人たちが  
入ってきた3人に視線を向ける。

午前10時過ぎで人が少なくなってきた時間だが、それでも20〇

30人ほどの冒険者がいる。

職員の数は一瞬顔を上げるが、すぐに自分の作業に戻る。

ジークが驚くのも無理は無い。ここガウスレバス市にある冒険者ギルドはある理由によって最大規模の大きさを誇る。

その理由は一部の者しか知らない。

それこそギルド長たる冒険者ギルド頭領やその他実力者、皇帝や帝国最高幹部と呼ばれる人のみである。

金銭だけの実力者はこの『知っている者』には含まれない。

ジークは再度見渡して「それにしてもなんでこんなに広いんだ?!」

入り口はジークたちが入ってきたほかにも見えるだけで2つあり、右から左を見渡すと優に100メートル以上はあるであろう。

護衛の1人がその疑問に答えようとする。

「昔からガウスレバス市の冒険者ギルドは大陸でも最大規模のものだと言われています。なんでそんなに大きいのかはサツパリさんですよ。ギルド職員もその理由を知らないようですよ」

「ギルド職員も知らないって?じゃあ、意味も無くこんなに大きいのか?」

「冒険者ギルドのマスター、頭領ですね、その人は理由を知っているようですが誰にも話しません。他のギルド幹部もそれについては口を噤んでいて何も話してくれないんですよ」

「そうなのか？」ジークはかなり面白くなさそうだった。

こんな田舎のギルドがなんで帝都にあるギルドより大きいだ？こんな田舎のギルドなんてちっさな建物で十分じゃないか！

冒険者ギルドは他の職種のギルドよりもその規模が大きく、大陸全体、また他の大陸まで広がっている。

それぞれ特徴のある建物や依頼があるようだが、それでもすべて同一組織でありかなり大きな影響力を誇っている。

ジークは『いつか俺が調べてやる！そしてくだらない理由を突き止めて、帝都のを一番大きなものにしてやる』なんて考えていた。

『帝都にあるものが一番でなければ気にいらぬ』と言う単純な子供っぽい対抗心からだった。

帝国がお金を出すわけでもなく、支援するわけでもなく、冒険者ギルドに帝都にあるギルドを一番大きくしろと言う圧力をかけようと考えていた。

3人は依頼掲示板を見に行きそこでまたジークが言い出した。

「たいして依頼なんて無いだろうって思っていた通り無いな」

順番に3人は見ていった。

20メートルほどある掲示板は10分の1ほどしか埋まっていない。

しばらく見ていくとなんだこれは？と言う依頼が出てきた。

「ん？なんだ？」

その声を聞いて護衛の2人も同じ依頼張り紙を見た。

『宛て：帝都ギルド』のものと『宛て：帝都王宮』と言う配達に関するものだった。

王宮宛てのもの？こんな田舎のギルドから王宮に何が送られているんだ？

ジークは怪訝な顔をしてそのあとは上の空でギルド内を歩いて回った。

あの依頼に書いてあったあて先の名前は影で使われている皇帝陛下の名前だったからだ。

極秘書類や機密書簡など、皇帝陛下の名前を直接表に出せないとき

に使われる名前の一つだ。

3人は昼になる前にガウスレバス市を出てキサラギ領のコバタ町に向かった。

外伝なのかな？

数百年後のある日・3・最終話

ジークは父の皇帝から言われていた通りコバタ町に着いてすぐにキサラギ邸に向かった。

「ジーク様、そんなに不機嫌な顔をしないで下さい。キサラギ序爵に失礼ですから」

3人はキサラギ序爵に面会を求め、待っているところだ。

応接室らしき部屋に通されジーク殿下の態度について話していた。

「いくら爵位持ちとは言え、こんな田舎しか治めれない田舎貴族だ。しかも序爵って爵位もちでも最下位も最下位、かるうじて爵が付いているっただけだろ」

「そうは言われても、キサラギ序爵は皇帝陛下のお気に入りでもあります」

「そこだよ、なんでこんな田舎貴族がお気に入りなんだ？父上が信じられない！それに、十分気をつけるようにとも言われた」

「気をつけると言いますと？キサラギ序爵が何かたくらんでいるのか？」

「いや、何か画策しているとかそう言うのではないようなのだが、失礼な態度を取らないようにと言っていた。でもだ！なんで皇帝の後継者である俺が、たかが序爵に下手にでないといけないのだ？」

「はあ、まあ、確かに…」

「そうだろ！？だから俺は俺のしたいようにする！」

そこへキサラギ序爵が部屋に入ってきた。

「お待たせしました」入ってきたのは年齢はたぶん15歳くらいだろう、背もそれほど高く無い。

幼さの残る顔立ちをした男性だった。男性と言うよりかろうじて少年の域を出たかなと思える感じだった。

「私が現キサラギ序爵を承っているクスタと言います」

「私がジークフライドだ」まったく尊大に返事を返した。

あゝあ、本当にあんな態度で言っちゃったよ。従者として付いてきた2人はそう心の仲で突っ込みを入れた。

一通りの挨拶を交わして話は始まった。

「父である皇帝陛下よりキサラギ序爵に会い直接書簡を渡すようにと言われてきた。これがその書簡だが中身を教えてもらいたい」

「ははは、それはなんとも直接的な言い方でございますね」

「ただの書簡を皇帝陛下の実子である私がわざわざ運んだのだ、その中身を聞くのに何が不都合ある？」

「それでしたら、運んでいる途中で中身を見てみればよかったですではありませんか？」

「イヤ、それはできん。まがりなりに皇帝陛下より手渡すまでくれぐれも開封無きようと言われていたからな。しかし届けたあとは関係ない。手渡したそのほうから話してもらっにはなんら不都合は無い」

ジークは胸をはって言っている。

「もし聞けなくとも私から無理やり取り上げれば良いと？少なくとも一回は私の手に渡して私が開封したものですからね」

クスタがその真意を正確に読んで見せた。

「その通りだ、皇帝の実子である私の命を拒むこと無かるうな」

「いやはや、これはなかなか生意気に育ったものだ」

「なんだと！我に対してその言いようは不敬ではないか！覚悟はあるのか！」かなり激昂した声を発した。

従者の者達もこれはまずいと思っっているようだ。

いくら爵位もちでも序爵など貴族の中ではなんの力も無い、殿下の気分を害しただけで爵位を取り消されるだろう。

ジークの怒りは激しく、とてもこの場で収まりそうにない。

「はあ、これは参ったね、私から爵位をとりますか？まあそれでもいいですけどね」

「言っただな！覚悟しておれ！」

そこに、隣の部屋に繋がるドアが開いて1人の人が入ってきた。ジークの真後ろだ。

「そんな短気を起こすでない」

「なんだと！俺を短気だと！」そう言って振り返ってその人を見た。

「クスタ殿、申し訳ない。我が息子の数々の無礼、許していただきたい」

そこに見たのは自分の父、皇帝であるその人がクスタに対して頭を下げている姿だった。

「父上、なんでこんなところに？それになんだってこんな奴に頭を

下げているのです?!こんな無礼な奴に丁寧なすることなど無いではないですか!」

「なんだと!」皇帝はそこで息子に向かって大声を張り上げようとした。

「まあまあ、落ち着いて、皇帝さん。私は気にしてませんから。それに爵位は本当に取り上げてもいいですから」

「イエ!それはできません。爵位はぜひ受けてもらいたい。できれば公爵を受けてもらい」

「そんなことしたら絶対に拒否しますよ。そんな地位要らないんですから。下手に地位なんかがあると国政に関わらないといけない」

ジークはポカンとしている。

なんだって皇帝である父がここにいるのか?どうしてクスタに対してこんなに低姿勢なのか?なんで公爵なんて地位を受けて欲しいなんて言うのか?そしてなぜそれを断るのか?公爵と言えば皇家に最も近い地位でこれ以上は望めないものだ。

「父上、どうしたんですか?」声のトーンが格段に落ちてしまっている。

「あゝあ、皇帝さん、何も教えずにここによこしたんですね。ちょっとは話しておいてくださいよ」

「申し訳ありません。ジークを信じてのことでしたが私の目がいささか曇っていたようです」

「そんなことないよ、皇帝さんだって若いときはそうだったじゃないですか」

「それを言われるとお恥ずかしい」

皇帝は昔からの知り合いのようにクスタと話しているが、丁寧な言葉遣いは忘れていない。

そして今までジークが見ていた上からの物言いはまったく無く、どちらかと言うとへりくだった言い方を心がけているようだ。

「ジークよ、お前の物言いはいささか私を落胆させたぞ。私からの書簡を届けるということは、届けた先にも私に対するように接して欲しかったものだ。実の息子にわざわざ託して届ける先なのだからな」

「…申し訳ありません」

「しかも今回はクスタ殿への書簡だ、より一層気を使ってもらいたかった」

「父上、それはどういっ…」

「まあ待て、今説明しよう」

「あんまり大げさに話さないで下さいね」クスタが横から言うのである。

「そうしたいところですが、なにせ事実だけでも信じられないもの

ですからご容赦下さい」

「ハア……」クスタのため息が出た。

「こちらのクスタ殿だが、大地の守護者にしてこの星の守護者、ドラゴンを従える万能の方だ」

そこからの皇帝の話は、ジークの想像を絶する話だった。

皇帝はクスタこそがこの国での最強の軍を持ち、同時に皇家を含めたすべての人々、はては生物すべてを守っている存在だと。

ジークは正直なところ半信半疑であった。

父、皇帝の話が荒唐無稽の御伽噺に聞こえたのだ。

人類・生き物すべてを守っている？ 星空の中に生活する者？ 太陽すら壊すことができる者？

話が一段落したところでジークは皇帝に声をかけた。

「父上、いくらなんでもその話は信じられません。この者がそんな者であるなど到底信じられません」

最初に比べるとだんだん話が大きくなってくるのだ。

いくらなんでも『空から降りてくる大悪魔を倒すことの出来る唯一の方』っていくらなんでも御伽噺すぎる。

そもそも大悪魔ってそれこそ昔から伝わる御伽噺ではないか。

「わしの言葉が信じられないのか？」

「まあまあ、ちょっと話が大きくなりすぎですよ」クスタが言うてくる。

そりゃあそつだろつ、あんな話信じられるわけがない。

「クスタ殿、そんなことありせん。あれでも足りないくらいです」

「私が言ってるんですから、ちよつと落ち着いてください」

皇帝である父をまるで諫めるように言っている。あのクスタという者の態度も気に入らない。

「えーと、ジーク君。まあ話だけ聞いてもわかんないよね。詳しく説明するから」

そう言つて部屋が急に薄暗くなった。

「エリ阿斯、頼む」

「わかりました」クスタの声に女性の声が返事をした。

「ちよつと急ぎ足で現在のこのブルーマーブル星、つて言つてもわからないかな？」

「私も皇帝の息子だ、ブルーマーブルくらいわかる。我々の大地のことであるつ！」

俺が何も知らないような言い方はやめろ！面白く無い。

「我々の大地か、まあ当たらずとも遠からずつてところかな。じゃあブルーマーブルを取り巻く状況を説明するね」

そう言つと帝都の精密な絵が壁に出てきた。

「これはわかるね」

「当たり前だ、我が帝都ではないか」

そう言った直後その絵が動き始めた、どんどん帝都小さくなり遙か上から見下ろした絵になっていく。

「なんだこの絵は？」

絵は止まることなくどんどん帝都は小さくなっていく、そして帝都の点になりその回りにも気が回る。

そしてどれくらい上から帝都を見下ろしているかわからないくらいなり、目の前には丸い絵が出ている。

「これがブルームーブル星、我々の大地だ」

はあ？我々の大地が丸？一応知識で知っているがこんな感じだとは信じられない

「そして我々のこの星を目指してやってくるものがある、それがこれがジアトリマと呼んでいる宇宙生物」

そう言うつと魔獣と思われる絵が出てきた。

「初めてみる魔獣だな」

「ハハハ、確かにそうだね」

「これがどうしたんだ？」

俺が不機嫌に声を返した。

「この生き物が我々のブルーマーブルを狙っている」

「それがどうしたのだ？普通に討伐すればいいではないか」

「簡単に言ってくれるね、でもこれの大きさがだいたい80メートルから100メートルくらいの大きさと知ってもそう思えるかい？」

「は？そんな巨大な魔獣など居るわけがないではないか」

「さっき言ったよね、宇宙生物だって」

「宇宙生物とは、魔獣とは違うのか？」

「まったく違う！、魔獣など宇宙生物に比べれば大人と赤子のようなものだ。イヤ、もっと違うな」

薄暗い部屋の中で動く絵はどんどん変わっていく。

ジアトリマと呼ばれるものとドラゴン、人間が並んだ絵が出てきたりした。大きさの違いが一目でわかる。

その後どんどん絵は変わっていった。

そのつどクスタが話をしてくれるが、信じられない気持ちで聞いていた。

話や説明は夕方まで続いた。

「ここまで話しても実際のところ信じてないようですね、実際そうだと思いますよ。夕食の時間ですからここまでにしませう」

クスタはそう言って父をともなって部屋を出て行った。

「殿下、大丈夫ですか？」

護衛の2人が声をかけてくる。

「お前たちはどう思った？」

「我々は皇帝陛下より事前に少し話を聞いておりました。まさかあそこまでの話とは思っていませんでしたが」

そこへ女性が声をかけてきた。

「殿下、どうぞこちらへ。お部屋にご案内いたします。お着替えのあとに食堂にご案内いたします」

そう言われて部屋を出て行った。

食事は正直言って今まで食べたことの無いような味だ。

見慣れたものもあれば見慣れないもの、どれも最高にうまい。

料理人をスカウトしてやろうかと考えた。

「ジークフライドさん、明日は先ほどの話の証拠をお見せしますの  
で楽しみにしててください」

「わかった、それにしてもその呼び方は不敬ではないか？」

「これ！失礼なことを言うでない」父上が言うてくる。

「あんまり気になるようでしたら、お父上と相談して私に処罰を下  
してもかまいませんよ。爵位を外してもらってもかまいません」

父があわてて口を開いた。

「クスタ殿、そういじめないで下され。爵位を外すことなどありえ  
ません。できれば中央に来て欲しいくらいなのですからな」

「ハハハ」クスタは笑い声を返した。

翌日、朝食をとったあとエリアスと言う女性に案内されて地下に降りていった。

父である皇帝も一緒である。

護衛も無く、こんなに無防備にしている父上をはじめて見た気がする。

そこから見たことも無い乗り物に乗せられ連れて行かれた先は、目の前に湖のあて邸宅だった。

そこでなれなれしく話しかけてくる人を適当にあしらい、クスタのあとについていった。

クスタは、湖のほとりまで行き「ちょっと待ってくださいね」そう言うってきた。

父が「見ものだぞ、わしも初めて見たときは驚愕したものだ」

その直後湖が目の前で割れていった。

あたかも見えない壁があるかのように綺麗に水が割れている。

そして割れた水の前から巨大な船ではない、しかし少しそれに似た形の物が出てきた。

巨大なものが目の前までやってきて、階段が降りてきた。

なんであんな巨大なものが空中に浮かんでいるんだ？

「どうぞ、案内します」クスタが声をかけてきた。

父上もそれについていく。

案内された船らしき中は見ただことの無い空間だ。

「窓は無いのか？」案内してくれているエリアスと言う女性に声をかける。

「どうぞこちらです」

案内された先は小さな部屋で窓がついていた。

父上やクスタが先についていた。

窓から外を見ると、地上から徐々に離れていつているのがわかる。

「なんでこんなものが空を飛べるんだ！危ないんじゃないか?!早く下に降ろせ!！」

あのとときの私は少し気が動転していたのだろう、かなり大きな声をあげてしまった。

「大丈夫だ、少しは落ち着け」父上が声をかけてくれる。

「そうは言っても初めてのことだから、皇帝さんだって初めてはあんな感じだったよ」

クスタが父上に言っている、まるで見たことがあるような感じだ。

「言わないでいただきたいですな」ちょっと恥ずかしげな表情をした。

そのまま宇宙と呼ばれるところまで連れて行かれた。

宇宙、

そこから見る景色は想像を絶するものだった。

そして目の前に広がる光景を見て、初めて父上の話が本当であると信じていることができた。

眼下には以前学術の時間に教わった我が大陸が見え、他の大陸も見える。

目線に移せば見たことも無い船のような、しかし違う形の巨大なもの、100や200ではない数が並んでいる。

「こんなものを何に使った?」「つぶやいてしまった言葉に使用人のエリアスが答えてきた。

「昨日話していましたが、シアトリマからブルーマーブルを守るためです」

「昨日の話は本当だと言うのか?」

「当然です、殿下も本心ではそう思っているのでは無いのですか?」

「そうだ、認めたくはないが昨日の話は真実であろうと思っています。

「ここまで見せられたものを考えると、どうしてもそう結論づけられる。」

「もともとは私たちと初代司令によってこうなってしまいました、その後始末のために代々キサラギ家は動いております。この星の人に迷惑をおかけして申し訳ありません」

「エリアスと言う者はそう言ってくるが、初代と言うと初代キサラギのことか?」

「初代と言うとキサラギ家の初代のことか?」

「はい、私はそのときより稼動しております参謀、及びサポートア人工的に造られた者ルティシファリクリエイトであります」

「そのときからって、もう数百年もまえのことではないのか?」

「そうです、あなた方の言うゴーレムにあたりますね私は」

「そんなバカな！お前のような話もして動きも滑らかなゴーレムなど聞いたことないぞ」

「そうですね、でもこれを見てください」そう言って右腕を肘からはずし左手で持って見せた。

私のそれまでの常識がまたもや崩れ去った。

呆然としてしばらく動くことができなかった。

そのあとは何を見ても考えることが出来なかった……

帝都に戻り父上と2人きりで話をした。

皇帝の執務室である。

あそこから戻ってきて、数日間は何も考えられなかった。

そしてその数日間で考えたことがあった。

「父上、しばらく旅に出たく思います」

少し微笑んだように皇帝は声を返してきた。

「どうしたのだ急に？」

「父上はわかっているのではないのですか？私はあまりにも無知で  
ありました。もっと世の中を見なければいけないと痛感しました。  
そしてクスタ殿が守ろうとするこの大地に住む者たちを見て回りたい  
と感じたのです」

皇帝である父は微笑むと同時に複雑な表情をした。

「そうか、わかった。ただし1人で行くのもどうかと思う」

「はい、それにつきましては、あのとき護衛についた者、あの2名を連れて行くかどうかと考えております」

その後、ジークフライドはしばらく宮殿から姿を消した。

そして再び姿をあらわしたあとはそれまでとはまったく違う青年になっていた。

皇帝を継いだあとは歴史に名を残す治世を行ったと言われている。

外伝なのかな？

数百年後のある日・3・最終話（後書き）

外伝なのかな？はこれにて終了です。

次回は本伝に戻ります。

## ガルバジと頭領（前書き）

久しぶりの投稿です。

精神的な圧迫と苦痛が無くなったので、今後は以前のように投稿できると思います。

## ガルバジと頭領

ガルバジ in ガウスレバス市、ガウスレバス家の屋敷、冬始の月1  
7日 ガルバジ

大まかな話を冒険者ギルドの頭領ドミンゴから聞き終えた。

タスク殿の作った薬を冒険者ギルドで優先的に扱いたいと言う事だ。

確かに話のような効果があるのならそう思うのも当然だろう。

ここに来たのはタスク殿が我がガウスレバス家に仕えているということ、当主である私のところに事前に話を通しておきたいということだ。

「いかがでしょう、我がギルドの要望は」

本来家臣がやっていることに、当主であっても理由も無く口を出すことはできない。

例えば、『家臣の者が家族と共に小物を作って売りに行く』とする。

そういったことに、『やってはいけない』とは言えないのである。

そういったことをするにはそれぞれ理由がある、また家臣によってもその俸給が違う。

やむを得ずやっている場合もあるのだ。

慣習として、家臣の内職に類するものについては口を出さないとされている。

しかし、冒険者ギルドのような大きな組織が関わる場合、後々不具合が起きた場合のことも考えガウスレバス家の当主である私に話を通しにきたのだろう。

小さな額であれば問題はないのだが、それなりの金額になるとそれは内職程度ではなく、『その領地の特産』になる可能性があるからだ。

そうなると話が変わってくる。

税の収入が変わりかねない。

「いや、我がガウスレバス家がタスク殿個人のことに関して言うことはありませんが、実は私もまだ半信半疑なところがありまして。本当に言われるほどの効果があつたのですか？」

「いやはや、ガルバジ殿、それは無いでしょう。ご自分の家臣の能力をご存じないなんて」

「ハハハハ」実際のところ、タスク殿についてはかなり腕の立つ治癒士とは思っているが、まさかそこまでものすごい薬も作れるとは思っていなかったのである。

もともと、治癒士と言うものは自分の治癒魔術の腕に自信がある者がるのであつて、誰が使っても同じ効果しか出さない‘薬’を作る魔導士はほとんどいない。

それにセフォリアの病気を治すほどの腕があるのなら、余計に‘薬’なんか力を入れているなど信じられないのだ。

さてどうしたものか、本当にタスク殿の作る薬がそれほどの効果があるのなら、このまますべて冒険者ギルドに取られてしまうのももつたいない。

しかし、昔ながらの慣習もあるので簡単に口を出すのもはばかられる…。

それから時間にして20秒ほどだろうか考え込んでしまった、そして頭領の言葉で気持ちを戻した。

「どうしましたか？」

頭領の言葉に私は返事を返した。

「うちの者を一緒に同行させたいと思いますがいかがですか？」

「？それは願ってもないことですが、どうされたのですか？」

翌日、ドミンゴは案内役で連れてきていたギフロとサワサ、それにガウスレバス家から取次ぎ役としてセバスと共にコバタ村に向かった。

コバタ村、冬始の月19日　ギフロ

出発して翌日コバタ村についた。今は村の入り口だ。

そろそろ昼になる頃だろう。

前回来てから、こんなに早くまた来ることになるとは思ってもしなかった。

あれから3ヶ月、随分寒くなってきている。

「頭領、ここは宿屋がいつも開いているわけではないですけどどうしますか？」

俺は頭領に声をかけた。

「そうなのか？どういうことなんだ？」

「はい、なんでもここまで来る人はそれほど多くなく、人が集まる時だけ宿屋を開けてそれ以外は閉めているそうです」

「なるほど、田舎だな」

そこにセバスさんが言うてきた。

「コバタ村にはガウスレバス家の別荘がありますので、滞在中はそちらにおこし下さい」

セバスさんの言葉で我々はガウスレバス家にお世話になることにした。

ガウスレバス家の別荘に着き頭領はタスクさんのことについて再度聞き始めた。

ここまでの道すがら話をしながら来たわけだが、確認のようだ。

頭領とセバスさん、それと俺とサワサが応接室で話をしている。

「セバスさんはタスクさんとはそれほど親しいと言うわけではないのですかな？」

頭領がセバスさんに聞いている。

「そうですね、親しくないわけではないでしょうが村人やお嬢様のほうがはるかに親しくさせて頂いているようです」

「お嬢様と言いますと、セフォリア様ですか？」

「はい、そうですねいます」

そこで俺がなんとなく聞いてみた。

「セフォリアさんは、今日もタスクさんのところに？」

頭領が俺の言葉に怪訝な顔をしている。

「あ！セフォリアさんって普段タスクさんのところに手伝いに行っているようなんですよ」頭領に俺が簡単に説明をする。

頭領がセバスさんに顔を向けて「そうなのですか？」と聞く。

「はい、お嬢様はタスク様にお礼も兼ねてお手伝いさせていただいているようです」

普通に考えれば爵位持ちの家の令嬢が、魔導士とはいえ『手伝い』に行くなど普通は考えられない。

しかし長年苦しんでいた病気を治してもらったというのは、セフォリア本人にとっても、父のガルバジにとっても周りが思っている以上に感謝していた。

セフォリアは感謝以上の気持ちもあって手伝いに行きたいと言ったのだが、父ガルバジは感謝に絶えなく手伝いに行きたいと言っているのだと思ってセフォリアの行動を許していた。

ガルバジの感謝の気持ちもまた多大であったことは間違いの無いことだったからである。

いくつか頭領は質問を繰り返し、「それでは明日タスク様のもとへ伺いましょう。夕方にはセフォリア様も戻られますので一緒に食事はいかがでしょう」とセバスさんが言ってくれた。

## ガルバジと頭領（後書き）

次話の投稿についてですが、投稿予定が立ちましたら活動報告に書くつもりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3087q/>

---

2億光年の先で・・・・・・・・

2011年10月14日19時05分発行